

第一部

戰

前

篇

(一八九七年—一九四五年)



## (一) 啓蒙の時代

### 1. わが国に於ける労働者教育運動の発端

#### (労働組合期成会)

労働者教育とは、労働者が現におかれている社会的、政治的、経済的地位を認識し、その地位の向上をはかるためには、どうすればよいかということを、自主的に判断する上に参考となる、いろいろの知識を労働者に対し授ける教育であると私は理解する。

日本でこの労働者教育が開始されたのは、一八九七（明治三十）年からであり、これを始めた人は一八八〇〜九〇年代、出稼労働者としてアメリカに渡り、労働するかたわら、労働問題の研究をした沢田半之助、城常太郎、高野房太郎らと、同年代アメリカで苦学してイエール大学を卒業し、キリスト教的社会改良を志して帰国した片山潜であった。一八九六（明治二十九）年一月、日本に帰った片

山は、翌九七年三月東京神田三崎町に「キングスレー館」と称するセツツルメントを開き、その事業の中で「青年俱楽部」「社会問題講演」「労働会月次懇親会」「職工教育会」などを主催した。「就中最も注目すべきは職工教育会にして、此の会は一度生徒一名とまでなりしことあるも、片山氏堅忍して止めざりし結果、今や頗る面白くなり來り、会員は十数名になれり」と片山と西川光次郎「合著」の「日本の労働運動」一岩波文庫版一八五ページは述べており、労働者教育に深い関心をもつたことを示している。

また沢田、城、高野らも一八九六（明治二十九）年相ついで帰国したのであつたが、在米中の一八九〇（明治二十三）年夏「歐米諸國に於ける労働問題の実相を研究して、他日我日本に於ける労働問題の解決に備へん。」（片山前掲書一八ページ）と、サンフランシスコで「職工義友会」を起して労働問題を研究し、中でも高野は、AFLの会長サミュエル・ゴムバースから、日本におけるAFLのオルグを依嘱されるほどの厚い信任を得た。

帰国した沢田半之助と城常太郎は、日清戦後の日本の産業革命が急速に進展している状況を見て、「日本に於ける労働運動の時期已に熟せり」（片山前掲書一八ページ）と判断し、翌一八九七（明治三十）年四月、東京麹町区内幸町に「職工義友会」を設立し、「職工諸君に寄す」と題する長文の印刷物を作つて、諸工場に大量に配付した。この文書の中で彼らは、歐米資本の日本への進出に備えて労働者の団結の必要を強調し、「同業組合」（労働組合の意味）と「共働店」（消費組合の意味）の

設立を呼びかけた。

彼らはこの運動の一層の発展をはかるため、在米当時の同志で、帰国後横浜で洋字新聞「アドバタイザー」の記者をしていた高野房太郎の協力を求めた。高野は快諾し、職を抛棄してこの運動に參加した。高野は片山潛や鈴木純一郎、佐久間貞一、島田三郎、松村介石など有力な知識人の協力を得ることに成功し、六月二十五日夜、最初の「労働演説会」を神田美土代町の青年会館で開き、「労働組合期成会」の設立を提案した。聴衆千二百余人に上る盛況であった。七月五日この提案に賛成した会員七十一人で「労働組合期成会発起会」を催して組織を確立し、運動に着手した。

期成会は「労働演説会」や「地方遊説」を精力的に行つた。また片山が編集部長となつて雑誌「労働世界」を一八九七（明治三十）年十二月以降発刊した。これらの啓蒙活動の結果、同年十二月には鉄工組合が、また翌一八九八（明治三十一）年四月には日本鐵道機関手の組合「矯正会」が、そして一八九九（明治三十二）年十一月には活版工組合が設立された。京都にもその頃、活版工組合の支部が組織された。

こうして一とき、日本の地に育つかと見えた労働組合の萌芽は、しかし、これを危険な兆候とみなした日本政府が、一九〇〇（明治三十三）年三月治安警察法を公布し、強い弾圧をもつてこれにのぞんだことによつて、ふた葉のうちにつみとられた。

労働運動に関心を示した知識人の一部は、この弾圧の反動として「社会主義者」となり、「平民社」

「平民新聞」を通じて思想運動を展開するが、大衆をひきつけ、組織する力をもつことはなかった。しかも彼らの間には、分派、対立が生れ、幸徳秋水らの左派は、日露戦争後の一九〇六（明治三十九）年の頃からますます急進化して、直接行動、無政府共産を標榜し、ついに赤旗事件（一九〇八（明治四十二）年六月）、および大逆事件（一九一〇（明治四十三）年五月）の大弾圧によって潰滅する。一方片山潜らの右派は議会政策を主張し、労働者教育、労働組合組織を重視し、片山の自宅で「労働奨励会」（一九〇七（明治四十）年四月）や「労働俱楽部」（一九一〇（明治四十三）年四月）を開いて、労働者啓蒙のための小さな灯を守りつづけるが、一九一一（明治四十四）年末発生した東京市電ストライキを片山が指導し、煽動したとの容疑で、翌一九一二（明治四十五）年一月検挙されたことによって右派の運動も壊滅した。

### （友愛会）

労働者教育の新しい芽を、堅く凍てついた土壤の中から再びもえ出させたのは、東大出身の法学者鈴木文治（一八八五—一九四六年）であった。彼は一九一一（明治四十四）年秋、東京朝日新聞社を退社し、十一月から三田四国町の統一キリスト教弘道会幹事をするかたわら、会の機関誌「六合雑誌」の編集を担当し、同時に人事相談所を開いて、労働者の「家庭の些事より人生問題の煩悶解決等の問題」をひとりでうけもった。また一九一二（明治四十五）年一月から、同所の惟一館の講演場で、毎

月十五日に「労働講話会」をはじめた。これは後に安部磯雄の注意もあって「通俗講話会」と改称し「余興として琵琶や浪花節や幻灯、活動などを呼び物に、法律や経済、倫理、道徳等に関する卑俗な講話をやつた。」（鈴木文治「労働運動二十年」四〇ページ）

さらに三月一日から毎月一日に、労働者俱楽部を設けた。労働者俱楽部では、彼自身「身銭を切つて碁盤、将棋盤各一面を求め、教会の信者に疊屋さんのあつたのを説いて、仲間に加入させ、薄ベリ一枚を寄付して貰つて、図書室の板敷に敷き、一日を私も相手になつて遊び暮した。私はこれら俱楽部員諸君の遊戯の相手をしつつ、人生を談じ、労働問題を説いた。」と鈴木は自伝「労働運動二十年」

（四〇ページ）の中で述べている。

こうして鈴木は彼の周囲に集つた労働者の生活の実態を知るにおよび、「基督教的人道主義の立場から」労働者の生活向上をはかるため、一九一二（大正元）年八月一日、労働団体「友愛会」を起した。会員数は鈴木を含め十五人であった。

友愛会は労働者の「相愛扶助」「識見の開発、徳性の涵養、技術の進歩」「地位の改善」を綱領として細心の注意を払いながら船出した。

「社会運動としての友愛会のスタートは、元来一種の労働教育であった」と鈴木は回想する。（前掲書三〇六ページ）「私が友愛会の第一例会に於て試みた講話は『権利義務の話』といふのであった。私は此講話に於て先づ、公法上、私法上に於ける権利義務の解説をなし、次に労働者の生存権、労働

権、団結権等の話をした。会員は初めて開かれた秘密の山にでも分け入ったように、眼を輝かして聞いていた。彼等の生活には長い間、『義務』と『服従』とがあったのみで、『権利』と『主張』とはなかったのである。『権利』の前に眼を開かれたる彼等の面貌に『光』の躍るべきは当然である。」

こうして「労働者の教育の結果、幾多の社会的問題に関して、科学的知識を獲得し、労働運動の合理性に覺醒し来れば、運動それ自体の上に勇気と確信とを増し来るべきは、蓋し当然の理である。」

と信じた彼は「講演会」「講話会」を精力的に開催し、また機関紙「友愛新報」を発刊して、労働者の啓蒙につとめた。その結果友愛会の組織は一年後には会員數千三百一十六人に達するまで成長した。一九一三（大正二）年十月三十一日、友愛会は神田美土代町の青年会館で「創立一周年記念社会問題講演会」を開いた。鈴木文治が「友愛会創立の精神」を、高野岩三郎が「社会統計論」、堀江帰一が「労働者の團結」、安部磯雄が「労働時間問題」を講じたが、この講演会に参加した慶應大学生、野坂参三は「しだいに身うちが熱くなつてくるのを感じ」、「またある目が開かれた思い」がした。

これが動機で彼は半年後に同会の贊助会員となり、一九一五（大正四）年五月には機関紙「労働及産業」の編集員として参画し、一九一七（大正六）年三月、大学卒業とともに友愛会書記となつて、労働運動家、職業革命家としての新しく、そして険しい道を歩み出すこととなる。（野坂参三「風雪のあゆみ1」）

ただ一回の講演も人々の心の琴線に触れ、目を開かせて、彼等の進路を照らす巨大なともしひとなる力をもつことを示す一つの事例である。

## 2. 友愛会舞鶴支部の創立と啓蒙活動

京都地方の労働者で、最も早く友愛会とかかわりをもつたのは、舞鶴海軍工廠の工手会津弥五郎であった。一九一四（大正三）年、彼は友愛会本部に規則書の送付を依頼したところ、本部から規則書にそえて、詳しく述べて説明した手紙を送ってきた。この手紙に感激した会津は、同僚によびかけて会員四十三人を集め、一九一五（大正四）年一月、「友愛会京都分会」をつくった。その後会員が三百人に達したので、同年四月二十日午後六時、工廠所在地の加佐郡余部町（現在舞鶴市）花木通の寿亭で、会長鈴木文治を迎えて、「京都支部」発会式を挙行した。鈴木はこの日「日本の労働運動」と題して二時間にわたる講演を行い、一千有余人の来会者に深い感銘を与えた。

支部では年一回、鈴木会長を迎えて講演会を催すこととし、翌一九一六（大正五）年三月二日には「米国土産」の題で、桑港労働大会参列の感想と排日の原因を、また一九一七（大正六）年四月二十九日には、「富國強兵論」の講演を行った。支部はその後順調に発展し、一九一七（大正六）年四月には、正会員一千二百人、準会員四十人を擁する大組合となつた。しかしこのことは舞鶴工廠の労働

者の階級意識が一般的に高かつた故ではなく、職場内で指導的地位にある工手、組長クラスの人々が入会を勧誘したからであり、また工廠長の木村剛海軍中将が、鈴木会長と同郷の仙台出身で、鈴木の志を諒解し、友好的態度をとっていたことによることは「運動史」の指摘するところである。（運動史七五ページ）

しかしこの友愛会支部の繁栄も、海軍省当局の指令で、一朝にして変貌した。皮肉にもその変化は一九一七（大正六）年四月に工廠長木村中将のお声がかりで、中将を筆頭に、工廠の高級將校、高等官をはじめ、四千余人の職工たちを集めて、工廠主催の鈴木の講演会が開かれた僅か一週間後のことであつた。それは友愛会が労働争議に関与し、労働組合としての性格をあらわにし始めた結果であろう。工廠の友愛会員に対する干渉は、にわかにきびしくなり、会員の結束はくずれた。

一九一七（大正六）年京都市内に友愛会支部が生れたため、その名を舞鶴支部と改めたこの組合は同年十二月と翌一九一八（大正七）年二月および六月の三回にわたり、鈴木会長らを舞鶴に迎えて講演会を開き、崩壊に瀕する組織の立直しをはかった。第一回は十二月九日、高西栄四郎が「労働者の覚悟」、田渕学「労働者の生活」、鈴木文治が「戦後の労働者」を講じ、翌一九一八（大正七）年二月十一日、余部町歌舞伎座で、聴衆千数百人を集めた講演会では、友愛会関西出張所主任の久留弘三が「相互扶助の力」、京大学生の古市春彦が「温情主義の価値」、鈴木が「文明生活と労働運動」を話した。つづく十二日、同町徳月院では、三百人余の聴衆が集って、久留の「労働者の覚悟」、古市

の「何人のための労働運動ぞ」、鈴木文治の「実力第一」の講演が行われ、第三回の六月二十三日夜の同町寿亭での講演会では、古市が「産業組織の改造」、久留が「愛国的労働運動」、鈴木が「歌わざる英雄」を講じ、八百八十人の聴衆を集めた。しかし支部幹部の懸命の努力にもかかわらず、工廠当局の切崩し工作のために力尽き、設立三年半後の一九一八（大正七）年八月、舞鶴支部はついに壊滅した。

舞鶴支部が誕生した前年の一九一四（大正三）年八月、歐州で第一次世界大戦が勃発した。日本の経済界はその影響で、それまで低迷していた景気が、一層の沈滞を深めたが、一九一五（大正四）年後半の頃から立直り、海運業を先頭に金属工業、機械器具工業、化学工業、造船業、繊維工業などがとにかく活況を呈し、工場の増設があいつぎ、労働者の都市集中は顕著となつた。友愛会の入会者も一九一五（大正四）年には月々二百五十人から多い月には一千二百人、また一九一六（大正五）年には月に一千八十八人から二千二百人を数えた。

### 3. 友愛会京都支部の成立と啓蒙活動

（高山義三の登場）

友愛会が上昇気流にのった一九一七（大正六）年二月、京都市内第一の大工場、奥村電機商会の熟練工百五十二人が、友愛会京都第一支部をつくった。同五月十五日、彼らは岡崎の六盛俱楽部で、支部結成式を挙行し、会長鈴木文治を招いて「労働問題」の大講演会を開催した。

たまたまその会場前を京大法科の学生、高山義三（一八九一—一九七四年）が通りかかった。彼はかねて「弱者のために尽したい」というキリスト教的観点から、労働問題について考えなければいけないと思つていた矢先だったので、この看板につられて中へ入つていった。」（高山義三著—わが八十年の回顧、四二ページ）

高山義三は一八九二（明治二十五）年六月十五日、京都市五条大橋東入二丁目、中村栄助の三男として生れ、三歳のとき祖母の実家、高山家の高山姓をついだ。油商を家業とした父の栄助は、京都商工会議所の副会頭、京都市議会の初代議長、第一回の衆議院議員などの要職についた京都政財界の有力者であり、また同志社の創立者、新島襄の人格にうたれて受洗し、敬虔なキリスト教徒としての生涯をおくつた人であった。

高山は京都府立二中、第五高等学校を経て一九一五（大正四）年秋、京大法科に進んだ。五高では古市春彦、田万清臣らとともに、弁論部に属した。五高在学中、山室軍平の講演に感激し、世の人々を救うため、学業をなげすてて山室の救世軍に入ろうと真剣に考えた高山の心情が、中学時代すでに友愛会と、かかわりをもつていたといわれる、古市春彦と生活を共にする中で、貧富の問題から労働

問題へと傾斜していったことは必然であったと推察される。

友愛会支部結成の日、彼の足が鈴木の講演会場に向ったのは、偶然なのか、または意識しての行動であったかはともかく、高山は鈴木の講演に深くうたれた。熱心に聽講していた高山の態度に注目した鈴木は、講演後高山に対し労働者たちと夕食をともにするようすすめた。高山は喜んでその誘いに応じた。その席で支部長選挙が行われたが、誰もなりてがなく、時はすぎた。鈴木は業を煮やして、「まあ一つあんたが組合長になって下さい」と高山に頼んだ。「そうしたら、皆んなが一齊に手をたたくものだから、断るわけにもゆかず、友愛会京都支部長になってしまった。」と高山は自伝の中で述べている。そして「労働組合の組合長」になつても、「首切りの心配のないのは、その中にいた学生である私一人だった」と、『まだ大学生の数が少なく、社会でも非常に高く評価』していくところが彼を組合長に推すことになったのだと説明している。しかし、彼がそれを受諾した根底には、彼のキリスト教的博愛精神と、弱者の味方になるという正義感、ならびに新奇なものにとびつく彼の持前の旺盛な好奇心があつたことは否めないであろう。

こうして「弱冠二十三歳」で、高山は京都の労働運動の最高の指導者となり、やがて関西労働運動界の重鎮となつてゆく。

労働者にとってのきびしい冬の日が漸く遠ざかって、『民本主義』の思想が、東大教授、吉野作造を先頭にして論壇をにぎわはじめてはいたが、なお封建的な氣風が色濃く残り、労働者の社会的地位

位がまだ極めて低かったそのころ、労働運動の世界に進んで身を投じたインテリ青年は極めて異例であった。わずかに、前述の野坂参三が、そして一九一五（大正四）年早大出の久留弘三が、また翌年に日大出の酒井亀作が、それぞれ友愛会本部に入ったことが、その稀な事例であった。神戸のスラム街で、キリスト教の伝道をするかたわら、貧困者救済にあたっていた賀川豊彦が一九一七（大正六）年五月アメリカ遊学から帰国後、友愛会の評議員となり、労働問題に積極的な関心を示しはじめた時期であった。

一九一七（大正六）年友愛会は創立五周年を迎える、同四月には会員二万二百九十人、支部数百近くを擁する大労働団体に成長していた。関西では二月に神戸連合会、五月に大阪連合会が組織された。この量的発展に加えて、友愛会は質的にも多少変化しつつあった。労資協調主義を完全に捨てたわけではないが、鈴木文治は四月六日、東京の惟一館での五周年記念大会で、「労働者が賃金をうることとは、その労力にたいする報酬であって、これはけっして、資本家の恩恵ではない。」と述べ、つづいて「資本家は……労働者の幸福の増進、その地位の向上というようなことを、無視しているにかかわらず、ひとり労働者にのみ、いわゆる温情、服従の態度を求めるることは、利己的きわまる議論である」と主張した。

### (高山の啓蒙活動)

友愛会支部長としての高山が最初に着手したのは、片山潛や鈴木文治の場合と同じく、労働者の啓蒙教育であった。彼はまず友愛会の機関紙「労働及産業」を会員に配付して、会の主張を理解せしめるよう努めた。この機関紙はもと「友愛新報」と名付けられていたが一九一四（大正三）年十一月改題した。その発行部数は改題当時三千部であったが、一九一七（大正六）年四月には二万七千部に達し、その論調もはじめの修養主義から労働者の団結を重視する方向へと転換していた。

高山は月一回の支部例会で労働者団結の必要を訴え、またしばしば京大教授らを招いて講演を依頼した。

一九一三、四（大正二、三）年のいわゆる「沢柳事件」を通じて、大学の自治をかちとつたそのころの京都大学、特に法科大学には、河上肇・河田嗣郎・米田庄太郎・財部静治・田島錦治・佐々木惣一・市村光恵・戸田海市その他の優れた教授が妍を競い、自由主義、民主主義の気風がみなぎっていた。彼らの多くは、友愛会の運動に、かねて好意をよせ、学生高山の活動に対しても理解を示した。中でも財部・河上両教授は、第一回の支部集会にあたり、高山激励の書簡を送った。

後に述べるように、京都の労働者教育の上に果した大学教授の役割は極めて大きいが、労働組合と大学教授との最初の結び付きは、高山を媒介としてはじめられたのであった。一九一七（大正六）年

七月には、三高教授栗原基と、京大教授山本美越乃が講演した。山本の演題は「消費組合について」であった。また十月には、同志社大学教授、滝本誠一が「資本と労働者」を講じた。

大学教授や学生たちの一層の協力を期待した高山は、同九月十七日、京大学生集会所に河田・河上・米田の三教官を招き、友愛会大阪連合会幹部の松岡駒吉らを交えて夕食を共にしながら、労働問題を話し合い、十月三十日には京大弁論部主催のもと、学内で三百人の学生を集めて、鈴木文治の「戦後における労働問題」と題する講演会を開催した。官学の講壇に労働団体の代表者が上るということは当時としては異例であった。

高山はまた公開演説会を開いて、広く労働者および市民に労働問題の重要性を訴え、友愛会の精神を説いた。十月三十一日午後、三条柳馬場の基督教青年会館（現在のY.M.C.A）および、北新地歌舞練場で行つた講演は次の通りであった。

開会の辞 福田竜雄（大阪連合会オルグ）

友愛会綱領朗読 高山義三

労働者に対する利益分配 花園繁蔵

労働運動の前提

労働問題の将来 福井孝三郎（大阪朝日支局長）

労働會議所論

竹上藤次郎

友愛会創立の精神

鈴木文治

第三者より観たる労働運動

渡辺俊雄（京大教授工博）

（運動史八五ページ）

以上のような啓蒙活動を通じて、そのはじめ会員百五十二人であった第一支部は、半年後の大正六年末には三百人に達した。その中に、後年京都の労働運動界をリードした奥村甚之助、半谷玉三らが育つた。

第一支部と併行して、日出新聞社内に日出分会（六人）が、またやや後れて、京都織物会社の職工を主体とする第二分会が生れた。しかし両者とも永続しなかつたようである。

さらに一九一八（大正七）年一月十五日には、会員十八人の西陣支部が発足した。西陣支部は毎月紅梅湯で例会をひらき、併せて以下の講演を行つて会員の啓蒙につとめた。出席者は毎回四、五十人に上つた。

四月二十日

「西陣資本家対労働者の風紀改良問題」幹事上田藤松、「西陣と労働運動」幹事佐々木隆太郎

五月一日

「労働問題の起源」幹事上田藤松、「戦後の労働界」幹事佐々木隆太郎、「京都織物業界の労働と産業」第二支部長土屋順藏、「労働者の自覚」第一支部幹事矢野増次、「尾崎前法相を語る」

第一支部長高山義三、「予が労働者保護について」労働保護会常任理事月島浪治、「同盟罷工と西陣」支部長中村辰之助

六月五日

「入会の動機」草野文作、「楽しき労働」佐々木隆太郎、「所感」土屋順藏、「共働主義」大阪連合会主務加藤滋、「自重せよ」中村辰之助

(運動史八九ページ)

#### 4. 「民衆の中へ」

(社会運動への学生の参加)

高山が労働運動の世界にとびこんだこの時期は、あたかもロシア革命の陣痛期であった。一九一七年三月ロシアでは帝政が廃止され、つづく十一月にはレーニンの指導下、労働者、農民、兵士らの力によつて、ソビエト政権が樹立された。入り乱れる報道のため、革命の真相はうかがい知ることはできなかつたが、全世界を震撼させた世界最初の社会主義革命の勃発は大きな驚異であり、先進的な労働者や知識人の関心をあつめた。

友愛会本部では、その直後の十一月二十日、本部樓上で「大学生、労働者連合大演説会」を催した。これは両者にとつて初の共同演説会であった。会場は立錐の余地のない盛會で、聴衆は異常なほど興奮した。その夜労働者、学生ら五十餘人が集つて、労働問題の研究團体「労学会」をつくった。その頃新聞で、ロシアの「ソビエト」のことを、「労兵会」と呼んでいたのにあやかって、この名をつけたと、提唱者野坂參三は説明している。翌一九一八（大正七）年六月、官憲の誤解をはばかって、その名を「社会問題研究会」と改めるが、この会の誕生を契機として、労働者と学生の連帶は深まり、学生の「民衆の中へ」の運動が展開されはじめる。

この運動に一層の拍車をかけたのは、一九一八（大正七）年の米騒動であった。それはこの年一月以来騰勢をつづけた米価が、七月には一升（一・ハリットル）につき、年初の二倍の四十錢をこえ、五十錢に迫つたことから、富山県魚津町の漁民の主婦數十人が、陳情のため集合したことに端を発し八月三日には県下隣接市町村住民の大衆行動となり、忽ちそれが全国に波及して、一道三府三十二県三十六市百二十九町百四十五村、計三百十ヶ所をまきこんだ未曾有の大騒動となつた。

京都では八月十日夜、東七条の住民が中心となつて、米屋三十二戸を襲つたのを皮切りに、十一日には全市にわたり、二万余人の民衆が蜂起し、十三日まで不穏状態はつづいた。

政府は警察および軍隊を動員して鎮圧にあたり、九月十七日、一応波及を食いとめたが、この思い

もかけぬ全国的大暴動の勃発は、時の支配者たちに大きな脅威を与えた。そしてかれらに国民生活安定の重要性を思い知らせ、その施策の不備を認識させた。國や地方自治体が社会事業行政に着手したのは、この事件を契機としてであった。國民もまた、民衆蜂起の力強さをあらためて知り、青年学生の政治や社会問題への関心は一段と高まった。

「民衆の中へ」という合言葉が、多くの純真な学生の心をとらえた。社会運動の中へ身を投じることに、彼らは崇高な生甲斐を感じた。一九一七（大正六）年東大法科を卒業して、麻生久や山名義鶴と水曜会を結成し、社会問題を論じていた棚橋小虎は、司法官の職を投げうつて、一九一八（大正七）年九月友愛会に入った。また華族の息子、山名義鶴は高野岩三郎博士の助手として、同年十月、月島に労働保健調査所を開いて、労働者街に住みつき、労働者の生活調査をはじめた。棚橋もまたその居をここに移した。山名らは月島に労働講習所を開いて労働者教育を行った。この講習所からは、後に労働運動界の重鎮となつた山本懸藏、風間丈吉、金子健太らが育つた。（大河内一男・松尾洋「日本労働組合物語。大正」一一七ページ）

東大法科の「普選研究会」のメンバー赤松克麿、宮崎竜介、石渡春雄らが、学内に「新人会」を創立したのが一九一八（大正七）年十二月五日、早稲田大学の学生浅沼稻次郎、三宅正一、稻村隆一、高津正道らが「民人同盟会」を結成したのは、一九一九（大正八）年一月二十一日であった。後に同志社大学教授となり、京都や大阪で労働者教育にたずさわる波多野鼎、林要、住谷悦治、河野密らは

ともに「新人会」から生れた。（東京帝大新人会の記録、四一三ページ）

### （京大の「労学会」と同志社大学の「白労会」）

新人会や民人同盟会よりやや早く、一九一八（大正七）年秋、高山義三、古市春彦らの肝入りで、京大学生水谷長三郎、松方三郎、小林輝次らが「労学会」をつくった。「京都地方学生社会運動史」（八ページ）によれば、「米騒動後、間もない九月、京大基督教青年会館に集つた労働者約二十名および、学生約十名とともに「労学会」なるものを結成した」とあり、一九一八（大正七）年十月十五日発行の友愛会神戸連合会の機関紙「新神戸」は、その「遠近消息」欄に「京都に於ては大学教授、学生間に社会問題研究会、読書会設立せらる」と報じている。これは「労学会」のことを指すのである。また「運動史」は、労学会創立の月を、東京、京都両帝大弁論部の連合大演説会（十月二十七日市会議事堂）の開かれた月としており、いずれにしても、「新人会」より早く創立されたことはたしかである。この会の中心人物の一人の水谷長三郎（一八九七—一九六〇年）は一八九七（明治三十九年十一月四日、京都府紀伊郡伏見町（現京都市伏見区）京橋の元紀州藩舟宿「水六」の十二代目、水谷定次郎の二男として生れ、伏見第二尋常小学校（現南浜小学校）、京都二中、第三高等学校を経て一九一八（大正七）年九月、京大法科に入学した。そして高山義三にすすめられて友愛会に入った。高山は自伝の中で「……彼は二中の後輩で、私が京大生となつてから、二中へ労働問題を話しに行つ

たのに共鳴したのがもとで、私のもとに馳せ参じたのだった。」と書いているが、これは高山の思いちがいで、高山が京大生になつた大正四年九月には、水谷は既に二中を卒業し、三高に入つていた。高山の二中での講演は、大正七年のころで、水谷が高山の影響をうけたのは、三高在学中のことであろう。三高在学中、彼は大宅壮一とともに賀川豊彦について受洗した。

京大の「労学会」について、四国学院大学教授伊藤祐之は「水谷長三郎伝」の中に、三高同窓会報登載の次の思い出を寄せている。

「京大の労学会は、日本における社会科学研究会のさきがけである。東大の新人会より少し早く誕生している。産みの親は、当時大学の助手をしていた高山義三君と、同じく助手をしていた古市春彦君であった。いづれも京大Y.M.C.Aの先輩。会員募集の掲示を見て即刻入会申込のため高山君に面接した。同君と「将来のレーバー・リーダーを養成するのが目的だ」などと語り、けん昂たる意氣当るべからざるものがあつた。

この労学会は未だ純粹な研究団体であり、間もなく河上博士の指導の下に「コンミュニスト・マニフェスト」の読書会などがもたれた。櫛田さんや恒藤さんも出席された。当時の会員に水谷長三郎、小林輝次、赤松五百麿、松方三郎、福田千里、藤井崇治の諸君がいた。」

また「水谷長三郎伝」に集録されている水谷の文春寄稿文によれば、「労学会」の名は河上博士の命名によるもので、会員数は二十数人であったとしている。そして水谷はこの文章の中で「『民衆の

中へ”を合言葉に、できるだけ実際運動にタッチしようとしたが、日曜日ごとに河上肇先生のおともをして、労働者の集りによくでかけたものである。河上博士は小学校出の労働者諸君を前にして、かなりむづかしい社会主義の話を、例の美しい言葉で、じゅんじゅんと説かれ、お話をあと、みんなですうどん一杯をすすつたのを思い出す。』と述べている。

伊藤は「労学会」を純粹の研究団体としているが、既に友愛会に入っていた水谷は、河上博士とともに、労働者と接触することにつとめ、また小林輝次は、東七条の労働者街に住みこみ、セツツルメントを開いて労働者と交わり、友愛会七条支部の組織に成功するなど、実際運動に積極的に参加する会員もいた。後年の電発総裁藤井崇治や江村高行も一九一九（大正八）年二月一日、神戸連合会主催の「学生、労働者連合労働問題演説会」に河上博士とともに出席し、また同月普選運動の弁士として活躍した。

京大の労学会とならんで、そのころ同志社大学にも、櫛田民藏教授の指導の下に、「白労会」という労働問題研究の団体が結成されていた。その主要なメンバーに京都府会議長堀田康人の息子の堀田康一や東忠統がいた。彼らはともに友愛会の講演会に再々出演して高山を助けた。

こうして京都の労働者たちと先進的な学生との交流ははじまり、急速にその緊密を加えるわけであるが、学生たちが研究の過程で、思想的に次第に社会主義へと傾斜するにつれて、その影響はやがて

労働者たちの間にも及びはじめる。しかしそのころ社会主義の思想が、労働者に何の抵抗もなく受け容れられたわけではない。水谷はさきの回想文の中で、河上博士が労働者を前にして、社会主義の話をじゅんじゅんと説かれたと述べたが、そのころのふんいきとしては、一般市民は勿論、労働者たちにすら、社会主義といえば、恐ろしい不逞、反逆の思想であり、「主義者」とは近づいてはならない異端の徒とされていた。「主義者」と聞くだけで人々は怖れた。

野田律太は当時の京都の労働者の、社会主義に対する激しい拒絶反応を、次のように語っている。

「労学会結成間もない一九一八（大正七）年十一月のある日、高山は友愛会例会に河上博士を招いて講演を依頼した。その頃マルクス経済学に傾倒はじめていた河上は、その講演の中で、「労働階級と資本家階級とは、相対立する二つの階級で、絶対に調和するものでは無く、両階級は○○（闘争？）を展開するものである。」（野田律太「労働運動実践記」一〇七ページ）と説いた。高山もまた「博士の所論は是れ友愛会の目的である。」と述べた。かねて鈴木文治会長から、労資の関係は、車の両輪の如きものとの、労資協調論を聞かされていた労働者たちにとって、資本家を仇敵のように論断し、労資は利害相反するものとする博士の論旨は、まことに意外であった。講演会閉会後、会員はこの問題をめぐって大騒ぎとなり、「果ては泣いたり怒鳴つたり」して收拾つかなくなり、結局会長に電報をうつて呼びよせるということになった。急電に接した鈴木会長は十二月一日急いで入洛し、二日、三日と高山、古市および櫛田民藏らと懇談の後、四日鈴木が京都支部臨時有志懇親会を開いて、今後

の方針を協議し、円満に事態を收拾したということである。そして「これを転機に、友愛会京都支部は社会主義に対してもだいに親近性をもつことになるのである。」と運動史（一〇一ページ）は述べている。

## 5. 友愛会京都支部の躍進と衰退

### （普通選挙運動）

一九一八（大正七）年当時の京都の労働者の階級意識が、まだ極めて低かったことは、上述の野田律太の回想を通じて、推量することができるが、しかし民本主義思想の一般的昂揚と相まって、彼らの政治や労働問題への関心は急速に高まり始めていた。

友愛会京都支部は、米騒動後の十月二日、新京極裏の受楽亭で、また同五日第二高等小学校で、労働問題大演説会をひらいた。講師は京大教授、法学博士、田島錦治、同市村光恵、同佐藤丑次郎及び鈴木文治で「新神戸」第三号（大正七年十月十五日刊）は「何れも盛会を極め、大成功を博したり。」と報じている。労働者の権利意識が漸く高まるにともない、普通選挙を要望する声も、次第に大きさを加えた。

この政治状況に着目した高山は、友愛会が進んで普選の提唱者となり、その運動の先頭に立つことが友愛会の声価を高め、労働者の啓発に役立つものと確信し、運動展開の計画にとりかかった。彼は友愛会の各支部に例会を開かせて普選の急務を説き、一九一九（大正八）年二月十二日には、岡崎の六盛俱楽部で、京大の佐々木惣一教授を講師として、二時間におよぶ講演会を催し、会員の啓蒙をはかった。そして二月十五日「憲政の神様」と仰がれた尾崎行雄を東京から招いて、岡崎公会堂で「普選期成労働者大会」を開いた。

大会当日、友愛会員ら三百人は「われらは選挙権を要求す」「普選期成労働者大会」と大書した旗をひるがえして、京都駅前に尾崎を出迎え、尾崎を宿舎に送った後、四隊に分れて賀川豊彦作詞の、「友愛会歌」「普選の歌」を高唱しながら烏丸通、四条通、大宮通、丸太町通を経て、会場の岡崎公会堂に向ってデモ行進した。これは京都の労働者の最初のデモ行進であった。

会場前で前日、七百人の学生を学内にあつめて、普選即行決議をした同志社大学の学生らと合流し来会した市民を前にして、野外演説を行った。会場内外には五千人の労働者、学生、市民らがつめかけた。

大会は古市春彦の開会の辞にはじまり、高山義三が議長席につき、杉本元次郎（親友会長）が河上肇作の宣言と決議文を読み上げ、万雷の拍手のうちにこれを可決した。つづいて京都、大阪の友愛会員、神戸の賀川豊彦、同志社の佐野栄一、東忠統らの演説の後、最後に「水がうつたように静まる中」

を、黒紋付姿の尾崎行雄が登壇して、普選の政治的意義を述べて、われんばかりの拍手喝采をあびた。

高山の企画は見事に成功した。この大会を通じて、労働者の自覚は高まり、友愛会発展の素地は形成された。後年の労働運動界の重鎮、辻井民之助も、この大会に参加して、多大の感銘をうけた。「大正八年一月十四日、私は意を決してこの事務所（友愛会西陣支部のこと）を訪ねて入会した。これは私にとっては生活的一大転機であり、第二の人生への第一歩でもあった。あたかもこの日は、友愛会京都連合会が普選要求のために、全組織をあげて画期的なデモ行進と大演説会を挙行する前日であった。京都で最初のデモ、翌二月十五日の朝、私は約三百人の友愛会員とともに、京都駅頭に尾崎行雄代議士を迎えて、岡崎公園までデモ行進を行い、つづいて大公会堂で開かれた普選要求労働者大会に参加した。……西陣支部の佐々木隆太郎君ら労働者が演壇に立ったが、彼ら労働者の演説がインテリの弁士に比して何らの遜色もなかつたのに、私は大いに感動させられた。」と彼は当日の印象を彼の著書「労働運動四十年」（六ページ）の中で語っている。この日の感銘を契機に、彼は専心労働運動の世界に没頭することとなる。

一九一九（大正八）年四月一日、勢力を増した京都の友愛会は市内の各支部を連合して、京都連合会を結成し、高山義三がその初代会長に就任した。

### （普選運動後の啓蒙活動）

普選運動に大成功を収めた友愛会京都支部は、その年三月十五日以降、市内各所に講演会を開いて労働者教育につとめた。

第一回、三月十五日午後七時、岡崎六盛俱楽部で開催、弁士は田崎信蔵（市會議員）、加藤辰方、井上末次郎、坂井富三郎、佐々木隆太郎（各職工）、佐藤丑次郎博士、古市春彦。

第二回、三月十六日午後七時、貞教小学校で開催、講師は高山連合会長、曇道博士、坂井、佐々木、井上、田崎。

第三回、三月二十二日午後七時、安寧小学校で開催、講師は高山会長、久留同盟会總務、堀田康一（同大学生）、大国、田崎（各市議）、福間安太郎、坂井。

第四回、三月二十三日午後七時、郁文小学校で開催、講師は高山会長、西川百子（大毎記者）、村上忠平（京華日報記者）、田中新七（市議）、加藤、久保亮一、坂井、清水九郎。

第五回、四月一日午後七時、成逸小学校で開催、講師は高山会長、市村光恵（京大教授）、辻井民之助、東忠統（同大学生）、佐々木、井上。（日本労働年鑑第一巻四五三ページ、運動史一一二ページ、労働者新聞第二号（大正八・四・一五刊））

以上五回にわたる講演会で成功を収めた後、つづいて第二回啓発講演会を催した。その第一回は五月十四日、伏見町青年会館、第二回は五月十五日、宇治県神社々務所で、宇治電、陸軍火薬庫職工らに、第三回は五月二十四日、六波羅の第三高等小学校に、約八百人の聴衆をあつめた。つづいて五月二十

六日、壬生の元祇園社に、千人の市電従業員をあつめ、富永禎三、堀田康一、東忠続、高宮嘯（日出新聞記者）、下山天心（京都連合会主事）、福間安太郎らが演説して、三百余人の入会者を得た。これについて「軌道労働者が團結して、我友愛会に加入し來りしは、實に我国中京都市を以て嚆矢となすにあらずや」と労働者新聞第十二号は驚嘆している。さらに五月二十九日、丹波口の慈雲寺、六月二日、大宮の聖法寺に、そして六月十日以後、市電現業員のために、数日連續して座談会をもち、六月十七日には金箔工への宣伝を行つた。（日本労働年鑑第一巻四五七ページ、運動史一一三ページ、労働者新聞十二号）

こうして友愛会の名は、京都の労働者の脳裡に深くしみわたり、友禅工、人力車夫、陶工、金箔工などの入会申込みが相次ぎ、五月初め会員数は五百人であったのが、後に一千二百人をこえ、支部も中央、鴨東、西陣の外、新たに壬生、北野、大宮、宇治、伏見、淀、箔友の七支部が生れ、さらに七月二十九日、七十人の水道職工による、水道支部の結成を見るなど、組織は大躍進をとげた。

（ボルガ団）

京都連合会の前述の啓蒙運動に際して、その手足となつて活躍したものにボルガ団という団体があつた。これは高山が同志社の堀田康一や東忠続らとともに、友愛会員中の氣鋭の若ものを訓練し、これを有力なオルグに仕立て上げるために結成した団体で、委員には高山義三、三木輝三、井上末次郎、

東忠続、堀田康一が選ばれ、二十歳前後の学生および労働者ら約三十人（内婦人二、三人）の団員を擁した。内八人は東忠続が団長格となつて、岡崎御所内町五九六の合宿所で生活を共にし、毎晩十数人の労働者が集つて労働問題を論じ、友愛会の演説会には各自、会社や学校を休んでその準備作業に従つた。

この合宿所には一九一九（大正八）年十月二十六日、堺利彦と生田長江が訪れて、彼らを励ました。大正期に入つて社会主義者が、京都の労働組合関係者と関係をもつた最初の機会であった。（運動史一八ページ）その夜二人は、三条青年会館での「社会主義講演会」に臨んだ。会場は満員の盛況で東忠続の開会の辞、高山の「労働運動の目標」に続いて、生田長江が「階級闘争の意義」を述べ、堺枯川が「労働者の天下」の題下、約一時間にわたり熱弁を振つた。最後に水谷の閉会の辞があつて、無事九時半に散会した。

### （友愛会の近代化）

京都の友愛会支部が、躍進的発展をとげた一九一九（大正八）年は、わが国労働組合運動が一段と高揚し、友愛会が本格的な労働組合へと脱皮しはじめた年であった。労働組合の新結成数を見ると、一九一六（大正五）年（一三）、一九一七（大正六）年（一四）、一九一八（大正七）年（一一）に対し一九一九（大正八）年は（七一）を数え、労働争議件数も一九一六年（一〇八）、一九一七年

(三九八)、一九一八年(四一七)、一九一九年(四九七)と増加している。

友愛会は一九一九(大正八)年八月三十日から三日間、東京で第七周年大会を開き、会の名称を、「大日本労働総同盟友愛会」と改めた。次に会長、副会長を含めて二十五人の理事によつて、会の最高機関を構成することとした。また組織を地方別から、職業別、産業別に改める方針をたてた。評議員にも、高野岩三郎、河上肇その他の進歩的学者の多くがその名を列ねた。最後に大会は、従来の綱領を廃止し、新しい「宣言」と「主張」を議決した。主張には「労働組合の自由」「最低賃金制度の確立」「八時間労働および一週四十八時間制度」「治安警察法の改正」など計二十項目の諸要求が盛られた。

従来の協調的性格から、本格的労働団体への成長は、世界および日本の政治、経済、社会など大状況の変化を背景としたものではあつたが、同時に、渡英した野坂のあとをうけた麻生久、棚橋小虎、山名義鶴ら東大出の水曜会関係者が、会の微温的な性格にあきたらず、その改革を提言した結果でもあつた。

高山はこの大会で七人の常任理事の一人に選任された。

#### (友愛会京都連合会の衰退)

ところがそのころ京都では、偶々起つた奥村電機の争議収拾をめぐつて、友愛会内部に深刻な対立

がうまれ、ために京都連合会は一時崩壊の危機に瀕した。

奥村電機商会は一九一九（大正八）年七月二十一日、基本賃金の三割増加と臨時手当の取消し、請負歩合の半額切下を発表したが、これを不満とした労働者は続々職場を放棄した。八月十一日、藤沼京都府警察部長が調停案を示し、会社および友愛会代表の両者ともこれを受諾したが、争議団員は満足せず、代表者鈴木、高山両人の妥協を激しく非難し、友愛会の徽章をたたきつけて脱会を宣言した。騒ぎは壬生支部、箔友支部にも波及し、連合会は危機に陥った。八月二十六日、連合会協議会で、高山は会長を辞任して顧問となり、連合会長には奥電職工の三宅幸太郎が就任した。

この年十二月、高山は一年志願兵として軍隊に入営し、労働運動から遠ざかった。

## （二）労働者教育運動の黎明期

### 1. 京都労働学校の青写真

高山義三が入営して後、友愛会京都連合会は、なお会員数三百人を呼号していたが、実状は火の消

えたような状態に陥った。しかしこれは京都だけの特殊事情で、「友愛会」は前述のとおりこの時期ますます組織に力を加え、第七周年大会の決議にもとづいて、協調主義の方針から脱却し、「近代的労働組合」への道を前進し始めていた。大会が新しい道を志向したのは、麻生、棚橋、山名ら先進的な知識人の提唱に対し、友愛会員の多数が共感を示した結果といえる。労働者の階級的自覚は呼びざまされ、それはさらに階級の本質解明への知的欲求へとつながった。そして労働者教育の新しいあり方が当面の課題となつた。

「大正八年春、友愛会大阪連合会は地方常設講座を開始した。主として法律、政治、経済、労働諸問題につき、連続又は短期の講習を催すのである。賀川豊彦、村島帰之、久留弘三という人々が主で私も時折、関西旅行に行く折に科外講演風のものを引受けっていた」と鈴木文治は「労働運動二十年」（三〇七ページ）の中で、この時期講座形式の基礎的教育が行われはじめたことを記している。

また賀川豊彦は一九一九（大正八）年五月十五日の「労働者新聞」第十一号に「英國の労働組合と労働大学」と題する短文を寄せ、イギリスにおける労働者教育の機関について紹介した。これらのこととは日本の労働組合が、労働者教育の新しいあり方を模索しはじめた一つの現れと見てよいであろう。第七周年大会の年の秋から神戸では連合会事務所内で、「労働講習会」を開始した。それは一九一九（大正八）年十一月二十日以降、同年十二月二十日まで毎土曜日夜に開講された。第一回は久留弘三が「労働運動家フェルディナンド・ラサール」を話し、第二回も同氏が「労働問題の研究方法及び代

表的著作物の紹介、労働問題解決に関する諸主義の説明」を行つた。第三回目は松任克己が質疑応答、第四回は講習生の希望により、久留が「選挙法の理論」を、そして第五回目は久留不在のため、会員が「普通選挙論」について討論した。翌一九二〇（大正九）年には一月二十二日から再開し、久留が「労働組合の進化」、三十一日には松任克己が「哲学の初步」を講じ引き続き毎土曜日講習会を開催することを決定した。

大阪では神戸よりやや遅れて連合会事務所で一九二〇（大正九）年二月二日から、毎週労働講座を開いた。第一回は鈴木文治の「欧米の労働運動」であった。そして講座の委員として久留、加藤、西尾、野田、北村の五人を選任した。第二回の二月九日は久留が「労働運動の進化」を講じ、第三回以後は、第二、第四の土曜日には久留を講師として、同氏著「労働運動」を教科書として連続講義すること、他の土曜日は会員の研究発表、討論にあて、また賀川豊彦、岸田美郎らの話を聞くことなどをきめた。神戸、大阪の両講座とも満員の盛況であったと、労働者新聞（十八号～二十一号）は報じている。

労働者教育に関するこの新しい運動が刺戟となつたのであろう。京都では京大の「労学会」の人々が、労働者に対して、より基礎的、組織的な教育を行うために、「労働学校」の設立を企画した。

一九二〇（大正九）年三月六日の日出新聞は次のように報道した。

「京都帝国大学法科、経済学科学生有志より成る労学会、新生俱楽部及東大新人会支部員等合同の

下に、今回、日本労働学校なる労働者指導団体を創立し、一般労働階級を収容して社会的一般知識を与ふべく、学科は普通部及分科の二に分ち、分科は政治、経済、法律、社会学其他とし、来る四月一日より開校すべく、校舎は日吉町正則予備学校を開放してこれに充つる筈にて、目下着々準備中なるが、我国における此種学校は之れを以て嚆矢とす」と。（運動史一〇二—三ページ）

『京都地方労働運動史』では、この計画は「残念なことに計画だおれで、実現をみずにつてしまつた。」と書いているが、水谷長三郎伝の年譜には、「同三月水谷は労学会、労働学校を京都市に開催し、講師として労働者に法律等を教え、また無料法律相談を行つた」と記述している。京都の状況から見ておそらく開校されることなく、まぼろしの学校に終つたと思われるが、いずれにしても画期的な計画であったことは確かである。

京都の労働学校の計画は挫折したが、大阪、神戸、東京などの労働者教育の基礎はこの年（一九二〇）築かれた。同年十月八日以降毎金曜日大阪では大原社会問題研究所が労働講座（読書会）を開いた。講師は研究所長の高野岩三郎博士で、ブレンターノ著、森戸辰男訳「労働者問題」をテキストに用いた。（労働者新聞第三十号大正九・一一・一五刊）受講生約三十人、「労働者問題も結局、万人最高の完成という人類発展の理想目標にそるものでなくてはならぬと主張」するブレンターノの言葉と、これを口述する高野博士に深い感銘をうけた西尾末広は、この聴講の印象を後に「説くもの、聴くものの間に、氣合がかかつっていた。山伏が山に籠つて修業するように、私たちはここで、労働問

題の研究に心魂を打ちこむほどの氣持だった。……と深い感慨をこめて述懐している。（西尾末広「大衆と共に—私の半生の記録」七一ページ）西尾によれば後年の国會議員村尾重雄、塚本重藏、川村保太郎らも、この講座の受講生であった。

友愛会大阪連合会もまた一九二〇（大正九）年十一月三日以降毎水曜日夜、西区朝中ノ橋南詰の共益社で、そして神戸連合会では、同十一月八日夜から毎週月、火の両日兵庫教会で、いずれも賀川豊彦を講師として十二回にわたる長期の講座を開催した。その内容は①労働組合の歴史、②労働組合の組織、③労働組合の心理、④労働組合盟休支配権、⑤労働組合と組合証票、⑥労働組合とボイコット、⑦労働組合と賃金公定、⑧労働組合と会計制度、⑨労働組合と徒弟制度、⑩労働組合と救済制度、⑪労働組合と直接行動、⑫労働組合と社会主義であった。神戸での聴講料は、会員一回十錢、全納金一円、会員外一回二十錢、全納金二円と定められた。（労働者新聞第三十号、第三十二号、日本労働年鑑第二卷一大正十年版一二二〇ページ）一九二一（大正十）年一月一日発行の労働者新聞第三十二号は、神戸におけるこの講座の状況について「講習生の数は……多い時は百名以上にのぼり、少くとも六十名を下ることはなかった。講習生の中には、友愛会の幹部は勿論、高商、関西学院、県商の学生、社費をもつて来講せる三菱、川崎等の社員、新聞記者、警察官等、各方面の色彩を網羅していた」とその盛況を報道した。

東京では一九二〇（大正九）年十一月五日、友愛会東京連合会が「東京労働講習所」を開講した。

場所は神田錦町の女子音楽学校の講堂で、授業は毎金曜日午後七時半から九時半まで、三ヶ月を一期とし、六ヶ月で修了とした。講師と科目は安部磯雄「経済学原論」、堀江帰一「経済学各論」、北沢新次郎「労働運動と社会思潮」、佐野学「国家学」、鈴木義男「法学通論」、片上伸「近代文芸思潮」、植田好太郎「労働運動史」などであった。（総同盟五十年史、第一巻四九八ページ、日本労働年鑑第二巻二二〇ページ）さきに水谷長三郎らが、京都労働学校の構想に際し企画した組織的、本格的な学校形式の労働者教育機関は、東京労働講習所の開設によつてはじめて実現したのであった。この講習所の第一期生に有名な「女工哀史」の著者、細井和喜蔵がいた。工場労働で疲れた彼は、始終鉛筆の先で膝をつついて眠む気をさまし、ためにズボンを穴だらけにしていたというエピソードが伝えられている。（総同盟五十年史第一巻四九九ページ）

一九二〇（大正九）年は、正に本格的な労働者教育運動の夜明けの年であった。

## 2. 京都赤旗事件

この一九一九（大正八）年から一九二〇（大正九）年にかけての時期は、社会主義や無政府主義、サンデカリズム、ギルド社会主義など雑多な思想が堰を切つてわが国に流れこみ、労働運動者にも大きい影響を与えた。

河上肇の個人雑誌「社会問題研究」、山川均の「社会主義研究」、大杉栄の「労働運動」をはじめ「我等」「改造」「解放」なども大正八年発刊され、新しい思想を紹介した。一九二〇（大正九）年十二月には、社会主義者、無政府主義者などが提携して、日本社会主義同盟をつくった。労働組合の指導者、活動家の多くもこれに参加し、その交流を通じて、思想的影響をうけた。労働者教育運動の勃興も、このような思想状況にもとづくものといえる。

一九二〇（大正九）年大阪に転住して日本労働新聞の編集にたずさわっていた荒畠寒村は、同年秋のころから、彼を中心として集つたL・L会のメンバー鍋山貞親、三野啓逸らとともに研究会を開いていたが、毎月二回京都へ定期に訪れ、友愛会京都連合会に働きかけて、労働問題座談会、講演会をひらき、さかんにサンデカリズムを鼓吹し、直接行動を詠歌した。当時の主な論調は資本主義の廃絶、賃銀奴隸の解放であった。警察による弾圧もにわかに厳しさを加えた。九月十九日三条青年会館でのL・L会主催の労働問題講演会には、荒畠寒村、堺利彦、麻生久、和田久太郎など著名な社会主義者が出演したが、総て数言で中止を命ぜられた。

この年十一月三十日、高山は兵役を除隊した。彼の除隊を待望していた多くの労働組合員が宮門に出来迎えたが、その中のL・L会員がひるがえした「祝出獄高山義三君」と記した旗をめぐって、警察当局との間にトラブルが生じ、荒畠寒村、鍋山貞親、奥村甚之助らが検挙された。後に「京都赤旗事件」と称せられた事件であった。彼の復帰を待ち望むほど、指導者としての高山の人気はすばらしか

つた。この事件直後の十二月四日、大阪連合会は天王寺公会堂で「高山氏歓迎大演説会」を開催した。賀川豊彦、鈴木文治、古市春彦らの講演の後「最後に関西幾万の労働者が、千秋の思ひして待ちし高山義三氏の挨拶ありて閉会す。聴衆は堂に満ち、始終緊張味を欠かず稀有の盛会であつた。」と労働者新聞第三十一号（大正九・一二・一五）は報じた。その月、高山は乞われて大阪造船鉄工組合長に就任した。そして翌一九二一（大正十）年一月一日の労働者新聞第三十二号に「大阪十万！ 神戸十万！」と題する所感文を寄稿し、労働者の当面の急務は、「反訳仕込みの社会主義論に口角泡を飛ばすことにあるのではなく、労働者の多数の団結をこそ心がけるべきであり、「阪神に二十万の組合員を作る為に専心奮闘」せねばならぬと警告した。彼は労働組合員が徒らに急進化し、組織をおろそかにしていることに不満をもつた。この警告を残して組合とたもとを別ち、弁護士を開業することを決意した彼は、一九二一（大正十）年四月、神戸市栄町五丁目に弁護士事務所をひらいた。またその月、彼は同志社大学予科講師となり、十月ごろまで法学通論を講じた。そして講義のかたわら労働運動の近況について話した。高山はその後もなお、関西労働運動界の顧問的地位にあって、総同盟に力をかすが、労働運動界への彼の貢献は、およそこの時期をもって終つた。第二次大戦後の一九五〇（昭和二十五）年、彼は社・共両党を中軸とする京都の民主統一戦線の支持で、京都市長に当選したが、労働運動の先駆者としての彼の前述の経歴が評価されたことも、その一因であろう。自由主義者としての彼はその後、社会党を離脱するが、一九五七（昭和三十二）年市長として京都勤労者学園

(京都労働学校) の創立に協力し、労働者教育運動の推進を援助した。これは若い日労働運動に精魂を傾けた情熱の余燼といえよう。

### 3. 西陣織物労働組合の労働者教育

一九二一（大正十）年一月、辻井民之助は西陣織物労働組合を結成した。辻井はさきの奥電争議で友愛会の組織が揺らいだ一九一九（大正八）年九月、一旦友愛会から離れ、西陣同業組合と提携して西陣織友会を組織した。そして月一回の例会に労資双方を招いて講演会を催し、また月二回座談会を開いて、会員の啓蒙につとめ、野球、庭球などのリクリエーションにも心を配った。そして一九二〇（大正九）年一月十五日には、「西陣労働者新聞」を発刊するなど、活発に活動したが、一九二〇（大正九）年三月中旬にはじまった戦後恐慌による西陣労働者の失業を契機に、それまで協調的であった同業組合との間に対立が深まり、辻井は織友会長の職を退いた。そして西陣労働者新聞は四号限りで廃刊、日本労働新聞に合併された。

その後辻井は再び労働組合の結成を志し、一九二一（大正十）年一月これを達成したのであった。そのころ京都の総同盟は殆んど壊滅に近い状態にあつたが、辻井の組合の出現によって総同盟の旗は守られ、空席の連合会長の職に辻井が就任した。

織友会以来、荒畠の強い影響下にあつた辻井は、運動の力点を組合員の研究、學習活動においた。

その職場が分散的で各々孤立し、労働時間にしばられることのない西陣賃織業者の労働環境は、近代的労働組合の形成には不向きであったが、少数者の思想集団、研究グループを結集するには適していた。こうして名称は労働組合ではあるが、実質的には思想集団の性格をもつ組織として結束を強め、その知識、思想の水準を高めた。

彼らは月二・三回、夜八時から二時間、辻井宅で學習会をひらいた。テキストに山川均の「資本主義のカラクリ」、マルクスの「賃労働と資本」「資本論第一巻」、クロポトキン「青年に訴う」「パンの略取」、河上肇「社会問題研究」などを用い、辻井が講師をつとめた。また臨時講師には荒畠寒村、山川均、徳田球一、堺利彦、藤岡文六、麻生久、小林輝次が参加した。研究会のメンバーには国領伍一郎、同巳三郎、佐々木民之助の外、幾山福三郎、吉田友吉、服部孝太郎、婦士鶴治らが加わり西陣以外からは谷口善太郎、半谷玉三らが参加した。（運動史一九三ページ）

こうして思想的に洗練されたことから、京都連合会の発言は、総同盟のその後の動きに相当強い影響をおよぼすこととなつた。

辻井を中心とするこの種の研究会は、昭和初期のころまで断続的に続き、後には山川均の系統をひく「労農派」の一拠点を形成するにいたる。

#### 4. 総同盟の左翼化

一九二〇（大正九）年から一九二一（大正十）年にかけてのこの期間は、ストライキの高波がさか巻いた時期であった。一九二〇年一月の八幡製鉄所、同四月の東京市電気局、一九二一年三月の足尾銅山、四月の大坂電灯、五月の藤永田造船所、七・八月の神戸三菱、川崎両造船所など、争議は凄惨をきわめた。組合側はしばしば、合法的な活動よりも、工場破壊などの直接行動に走ったことから、多数の鹹首者を出し、中には検挙投獄されるものが多く、組合潰滅の危機すら招いた。

友愛会は機関誌「労働」一九二一（大正十）年九月号で、「資本家や官憲が、もし労働者の正義と信じて進む所に、ただ力をもって押しつけようとするのみならば、労働者もひつきょう、正義とか、人道とかいう弱者のお題目を唱うることをやめて、力をもって応対する外はない。」と態度を硬化させた。そして一九二一（大正十）年十月一日から三日間開催された友愛会の第十周年大会は「友愛会」の名を削って「日本労働総同盟」と改め、名実ともに労働組合になった。

しかしアーナーキスト、サンデカリリスト主導下の争議の激発、権力に対する闘争方針はやがて反省され、一九二二（大正十一）年七月、雑誌『前衛』の山川均の論文「無産階級運動の方向転換」を契機にアナ派はその力を弱めた。そして同年九月三十日、大阪での日本労働組合総連合会創立大会における

るアナ・ボル論争を経て、アナ系は一層凋落の色を濃くした。これにつづいて開かれた十月一日～三日の大阪天王寺公会堂における総同盟第十一回大会は、赤松克磨と野坂参三の起草にかかる「われらは団結の威力と、相互扶助の組織とを以て、経済的福利の増進並に知識の啓発を期す」「われらは断固たる勇気と、有効なる戦術とをもつて、資本家階級の抑圧、迫害に対し、徹底的に闘争せんことを期す」「われらは労働階級と資本家階級とが、両立すべからざることを確信す。われらは労働組合の実力をもつて、労働階級の完全なる解放と、自由平等の新社会の建設を期す」の綱領を議決し、総同盟は完全に階級闘争史観の上に立つ戦闘的組合であることを標榜した。

この年はまた新しい無産団体が相ついで登場した年であった。三月三日全国水平社が、四月九日、日本農民組合が、そして七月十五日には日本共産党が創立された。共産党には京都の総同盟から辻井民之助をはじめ、半谷玉三、国領伍一郎、国領巳三郎、佐々木隆太郎、谷口善太郎が参加したと伝えられている。

### (三) 労働者教育運動の勃興期

## 1. 労働者教育運動の進展

労働組合指導理論の変遷の過程で、組合幹部や思想家の間に、労働者の社会科学的知識向上の必要が認識され、労働者教育運動発展の機運が醸成された。

さきに東京労働講習所を開設した総同盟は、一九二一（大正十）年六月、これを東京連合会からきりはなし、新たに「労働者教育協会」を設立して、九月十六日芝区三田四国町の惟一館に「日本労働学校」を開校した。その設立要旨は「……労働運動の進歩発達のためには『知識』は実に其先達であり、指針であり、灯明となるものと思います。……本校は労働問題の適正なる解決を得んがため、労働運動の幹部の養成を図り、且つ、工場、鉱山其他の作業場における一般労働者諸君に、労働問題の正確なる知識の供給を為さんとするもので」あつた。（日本労働年鑑第三巻一六七ページ）

学制は本科と予科に分ち、修業年限は各一カ年、両科とも週二日、夜間三時間の講義を行つた。また通学困難なもののために、労働問題講義録を発行した。

同協会は横浜でも、十月二十二日以降毎土曜日、十二回、地方講座を開設した。

また右協会とは別に、この年十二月六日から月島労働会館で、月島労働講習会が開かれた。月島の講師は嘉治隆一、波多野鼎、千葉雄次郎、蟻山政道、三輪寿壯、細野三千雄、平貞蔵ら新人会のメン

バーが中心で、吉野作造、北沢新次郎らがこれに協力した。（日本労働年鑑第三巻一六九ページ）

大阪では一九二一（大正十）年三月「関西労働組合連合会」主催の労働講座が七回にわたって開かれた。場所は朝中通の共益社樓上で、金子徳伸が「世界的労働祭に就て」、古市春彦が「雄弁術について」と「會議法及び討論の練習」を、村島帰之が「労働組合論」、渡辺茂夫が「サンデカリズムの始祖ソレルの思想に就て」、志賀志那人が「一般經濟界の狀態と貨銀の關係」を講じた。（労働者新聞三十五号、日本労働年鑑第三巻一六五ページ）この「連合会」はその後間もなく崩壊したが、その関係者の中で最も熱心に労働学校の設立を主張していた西尾末広や村島帰之が中心となつて計画をすすめ、一九二一（大正十）年十一月、西尾、村島及び賀川豊彦、今井嘉幸、山名義鶴その他連名で、大阪労働学校設立趣旨書をつくつて設立の運動にとりかかつた。ところが関係官庁の許可を必要とすることなどで計画は難航し、西尾らも業を煮やしていたが、賀川豊彦から彼の著書で、当時のベストセラー「死線を越えて」の印税の残り五千円を寄付するとの申出があり、漸く一九二二（大正十一）年六月一日開校にこぎつけた。主催は総同盟大阪連合会、校長は賀川豊彦、主事松沢兼人で、校舎は西区安治川通一丁目安治川教会、授業は週三回、夜間二時間半、三ヶ月をもつて一期とした。「我等は有産階級の独占から教育を解放すべき事を要求する。夫れが有産階級の独占に帰してゐる間、学問は遂に去勢された馬の如くであらう。そしてそれは学問を司るミネルバの神に対する冒涜であらねばならぬ。我等は学ぶべき権利を持つてゐる。我等は有産階級に奪はれた大学を奪還しなければならな

い。……」と、開校に際し高らかに宣言した。（大阪労働学校十年史一八ページ）その講師と科目は

①「基礎学課」法学通論（岩崎卯一）、社会運動史（小岩井淨）、労働問題（村島帰之）、心理学（賀川豊彦）、社会学（新明正道）、経済学（松沢兼人）、②「科外講義」唯物史観（山名義鶴）、農村問題（杉山元治郎）、最近労働運動の傾向（西尾末広）、進化論（賀川豊彦）の外、エスペラント、英米事情、新聞学などであった。またこの年（一九二二）十月一日協調会大阪支所が西成郡豊崎町長柄長満寺に労働学院を開いた。授業は週三日、夜間二時間半、修業期間六カ月であった。

神戸では、神戸連合会が同会樓上で、一九二一（大正十）年四月十九日から毎火曜日夜第二回労働講座をひらき賀川豊彦が講師として十回にわたり「近世社会運動史論」を講義した。その内容は「ユートピアン社会主義」「マルクス主義」「ペルンスタインの修正派社会主義」「ブルードンの無政府主義」「クロポトキンの無政府主義」「ソレルの理論とサンデカリズム」「ギルド社会主義」「ボルセビズムの理論」などであつた。（日本労働年鑑第三卷一六五ページ、労働者新聞第三十八号）

一九二二（大正十一）年十月にも神戸連合会樓上で毎火・金曜の両日夜、労働講座を開いた。講師は小岩井淨、山名義鶴、新明正道、神戸の朝日新聞記者岡成志などであつた。（労働者新聞七十三号）神戸で本格的な労働学校が開設されたのは、一九二三（大正十二）年四月十日であった。場所は連合会樓上で授業日は月、水、金、土の夜二時間、三ヶ月を一期とし二期をもつて終了と定めた。授業料は組合員一ヶ月二十銭、その他は一円、講師と科目は、経済政策（山名義鶴）、社会思想史（松沢

兼人)、社会学(岡成志)、応用社会学(新明正道)、労働組合の戰術(村島帰之)、日本政治史(松任克己)、労働法規(熊谷康次郎)、虚無主義に就て(吉田栄吉)、産児制限問題並に欧米労働運動の趨勢(馬島惣)などであった。(労働者新聞第八十五号)

## 2. 総同盟京都連合会の発展

高山離脱後、京都の総同盟の組織は辻井民之助によつて守られたが、その実情は、谷口善太郎の表現によれば「西陣の織子とか、扇骨の職人とか、手工業的な職人が中心で、そこに弁護士、新聞記者、学生などの進歩的インテリゲンチャードが加わつて、いわば京都連合会は雑多な街頭分子の三十名程のグループにすぎなかつた。」(谷口善太郎「戦前の労働学校の思い出」三ページ)

それが一九二二(大正十一)年六月のころから、その様相をかえはじめた。六月には陶磁器従業員組合、京都電機工組合および合同労働組合が結成された。この上向きの傾向に加えて、総同盟の組織発展の契機となつたのは、同年八月から九月にかけての沢田合金争議であつた。従業員五、六十人の小さな工場であつたが、会社の身売り話に端を発したこの争議は、警察のきびしい弾圧と、右翼団体国粹会のなぐりこみによつて、流血騒ぎをおこしたことから、総同盟は鈴木会長以下あげてこれを支援し、自由法曹団の大挙入洛、内務大臣への抗議へと発展する全国的規模の争議となつた。これを指

導したのが少數の街頭分子にすぎなかつた京都連合会であつたことから、京都の総同盟はにわかにその声価をたかめた。

つづく一九二三（大正十二）年二月、京都連合会は三悪法（過激社会運動取締法案、労働組合法案、小作争議調停法案）反対運動を盛大に展開して氣勢をあげ、一九二三（大正十二）年七、八月の奥村電機争議を経て、電機工組合の組織をさらにのばし、七月京都捺染工組合を結成するなど躍進的発展をとげた。

こうして京都連合会の組織は一九二三（大正十二）年末電機工七百人、捺染工二百人、合同労組二百人を呼号した。しかし、関西労働同盟会加入の数字は、電機工二百人、捺染工五十人、合同労組三十八人、西陣十五人、合計三百三人と記されている。

一九二三（大正十二）年六月の第一次共産党事件に連坐した辻井民之助がロシアに亡命し、十月帰国後地下生活に入り、一九二四（大正十三）年九月まで京都の労働運動界から姿を消したことや、一九二三（大正十二）年九月の関東大震災時の、無政府主義者大杉栄の虐殺、友愛会出身の労働者平沢計七および南葛労働会の河合義虎らの虐殺事件など、運動展開の上に不利な状況は重なつたが、京都連合会の組織は、奥村甚之助、国領伍一郎、桂信三、佐々木隆太郎、佐々木民之助、神田兵三、半谷玉三、谷口善太郎、面甚左衛門、川口鉢一らによつてよく守られた。

こうして組織が確立し運動が大衆化した中で、彼らはつねに教育活動を重視した。各労組や分会な

どでも、座談会、茶話会などの形式で教育活動を行つていた。

### 3. 京都労働学校の創立

一九二三（大正十二）年十月二十一日、総同盟京都連合会は、第三回大会を岡崎公会堂に開催した。かねて労働者教育を重視してきた連合会幹部は、東京、大阪における労働者教育運動のたかまりに刺戟され、京都にもその計画をたてることに決し、大会の議事〔〕に「京都労働学校設立委員会設置の件」を提案、議決した。委員付託となつてその計画は、半谷玉三、国領伍一郎、谷口善太郎、桂信三の四委員によつて進められたが、翌一九二四（大正十三）年二月五日、奥村甚之助連合会長と水谷長三郎が参加して委員会をひらき、次の事項を決定した。

1. 労働学校設立は之を五ヵ年計画とし、建設費は寄附金を募集す
  2. 学校建設に至る迄は民家を借受け、本年四月より夜間のみの授業を開始すること
  3. 生徒の資格は全国総同盟会員其の他一般労働者たること
  4. 主たる授業科目はエスペラント語、労働問題、思想問題、社会問題
  5. 教師は河上肇博士、水谷、小田弁護士其他全国総同盟及京都連合会幹部とすること
- （社会局大正十三年労働運動概況九四ページ、「運動史」二七二ページ）

ついで三月十二日午後七時半、岡崎公会堂に聴衆一千人を集めて創立記念演説会を開催した。会は桂信三が司会し、最初に大阪労働学校学生委員長井上良二の祝辞の後、大阪労働学校講師河野密が、「新組合主義の意義」、水谷が「無産階級と議会政策」、山本宣治が「性知識と無産階級」、山名義鶴が「宣伝と教育」、鈴木文治が「組織の力」を話した。

四月一日京都労働学校は開校式を挙げ、同五日から授業を開始した。そして次の規約二百部を贋写版刷りとし、生徒その他関係者に配付した。

#### (京都労働学校規約)

- 一、本校は京都労働学校と称し事務所を当分京都市七条大橋西詰下る日本労働総同盟京都連合会内に置き、校舎を三条柳馬場角基督教青年会館内に置く。
- 一、本校は労働者の幸福増進を目的とする労働運動に必要な智識を研磨するを以て目的とす。
- 一、本校の修業期間は満三ヶ月とす。但し一週間火、木、土の三ヶ日午後七時半より二時間とす。
- 一、本校の授業料は一ヶ月一円とし入学金は五十銭とす。但し毎月三日迄に其月の分を前納すること。
- 一、本校は当事者及講師学生中より委員を選出し委員会を組織し、一切の事務を管理せしめ、委員会は一名の常任理事を選出し一切の事務を処理せしむ。
- 一、本校の趣旨に反したる行為をなしたる者は即時退校を命ずる事あるべし。

第一期（大正十三年四月一日より六月三十日まで）

（講演科目及講師）

経済学 法学士水谷長三郎、社会思想史 法学士波多野鼎、社会学 法学士林要、未定 文学士土田杏村、法律 弁護士小田美奇穂、性教育 理学士山本宣治、未定 法学士住谷悦治

（社会局大正十三年労働運動概況二〇九ページ、運動史二七三ページ）

右の内、波多野、林、山本、住谷は同志社大学の先生であった。また課外講義として桂信三が染物の話をしたり、第二期以降には谷口善太郎が労働組合運動論を講じたこともあった。初代主事には桂信三が就任し、山本宣治が校長をつとめた。

山本宣治は一八八九（明治二十二）年五月二十八日、父山本亀松、母タネの一粒種として生れた。両親はともに、京都の富裕な商家の出身であったが、そのころ極めて異例なキリスト教徒で、新京極錦小路で花かんざし屋のワンプライス・ショップという店を出していった。そのかたわら一八九三（明治二十六）年、宇治に広い土地を求め、「花やしき浮舟園」と名づけて西洋の草花を栽培した。

山本宣治のいとこ安田徳太郎の著書「思い出す人々」によれば、山本宣治は一九〇一（明治三十四）

年神戸一中に入学したが、健康を害して一年もたたぬうちに退学し、その後宇治で草花の栽培に従っていた。庭仕事の際彼はいつも大きな声で讃美歌を歌つた。一九〇七（明治四十）年彼はカナダ在住の山本家遠縁の人のすすめで、バンクーバーに渡り、皿洗その他多くの職業を転々としながら、翌年二十一歳で同地のハイスクールに入学した。一九一一（明治四十四）年父の病のため帰国し、一九一二（明治四十五）年同志社中学四年に編入、一九一四（大正三）年三高一部に入学、結婚、一九一七（大正六）年東京大学動物学科に入学、一九二〇（大正九）年七月卒業して、同九月京大理学部動物学教室大学院に入学した。同時に同志社大学予科講師となり、自然科学概論を講じた。また翌一九二一（大正十）年十一月から京の大津臨湖実験所講師を兼ねた。同志社では「性」について講義した。そのころ学校で「性」について教えるところは全くなかつたことと、彼のまじめで、しかもユーモアに富んだ語り口が学生にうけ、彼の人気はたかまつた。一九二二（大正十一）年三月、産児制限運動家として世界的に著名なサンガーフ夫人がアメリカから来日した。新聞は連日これを報道し、各地での講演会が計画されたが、政府の方針ですべて禁止された。ただ三月三十日、京都府医師会主催の医師および薬剤師に限つた特別講演会だけは許可され、山本宣治がサンガーフ夫人の通訳をした。このことから「山宣」の名は一躍著名となつた。そのころ同志社大学の学生の間に「十月会」と称する思想団体が誕生した。メンバーは八木信三、小柳津恒、岡田有対、菅田季満（本多季麿）、高橋信司などであった。（京都地方学生社会運動史一〇〇ページ）「十月会」では山宣との接触につとめていたが、中

でも誉田季満（本多季麿）は「一九二二（大正十一）年の秋から足しげく山宣の家に出入りしていた」（安田徳太郎、思い出す人びと一〇八ページ）「誉田は早稲田大学文科からの転学生」で「早大在学中にも民人同盟会、建設者同盟のメンバーとして活躍し、三田村四郎などと相知っていた。」（京都地方学生社会運動史一〇二ページ）この三田村が大阪に来住して野田律太や西尾末広らと労働運動をはじめ、また久津見房子らとともに産児制限運動に関心を示していた。一九二三（大正十二）年一月元旦、誉田季満は三田村と久津見をつれて「山宣」の家を訪ね、二人を紹介した。その後三田村の手引で野田律太、大矢省三その他の労働運動家が「山宣」の家に出入りし、「山宣」もまた労働組合から頼まれて再々講演などに出かけ、急速に多くの労働者から親しみをもたれるようになった。（安田前掲書一〇八ページ、京都学生社会運動史一〇二ページ）彼が京都労働学校長に推されたのも、こうして労働者の中に、彼の人柄がよく知られていたからであろう。その後彼は一九二六（大正十五）年には労働農民党の結党に参加、一九二八（昭和三）年普選最初の総選挙で、労働農民党所屬代議士として京都府二区より当選、翌一九二九（昭和四）年三月、治安維持法改正事後承諾案に反対し、同五日夜、右翼団体七生義団の黒田保久二に刺殺され、四十年の生涯を閉じた。

京都労働学校の開校が報道されると入学希望者は殺到し、百四十一人に達した。その中には組合推薦によるものの外、未組織労働者も多数応募したので、学校側では面接して詮衡し、七十三人に入学

を許可した。

敗戦後「京都労働者教育協会」が一九五五（昭和三十）年六月に発行した雑誌「ともしび」六月号に、谷口善太郎が「戦前の労働学校の思い出」を寄せており、この説明時の状況を左記のとおり手にとるように伝えている。

「未組織労働者の中からの応募にたいする試験は、まことに珍奇なものであり、採用試験を三条柳馬場の当時三条青年会館といつて、現在のY・M・C・Aの会館の一室で行なったが、約四、五十名の申込者の一人一人を試験委員が面接して採否を決定した。試験委員は山本、桂、水谷の他に京都連合会から谷口が参加した。応募者の多くは、労働学校をなにか職業学校か、あるいは現在の予備校のようなものと考えちがいをして、この学校を卒業すれば、職業上のある資格を得られるとか、また上級学校入学の検定試験のために有利であるとかの考えできていた人も多かった。労働学校の主旨はいうまでもなく、一つには組合活動家の養成であり、一つは未組織労働者の中に労働組合を組織しようという目的をもつていたので、こういう考え方を持って入学しにきた労働者たちを前に、試験委員は苦笑せざるをえなかつた。

試験委員はいちいち学校の性格を話し、それでもなお入学しようという者を入学させることにした。……こうして組織外から約二十名、組織内から約二十名、合計四十名あまりの人を採用して開校したが、この中からその後、京都の労働運動の指導者として斎藤英三、島崎実、広田清造その他幾人かの

人が出ている。」（ともしひ六月号四ページ）

その第一期生に広井喜代造という二十歳位の労働者がいた。彼が最も感銘をうけたのは、住谷悦治教授の社会思想史の講義であった。ロバート・オーエンの空想的社会主义から、マルクス、エンゲルスの科学的社会主义、さらにレーニンの思想に及ぶその講義を通じて広井は、はじめてプロレタリアとブルジョアについての知識を得、目のさめる思いがしたが、それにもまして彼が深く感銘したのは住谷教授の温厚で真面目な人柄であった。教授の人格にうたれた広井は、こういう立派な先生が運動の中にとびこんで、自分たちを指導して下さると感激し、講義は欠かさず聞かうと決心した。彼は第一期、第二期を通じて学んだ外、学校が島原に移つて後も引き通学した。彼はその後も永く同教授に私淑し、その厚い庇護をうけて今日に及んだ。私は一九七七（昭和五十二）年五月四日、七十三歳の彼と対談したが、今なお彼は住谷教授を深く敬慕してやまない。また住谷教授は田村敬男編著、「追憶の山本宣治」（九ページ）の中で労働学校と山本宣治について次のように回想している。

「夜の講義を終ると必ず最後に『赤旗の歌』を歌つて散会するのがこの労働学校のならわしのようであつた。いまも親しくしている唯一のわたくしの生徒の広井喜代造君に『赤旗のうた』を教えられてよく歌つたものである。宣治さんは太い厚味のある声で『赤旗の歌』の最後の一節『卑怯もの、去らば去れ、われらは赤旗をまもる』という結びを歌うときはとても歌声に迫力があつて、並んで側で歌つてもその気魄に圧倒されるようであった。このとき私は思った。宣治さんは労働学校の校長

として、労働大衆とか、組合員の啓蒙教育をしていても、もう民衆の徹底的解放への実践に乗り出す覚悟をきめているのではないかと。宣治さんにはそのような、燃え上がる解放への熱意や意氣に充ちているように感じられた。」

谷口はさきの「思い出」の中で、入学者数を四十人あまりと記しており、広井喜代造も、登校者数は四十人（四十五、六人と語っているので、実情はその程度であつたものと思われる。この数字は前述の入学許可数七十三人とは随分開きがあるが、「大正十三年労働運動概況」（内務省社会局刊二六七ページ）の中の「京都労働学校後援会の組織」の項には、「開校当初は八十余名の聽講者を収容したれど、六月に入りては僅かに二十名内外の聽講者あるのみにて、授業料滞納者も続出し、経営難に陥り、此の儘にては第二期以後の開講覚束なく、さりとて休校、廃校亦不能の事情あり、専ら基金獲得に焦慮の状態にあり。」と記述されている。これによつて推察すると、はじめ集つたのは七、八十人の多数に上つたが、登校者数は四、五十人となり、六月には二十人ほどに減つたのであろう。現在でも昼間労働に従事するものが週三回、三ヶ月連續して夜学に通うには、よほどの体力と根気とがなければ困難である。まして毎回刑事が臨席し、通学者を監視している当時の状況のもとでは、体力や根気の外に失職の危険や迫害にくじけぬ勇気も必要で、終講時二十五人が残つたのは、むしろ好成績と評価してもよい。

それよりも学校当局者の悩みは財政難であった。山本校長自身が身銭を切つて財政を助けたことも

しばしばあったようである。一九二四（大正十三）年五月二十七日から四日間、山本宣治は東大の社会科学研究会から招かれて、産児制限についての講演を行い、また日本労働学校や早稲田大学の社研でも講演をした。これらの謝礼をそつくり彼は京都労働学校に寄附した。（佐々木敏二「山本宣治（上）二〇ページ）

また財政難打開の一策として、同年六月七日、京都で産児制限問題に関する有料講演会を開いた。そのころ労働者や市民の間に、産児制限についての関心が高まっていたので、多数の聴講者があるものと予想し、その収益金を労働学校の資金に充当しようとの目算であった。主催は水谷や「山宣」の結成していた「産児制限研究会」で、講師は山本宣治、水谷長三郎のほか、大阪平民病院長加藤時也、神戸産制研究会今吉静枝、大阪産制研究会野田律太、三田村四郎、久津見房子、山内みな子らであった。

ところが折角苦心のこの妙案も、聴衆が意外に少なかつたため、全然失敗に終つた。それで水谷は広く一般に呼びかけて資金を募集しようと考え、「京都労働学校後援会」を組織し、その趣意書を印刷して配付した。

趣意書は労働者が知識を修得することの重要性を述べ、併せて京都労働学校の現状と経営の困難を訴えた長文のものであった。（大正十三年労働運動概況二六七ページ、運動史二七三一二七四ページ）この呼びかけに呼応して、水谷が講師を勤めていた立命館大学においても、社会科学研究会員が、

「京都労働学校基金募集」の「訴」を印刷して、学生に配付した。その代表者は専門部経済科三年の石川九牧、川勝伝、横田辰二郎、法学科二年の斎藤恒之助らであった。（前掲労働運動概況二六九ページ）

水谷ら労働学校当事者の上述の努力も、財政難打開に充分の効果を収め得なかつたのであろう。一ヵ月七十余円を必要とした会場借用料の値下げ交渉も、青年会館側の承諾をとりつけることができず教室を総同盟京都連合会事務所の二階に移すこととした。

一九二四（大正十三）年七月はじめ、事務所は元の七条大橋西詰下る西入の場所から、今熊野宝蔵町三十九に移つた。（労働者新聞一一三号）教室にあてられた部屋の面積は、六帖二室と四帖半一室を合せた広さであつた。事務所には九月に療養先の三宅島から帰ってきた谷口善太郎が同居し、桂信三と代つて労働学校主事となり、労働者教育活動を専門とするようになった。

谷口は「思い出」（五ページ）の中で、「京都連合会は……私の留守中に現在の東山区今熊野宝蔵町にうつつっていた。そして京都労働学校の教室もこの事務所の二階に移つていた。つまり労働学校の第二期講座から、教室は今熊野に移つたわけである」と述べている。

京都労働学校の第二期は一九二四（大正十三）年九月十二日開講し、十二月中旬まで毎週月、水、金午後七時から九時まで開かれた。入学金五十銭、月謝毎月一円、科目及び講師は（経済学）住谷悦治、（最近世界思想）林要、（法律）水谷長三郎、小田美奇穂、（労働組合運動史）河野密、エスペ

ラント（随意科目）　科外講師山本宣治、土田杏村、波多野鼎であった。（労働者新聞一一六号、大正一三・八・二五刊）

京都労働学校はその後「第三期は翌十四年三月から六月まで、四期は同九月から年内一杯まで、第五期の講座は十四（十五の誤り）年に入つてから行われていて。この間三年間続いたのである。」（谷口「思い出」二ページ）

一九二四（大正十三）年十月五・六日、京都市公会堂で開かれた関西労働同盟会第七回大会で、京都連合会の佐々木隆太郎は、「京都の労働組合運動の近況に就て報告し、「教育に就ては本年四月労働学校を設け、四、五、六の三カ月を以て第一期を終了し、更に九月より第二期開校中なり、その間、研究会、茶話会、討論会等を絶えず行い、会員の教養に努めつつあり。」と述べた。（大正十三年労働運動概況）

この報告のとおり、そのころの組合は、盛んに茶話会などを通じて、労働者の知識の向上につとめたが、中でも特筆しておきたいのは、京都陶磁器従業員組合が開設した夏期労働講座である。これは敗戦後の一九四九（昭和二十四）年六月、京都市民生局労働課が、清水焼陶磁器産業調査を行つた際課員の田畠苞が同組合関係者から資料を入手し、それにもとづいて調査報告書の中に書きとめたものであるが、それによれば「一九二一年（二十四年の誤り）三条青年会館に於て、京都労働学校が開設されるや、一名の聴講生を送り、続いて今熊野宝蔵町に於て、組合主催の下に夏期労働講座を開設、

三十名以上が参加している。講師の顔ぶれを見ると、経済学（水谷長三郎）、生物学（山本宣治）、社会学（住谷悦治）、法律（小田美奇穂）、エスペラント（山田）で、特別講師として徳田球一をしようへいしている。」とある。この講座がもたらされた時期は一九二四（大正十三）年八月、場所は総同盟京都連合会の新事務所であったと推定される。この講座はおそらく、京都の労働組合が単独で主催した最初の労働講座といえよう。

またさきの佐々木隆太郎が報告の中で述べた「研究会、茶話会」などについては、一九二三（大正十二）年以降、一九二五（大正十四）年一月までの労働者新聞（九九号～一二六号）に、連合会及び傘下組合の支部、分会の概況まで克明に報道されている。以下一九二四（大正十三）年七月以降の連合会主催のものだけをあげると、七月十日「交通労働者の争議について」国領伍一郎、八月十日「会費値上げと組織の改正」各自討論、九月十日「政党組織について」各自討論、十月十日「無産階級運動圧迫の法律」谷口善太郎、「資本主義社会の婦人の地位」辻井民之助、十月十七日「政党問題」赤松克麿、などが記録されている。また十一月七日夜、ロシア革命を記念して、京都合同労働組合は、奥村電機、染物など八カ所で座談会を催し、佐々木、辻井、神田、谷口、水谷、国領、小田、奥村らが出演して、好成績をあげた。（上記いすれも労働者新聞より）

#### 4. 他都市における労働学校の発展

京都労働学校が開校された一九二四（大正十三）年には、全国各地に労働者教育運動がにわかに高まりを示し、労働学校が相ついで創設された。

東京では労働者教育協会がこの年三月、日暮里に、また九月本所に、それぞれ日本労働学校の分校を開設した。また六月十日完成した本所柳島の東京帝大セツルメントは九月に労働学校を開き、末弘嚴太郎教授のほか、新人会出身の社会思想社の同人が講師をつとめた。また東京商大、社会思想の会も五月に、S・P・S労働学校を芝御成門脇、友愛住宅ホールに開講した。その他東京市社会局が芝中学校内に九月、東京労働講習会（市民労働学院）をひらき、キリスト教産業青年会が五月、本所松倉町に産業青年会夜間講習会を、そして日本宗教会館が四月、下谷竹町に日本労働学院を開校した。

大阪にはさきに一九二二（大正十一）年開校の大坂労働学校と、協調会大阪支所の労働学院があり神戸には総同盟神戸連合会が一九二三（大正十二）年四月に開いた神戸労働学校があった。神戸ではまた一九二二（大正十一）年四月、総同盟から脱退して、神戸労働文化協会を興した久留弘三が、一九二四（大正十三）年四月新たに同市相生町に同名の神戸労働学校を開設した。同月尼ヶ崎にも別所町に総同盟の尼ヶ崎労働学校が、そして堺市七道に総同盟の堺労働学校が開校された。岡山では一九二四（大正十三）年一月同市下西川に総同盟の岡山労働学校が、そして広島では同九月広島社会協会が、同市袋町小学校に、広島労働問題研究所を、また同市のキリスト教組合教会が同市鉄砲町に「社会部労働学科」を開講した。

こうして一九二四（大正十三）年には全国で十七校の労働学校が新設され、既存のものを合せるとこの年の活動校数は二十五校を数えた。

### （労働学校連盟）

労働者教育運動の昂揚にともない、関西の総同盟系の労働学校関係者は、一九二四（大正十三）年九月下旬、大阪労働学校に集つて「関西労働学校連盟」結成を打合せ、同十月五日、京都労働学校での発会式をあげた。加盟校は大阪、京都、神戸、尼ヶ崎、堺、岡山の各労働学校で、事務所を京都労働学校において。そして常任委員（委員長）に山本宣治、主事に桂信三を選んだ。（日本労働年鑑第六卷三三七ページ）

この連盟の活動は数回会報を発行したにとどまつたが、その第一号で山本宣治は「この連盟の目的はいうまでもなく、各労働学校の求むる所と同一であり、まず無産者が社会における位置を過去、現在の状態について直視することによりて、将来の社会の中に於て当然占むべき所を自ら選ぶことにある。……この事業の将来の希望は豊かにあるが、さて現在について見れば、種々の困難の存することも我々は否むことができぬ。まず第一に通学者自身については、いかに知識欲旺盛とはいえ、終日の激烈な労働の後の夜学であるから、肉体の疲労の後の心的作業はかなり苦痛であり、また残業、夜業その他の不規則なる労働時間制度のために、継続通学が妨げられることも稀でない。なおまた、土地

によって文化の進まぬ所では、この有意義なる啓発事業を妨げようとする工場主および官憲があつて陽に陰に通学生の邪魔をすることも多い。

なおその次に労働学校それ自身の有する問題は、第一に校舎を得ることの困難、これは前述の如き外来の妨害もあるが、なおその上に、労働学校が今日では、やむを得ず自給経済を行つてゐるため、到底当方の所要の如き校舎を借りるべき財的余裕が生じない。第二に適當なる講師を得ることの困難、これは土地によつて大差はあるが、後進都市には同情理解ある識者がいても、世間の誤解を憚り、あるいは自己の職務の都合上、退却する等のことのため、土着定住の講師招聘に多大の困難を感じ、これの解決に於て他の文化中心から人を招くとしても、その人の旅費等を払うは、貧乏な労働学校のたやすくやれることでない。」と指摘し「かくの如き現状における連盟は、金と人とのヤリクリが当面の職務となる。」とその共通の困難を述べた。しかし「プロレットカルトがこれから建設される。そして偉大なる歴史を今や我々銘々が演じようと始めかけた。将来の光は我等のもの、将来の力も無論我等のものである。」と輝やく将来の光を確信した。（佐々木敏二「山本宣治」下、三六ページ）

翌一九二五（大正十四）年三月十七日、神戸で「全国労働学校協議会」が開かれた。山本宣治は関西労働学校連盟委員長としてその議長をつとめた。会の出席者は、総同盟会長鈴木文治、労働教育会会长高野岩三郎、大阪労働学校講師村島帰之、河野密、小岩井淨はじめ、東京の木村盛、大阪の井上良二、京都の谷口善太郎、岡山の太田敏兄、神戸の奥田宗太郎、尼ヶ崎・代理河野密ら各労働学校主事、総

同盟の上条愛一、野坂参三のほか、東大新人会（四名）、関西学院（二名）、神戸高商（一名）、姫路高校（一名）、京大（柴田平治、淡徳三郎、逸見重雄、岡本忠文、山崎雄次）、同志社大学（内海洋一、河崎健二、宮崎菊治）、同志社高商（大浦梅夫）、三高（大門英太郎）らが参加した。（佐々木敏二「山本宣治」下、六一ページ）なお谷口善太郎の前掲「思い出」にはこの日の出席者として以上のはか櫛田民藏、大内兵衛、岩田義道らの名が記されている。この日、関西労働学校連盟が提出した議題は「①労働教育会（後出）より本連盟に対する申出、②全国的組織促進の件、③労働組合と労働学校との関係、④労働学校教育の方針、⑤労働学校各種調査、⑥国際通信連絡の件、⑦治安維持法対策の件」であった。（佐々木敏二「山本宣治」下、六一ページ）「この会議で河野密が『労働学校は原則として組合が經營すべき』であると主張したのに対し、谷口善太郎は『労働学校は経済的にも組織的にも、組合から独立すべきである。組合教育部の教育方針は、組合運動に直接必要な知識、たとえば争議のカラクリなどのような、具体的な知識を教えることをめざすべきであり、労働学校の教育方針は、原則的に無産者としての科学を教えることにあると主張し、その教育方針の決定は、組合がするのでなく、組合、講師、学生の協同で決定されねばならない』と論じた。」（佐々木前掲書六二ページ）谷口はその理由について「労働学校が『未組織労働者に対する運動』であるという面や『もし組合の管理下にすれば、ストライキにて学校を休まねばならぬ』ことなどをあげてはいるが、左右の対立が激化するなかで、左派の影響を労働者教育の場から排除しようとする、総同盟幹部の上から

のしめつけに対する対抗策であった。」と佐々木敏二は説明している。この会議の後、間もなく総同盟は後に述べるように左、右に分裂し、京都労働学校は、左派が結成する日本労働組合評議会と、学生社会科学研究会の影響下におかれる。

## 5. 「労働教育会—有島財団—」のこと

これら総同盟の労働学校も、京都の場合のように、しばしば財政的に窮境に陥りがちであったが、それに対し財政的にいささか支援した団体に「労働教育会」という組織があった。それは世に、有島基金とか財団とかいわれたものである。有島とは、大正期その著作「カインの末裔」や「惜しみなく愛は奪う」「或る女」「宣言一つ」などで著名な作家有島武郎のことである。彼はそのころ、親譲りのぼう大な財産を私的に所有することに矛盾を感じ、これを社会的有意義な事業に使用したいとの意向を、東大の新人会員で後に社会思想社の同人となつた八木沢善次を通じて、社会思想社に伝えた。

社会思想社同人ははじめ、潔癖にそれをことわることにきめていたが、二回目の相談の際、蟻山が個人が自分の利益のためにもらうのではなく、有島が社会的目的に使用してほしいというのだから貰つてもよからうといい、一同考え方を有島に伝えた。しかし北海道のぼう大な農地や、多摩川にある土地などは、社会思想社としては経営力がないから辞退することを申し添えた。

ところが思いもかけず、一九二三（大正十二）年六月有島が突然自殺した。翌一九二四（大正十三）年一月に社会思想社に対し、遺族から日本郵船の旧株五百株が贈られた。株価が値下りしていた時期であったので、総額で時価四万五千円くらいであった。予想より少額であったが、内三百五十株で財団をつくり、労働教育事業にあることとし、東京、大阪、京都、尼ヶ崎、神戸の五労働学校に補助金を提供した。（「三輪寿壯の生涯」二〇二ページ）その金額は大阪労働学校の場合、毎月二十円であったが、この補助金は「本校の経営の上に一大拍車となつた。」と「大阪労働学校十年史」（三二ページ）は伝えている。

大阪労働学校ではまた、一九二五（大正十四）年末、有島財団の援助を得て、「大阪労働教育会館」の設立を企画し、同市内に敷地八十四坪、建物四十坪弱（一万三百五十円）を取得することができた。財団は高野岩三郎を委員長とする大阪労働学校経営委員会に、会館の経営を委嘱した。こうして大阪労働学校はその基盤を確立し、一九三七（昭和十二）年までその活動をつづけることができた。（「大阪労働学校十年史」三六ページ）

有島財団では、労働教育以外の残金は、労働法律基金、出版費、労働事情調査費に充て、東京と大阪に自由法律相談所を設けた。財団の理事には有島頼寧、安部磯雄、左右田喜一郎、高野岩三郎、吉野作造、三輪寿壯、平貞蔵の七名が就任し、細野三千雄が会計を司った。会の事務所は京橋区塩町の丸越ビルディングにおいていた。（「三輪寿壯の生涯」二〇二ページ）

## 6. 総同盟の分裂と評議会の成立

労働者教育運動における前述の統一的志向とはうらはらに、そのころの総同盟は左右両派の対立が激化し、正に分裂寸前の状態にあつた。

総同盟はさきの第十一回大会で、アーナーキスト・サンデカリリスト的傾向を排撃するとともに、労働者階級と資本家階級とは、両立すべからざるものとの認識の上に立ち、資本家の抑圧と迫害に対し、徹底的に闘うとの強い革命的姿勢を示したのであつたが、その後一九二三（大正十二）年六月の第一次共産党検挙や、同年九月の関東大震災下の甘粕事件、亀戸事件などの経験を通じて、右派幹部は、総同盟のこれまでの運動が、さきに山川均が「方向転換論」で指摘したとおり、少数者のさきばしつた運動にすぎなかつたことを深く反省した。そして今や「少數者の運動から転じて、大衆的運動に向ふべき一段階に到達した」とみなし、政府の表明した普選実施公約や、I・L・O代表の組合推薦公約に対しても「従来の消極的態度は積極的に、これを利用することに改められなければならぬ」と宣言した。これに対し左派は、「現実主義」を称える右派の主張は、「過去におけるわが国労働者運動の輝ける戦闘的精神、闘争的方法を、根こそぎ否定し去ることもって、方向転換の出発点に」せんとするものであり、「革命的闘争意識の水準低下」を志向するものとみた。

そして政府の諸公約に応ずることは「支配階級の懷柔、欺瞞、妥協の政策に応ずることにより、帝國主義的反動の前に降伏する態度」に外ならず、「自分自身のブルジョア的安住地帯を築き上げんとするもので」あるとした。そして「労働者階級は一大社会的勢力として、その階級的勢力を増し、労働者大衆も、資本の攻撃の前に著しく闘争的になって来た。」との認識をもつ左派は「大衆化の方法は、労働者大衆の日常的、経済的、政治的要求を代表して戦うことにより、後れた労働者大衆を、闘争に引き出すべきで」あって、これこそが山川の「方向転換」の目指すところであると考えた。（「中、谷口善太郎著「日本労働組合評議会史」より）

一九二四（大正十三）年二月の「十三年大会」は両派の妥協により、その分裂を避けることができたが、大会の直後から翌一九二五（大正十四）年にかけて、機械労働組合、南葛労働会、関東印刷工組合その他の左翼的組合が、相ついで総同盟に加入して、左派の勢力を強めた。これら関東の左派系組合は、関東地方評議会を結成して、反幹部運動を展開し、関西でも左派系組合が刷新運動を起した。総同盟中央委員会はついに、一九二五（大正十四）年五月十六日、左派の二十三組合の除名を決定した。

つづく五月二十四日左派組合は、革新同盟全国大会を神戸のキリスト教青年会館でひらき、除名処分についての態度を討議した結果、全員一致で総同盟からの分裂を承認し、新しく「日本労働組合評議会」を結成した。

「評議会」は①「組合運動の目的」、②「組合運動の教育的任務」、③「行動の一般方針」、④「組合組織の原則」、⑤「組合組織の目標」の五つの綱領を定めた。それは労働階級の完全なる解放をもって、労働組合の任務とし、組合運動を労働者の階級意識にもとづく団体的行動訓練の場としたものであった。

谷口善太郎著「日本労働組合評議会史」（九三ページ）によれば、評議会創立当時におけるその勢力は、三十二組合一万二千五百五人を数えた。これに対し、総同盟の勢力は三十五組合一万三千百十人であった。

京都では総同盟京都連合会は、あげて評議会に加盟した。その組織は京都電機工組合（四百五十人）、京都染物労働組合（二百五十人）、京都木材労働組合（百三十人）、京都合同労働組合（四百五十人）であった。

## 7. 評議会の労働者教育方針

この革新同盟全国大会から評議会結成にいたる討議の中で、京都の代表者谷口善太郎、神田兵三は會議をリードする積極的な発言を行い、つづく評議会大会においても、神田は法規委員長として、また谷口は議案（十五）の「労働教育に関する問題」の説明を行うなど活躍した。谷口の説明の要旨は

以下の通りであつた。

A

本評議会の態度を決定するもの

本大会は労働教育に関し左の各項を決議す

a 労働教育の根本精神

イ 無産階級意識を助成せしめるための階級教育たること

ロ ブルジョア的教育の徹底的排撃

b 労働組合教育部の職分

イ 組合闘士の養成

ロ 組合知識の普及

c 労働学校に関する諸問題

労働学校の目的は一般無産階級教育の普及である。労働学校それ自体は各種無産團体とは別個のものたるも、各種無産階級団体の意志を充分反映せしめ得る機関によつて管理さるべきである。

B 同上態度による実行方法

労働教育事業の充実と統一

実行方法

イ 教材及教程の作成並にその統一

ロ 講師の交換

ハ 組合教育部の全国的地方的連絡

二 労働学校全国的連盟の促進

(大正十四年労働運動年報、社会局労働部)

この大会で京都の古瀬寅之助と谷口善太郎は十七人の中央委員のうちに選ばれ、谷口は教育出版部長、本部常任委員となつた。

評議会はつづく六月三十日に第三回中央常任委員会をひらき、前掲決議をさらに具体化して「労働者教育運動に関する方針書」を決めた。

その内容は以下の通りであつた。

「これまでの労働運動が共通しておちいつた、あるいはおちいりやすい過失は理論と行動の離反である。その結果『理論としては正しいが実行は不可能である』という誤った意見が保守的な組合幹部だけでなく、勇敢な青年闘士の中でも承認されて來た。かくて階級闘争の理論も社会革命の原理もすべて去勢され、一片の空論に化せられた。『日常個々の現実的利益の闘争』『運動の大衆化』なる標語がかかけられていらい、この傾向はとくに甚だしい。ここにこそ日和見主義への墮落の途がある。

故にわが評議会本部の教育方針としては、まずみずからのかかる過失を矯正し、この誤った意見と闘つていかなければならぬ。それには評議会がまず実際に理論と行動の結合した教育につとめることである。

以上の見地から、わが評議会本部の教育出版部（部長鍋山貞親）は、つぎのような教育方針を定め各地方評議会および各組合で、適宜な方法をもって実行されんことを希望する。

### 1. 一般教育—日常の行動を通じての教育

(イ)

各組合または支部は、組合員のいる工場単位に、懇談会もしくは茶話会を開き、それに原則として同工場の労働者全員を参加させる。そこでは、その工場の労働条件、門の取締、寄宿舎の管理のぐあい、その他勤務上の細々した問題を中心に話し合い、そうした個々の問題を通じて、階級対立の関係を明白ならしめ、その改善方法の研究や討議、簡単な調査などをを行い、労働者が日常当面の労働条件、その他にたいして、常に注意を怠らないようにさせる。さらに進んでは組合や地方評議会組織部と連絡して、工場委員会（自治会、懇談会）を組織する。

(ロ)

ストライキその他争議の場合は、争議部をたすけて、争議の有利な解決のために努力するとともに、その現実の露骨な利害衝突をとらえて、階級意識をさらに明白ならしめ、階級闘争の意識を激成せしめる。

### 2. 政治教育

(イ) 政治的教育は一般時事問題をとらえて行わねばならぬから、ふだんに時事問題をとらえて、その階級的性質を暴露し、搾取の過程を教示して、日本と国際資本主義の現勢を知らせる。そうした教育によって、個々の闘争を一般的闘争に進展させ、全無産階級の総合的勢力の形成と、その革命化につとめる。

(ロ) 一般時事問題のうち、とくに無産階級の生活に直接関係ある問題—失業、物価、戦争、植民地問題などを、無産階級の立場から批判し、討論を盛んに行う。

### 3. 理論と戦術の研究

以上のほかに各組合単位、または組合連合の読書会、または労働学校で、つきのような基礎的理論と一般的戦術の研究をする必要がある。

(イ) マルクス主義経済学、(ロ) 唯物史観、(ハ) 帝国主義、(ニ) 政党および労働組合の国際運動史

### 4. 特殊的研究機関

一般組合員や非組合員の教育に努力するとともに、さらに闘士の養成、指導者の養成のため適宜の方法で特別の研究会を組織して、純粹の革命的理論と戦術の研究をしなければならぬ。

### 5. 青年教育

評議会加盟の各組合は、無産青年運動に参加するよう青年組合員を鞭撻し、その教育事業を積極的に援助する。

## 6. 婦人労働者の教育

婦人組合員を中心に、非組合員婦人もまじえて、婦人労働者特有の利害問題—勤務時間を成年男子より短縮させること、妊娠分娩の公休制、成年男子と同一の労働にたいしては同一の賃金を、収入と生活費の関係などについて研究討議を行い、特殊な個々の利害問題の中から、一般無産階級意識を助成せしめる。

## 7. 講師と教材

(イ) 従来の労働学校のように、単に社会主義的な大学教授や学者を中心にして、主として労働運動の実戦にたずさわっており、しかも理論的知識を有するものを中心にし、学者はその補助的機関として適宜に扱うべきである。

(ロ) 「わが国で出版されている各種の理論的文書の中には、急進ブルジョア的書籍が多いから、教材の選定には各組合で慎重な注意を払う必要がある。」（運動史三二五ページ）

## 8. 京都労働学校と学生社会科学研究会

一九二二（大正十一）年十一月七日、ロシア革命五周年を記念して、東大の新人会、早大の文化会と建設者同盟、京都の三高の社会問題研究会をはじめ全国の大学、高校、専門学校の社会思想研究団

体の代表者および有志約五十人が東大の第二学生控所に集つて「学生連合会」を結成した。東大では翌一九二三（大正十二）年五月以降新人会が「学友会の民主化」運動をおこし、同十一月二十九日に学友会内に「社会科学研究会」を発足させた。社研活動はその後「燎原の火のよう」に東大各学部にひろがり、最盛時には総計四百人にのぼると記録された。（東大新人会の記録三四ページ）京都にもこの動きは波及した。一九二一（大正十）年春「労学会」が解散を命ぜられて後、しばらく鳴りをひそめていた京大に一九二三（大正十二）年十月、岩田義道、仙波道心、逸見重雄らが「伍民会」を結成したが、淡徳三郎、河合悦三、山崎雄次らを加えて同十一月京大社会科学研究会と改称した。（京都学生社会運動史一一〇ページ、文部省学生部、学生思想運動の沿革七六ページ）三高では西本喬、上村正夫らによって一九二二（大正十一）年十一月結成された社会問題研究会が、一九二四（大正十三）年四月、社会科学研究会を名のつた。また同志社大学では前述のとおり、一九二三（大正十二）年春八木信三、小柳津恒、誉田季満（本多季麿）らによって「十月会」が創立されたが、新旧両会員の思想的対立のため、同十二月解散し、同会のマルクス主義者川崎健二、宮崎菊治、内海洋一らは一九二四（大正十三）年五月「社研」を組織した。立命館大学にも同じ頃、石川九牧、川勝伝、横田辰二郎、斎藤恒之助らが「社研」をつくった。

全国の大学、高校、専門学校の社会科学研究会は、一九二四（大正十三）年九月十四日、東大学生控所で第一回全国大会をひらいた。加盟校数は四十九校、会員数千五百人と発表、参考集の代表者七十

余人が研究活動と実際運動との関係について討議、労働者教育運動の促進などを話し合い、会の名称学生連合会を「学生社会科学連合会」と改めた。（東大新人会の記録三八一ページ）学連加盟校はその年十一月には、関東連合会二十七校、関西連合会二十校、東北連合会六校、計五十三校となり、会員数一千六百人に達した。（日本学生社会運動史一〇二ページ）学連の発展についてマルクス主義思想は全国にひろがり、広く労働者の間にも浸潤しはじめる。

京都における学生と労働者との接触は、さきに一九一八、九年（大正七、八）京大の「労学会」や同志社の「白労会」のメンバーによってはじめられ、その後同志社の自由人連盟（一九二一（大正十）年春創立のアーチストグループ）や、さきにふれた「十月会」のメンバー八木信三、菅田季満（本多季麿）など、また三高の西本喬、上村正夫らによって行われてきた。

「社研」結成後、学連の大会の討議にもとづいて、学生の労働者に対する働きかけは一層活発となつた。京都では右大会直後の十月五、六日、京都市公会堂で開かれた関西労働同盟会第七回大会に、社研学生二十人（内婦人六人）が傍聴した。また同年十一月四日、京大社研の岩田義道ほか約二十人は、総同盟大阪連合会幹部との意見交換を申し入れ、同連合会の河野密、井上良二、長田孝三、鍋山貞親、中村義明、野田律太その他約三十人と「産業別組合に関する問題」「労働学校教材」「学生連盟の活動」等多岐に亘って話し合つた。（大正十三年労働運動概況四五二ページ）しかし「連合会側は忌憚なき意見を述べるときは、将来学生等の実社会に活動する場合、其短所を窺知せられ、嗜勝の

悔なしとせずとの感を懷くもの渺からず、一流闘士の多くは沈黙を守り、偶々発言者ありと雖、或程度にて警戒線を張り、胸襟を披かざる如き觀ありたり。因に本会は学生側の切なる申出に依り、将来月一回、第三火曜日を定例日とし懇談を継続する趣なり。」と前掲「労働運動概況」は伝えている。

官庁（内務省社会局）の觀察に従えば、氣負いたつた学生たちに対し、総同盟はいささか迷惑と感じていたように見うけられる。

しかしこのころ京都では、京都労働学校に、京大、同志社大学などの社研の学生が受講生の中にもじって参加し、労働者にかわって講師に質問するなどして、その學習に協力していた。広井喜代造談によれば、後年の文化人類学の權威石田英一郎や、岩田義道、宮崎菊治などが、その主要なメンバーであった。

京都労働学校は一九二四（大正十三）年十二月第二期の修了生二十三人を送り出した。

翌一九二五（大正十四）年一月七日、京都市岡崎公会堂で日本フェビアン協会主催、京都労働学校後援の「社会思想大演説会」が開かれた。フェビアン協会は一九二四（大正十三）年四月二十七日、山崎今朝弥、安部磯雄らによって創立された社会主義研究団体で、山本宣治もそのメンバーに入っていた。「当日の弁士は、安部磯雄、石川三四郎、小林輝次、馬島潤、秋田雨雀、新居格、千葉亀雄、藤森成吉、水谷長三郎で山本宣治は京都労働学校々長として挨拶した。」「山宣はこの機会を利用して

関東の名士たちに色紙や短冊に揮毫をさせ、それを売って労働学校の資金にすることを考えた。だがこの講演会の講師たちの揮毫のみでは、販売のための展示会をするほどの数はなかったので、一月中旬に京都労働学校（責任者桂信三、谷口善太郎）の名で京阪神在住の名士に『労働学校基金調達の為めに、色紙短冊の揮毫をお願ひします』という印刷物をそえて、色紙と短冊を送り揮毫を頼んだ。その説明文の中で、販売方法と基金の用途については、(1)五・六月ごろに高島屋かどこかで展覧会を開いて売ること、(2)得た基金は京都労働学校と関西労働学校連盟の費用に使用すると記している。この形での基金調達が、どの程度の成果があったかは判らない。』と佐々木敏二は「山本宣治」下（五四ページ）で京都労働学校の資金調達の苦心を紹介している。

京都労働学校の第三期は一九二五（大正十四）年三月開講された。総同盟京都連合会は同三月一日岡崎公会堂で開いた大会で「労働学校の学生に対し、各組合から月謝あるいは電車賃を補助すること」を決めた。

この大会の後、間もない五月、さきに見たように総同盟は分裂した。京都の労働組合は伏見の樽工組合を除いて、すべて評議会に加盟するのであるが、六月二十日岡崎公会堂で「京都地方評議会」の結成大会をひらき、会長奥村甚之助、主事兼中央委員谷口善太郎、政治部長桂信三、教育部長辻井民之助など役員を決めた。そして同年九月、事務所を下京区坊城通島原大門下ル二丁目夷馬場町に設け

た。京都地評の傘下におかれた京都労働学校第四期は、島原の事務所で開校された。谷口が地評の主事と評議会本部の中央委員を兼ねたので、労働学校の主事は上村正夫に變った。上村は前述のとおり三高の社会問題研究会のメンバーであったが、一九二三（大正十二）年、三高を中途退学し、入宮のため一時帰郷の後、一九二五（大正十四）年春、京都に戻り当時京都地評の書記となっていた。

島原での労働学校の学生数は極めて少数で、この期にも登校した広井喜代造の記憶によれば、七、八人であった。「日本労働年鑑大正十五年版」では、その状況を「目下は読書会等を催すのみ」と伝えていた。しかし講師陣には京大社研の幹部などが無給で参加し、またチューイーなどもつとめたので経営は苦しかったがどうにか講義は維持された。その間「労働学校の側でも……社研の学生の側でも、労働者教育の教程を本格的に考える努力がなされ」ていた。（佐々木敏二「山本宣治」下五四一五五ページ）社研の学生が労働学校講師として参加したことによつて労働学校の講義科目も「人類進化論」「労働運動」「我國民の負担と農村の疲弊」「資本主義進化論」「帝国主義論」「資本主義のカラクリ」「性愛」「ルボンの群集心理」などとなり、従来の大学での講義風のものとは一変した。（運動史二七四ページ）

一九二五（大正十四）年七月十五日、学生社会科学連合会は、第二回全国大会を京都大学で代議員八十人参考のもとに開催した。東大、文科学生村尾薩男が議長となり、大学の当局と京都府警察部当

局の臨席のもとに会は開かれたが、当日京都に集つた各高等学校や、山口、神戸、小樽、高岡、長崎の各高等商業学校の代表者は入場を禁止された。この大会では、会の名称を「全日本学生社会科学連合会」と改称するとともに、①学生運動の一般方針に関するテーマの作成と、②会員の教育に関する一般方針並に全国的教程作成を主な議題とした。学生運動の一般方針としては「③マルキシズムの徹底的体得、④会員一般へのマルキシズムの普及並に煽動、⑤一般学生の進歩的運動の援助、⑥一般学生の反動化に対する徹底的殲滅、⑦種々なる社会的活動及び事業への参加、⑧吾等の先輩及び同僚のマルキシズムより逃避背離することを防ぐこと」等が決定された。また会員の教育の一般方針としては、「学生運動は今後無産階級運動の一翼にして、マルキシズム・レーニニズムを指導精神とするものになることが決定せられ、更に之に基いて『全国的教程』の作成が委員付託で議決された。」（文部省学生部刊行「学生思想運動の沿革」六三ページ）この教育方針の原案は「この年九月是枝恭二、清水平九郎が新人会本部で協議作成した。」（前掲書六九ページ）「全国的教程」では教育の対象を中心分子と一般会員に分け、一般会員の教育には主として中心分子がこれに当ることと規定した。そして中心分子は左翼の教育がその本質に於て変革教育なることを知り、教育者が即ち組織者又宣傳者なることを心掛けねばならぬとし、中心分子の熟読すべき文献として「共産党宣言」、エンゲルス著「空想より科学へ」、レーニン著「帝国主義論」、同「国家と革命」、ブハーリン著「共産主義ABC」、同「転換期の経済学」、スターリン著「レーニニズムの理論と実際」などをあげた。

学連の教育は無産階級の教育運動に貢献することをその重要な目的とした。そのための「プロレットカルト運動に関するテーゼ」および「プロカル教程」の起草を行つた。その作業はこの年六月すでにプロカル部を設置していた京大社研が担当し、九月二十日、京大社研第二委員会で、岩田義道、鈴木安藏、山崎雄次らが起草委員となり、主として山崎起草の原案が十月四日の京大社研第一委員会と十月十七日の関西地方連合委員会で討議された。（佐々木敏二著「山本宣治」下八一ページ）。なお「全国的教程」「プロレットカルト教程」の立案は前述の学連第二回大会の翌々日（七月十七日）左京区北白川の京大社研本部と聖護院の合宿所米田みちよ方で開かれた学連の秘密会（懇談会）で検討されたものと思われる。（東大新人会の記録三八五ページ）文部省学生部の「学生思想運動の沿革」によれば「プロレットカルト運動に関するテーゼ」は「プロレットカルトの原則はレーニニズムの革命的統一理論にして、①組織者の訓練、②反帝国主義、③日和見主義の排撃、④都市労働者と農民との共同戦線を必要とすること。プロカル運動の方法は、同志関係を濃厚にすること、弁証法的方法を用ふること等。」と説明されている。このテーゼに基づく「プロカル教程」は、これを(A)「都市労働者に対する教程」と、(B)「農民に対する教程」とに分ち、その内容を左記のとおり示している。

(A) 都市労働者に対する教程（十一回で完了の予定）

第一章 資本主義社会、第一節 資本主義社会の発生（『共産党宣言』第一章参照）、第二節 資本主義社会のカラクリ（ブハーリン『共産主義のABC』、エンゲルス『空想より科学へ』、山

川均「資本主義のカラクリ」等参照)、第三節 労働組合の進化と職分(レーニン『國家と革命』、山川均『労働組合の進化と職分』、ジノヴィエフ『労働組合』参照)

第二章 帝国主義、第一節 資本の集積と金融資本の支配(「共産主義ABC」第二及第四章、レーニン『帝国主義論』、ヴァルガ『資本主義の没落』、リープクネヒト『反軍國主義』等参照)

第二節 ブルジョアジーの陣営——ブルジョア階級の官僚、軍閥、学閥の抱合 第三節 プロレタリアートの陣営(「共産主義ABC」、レーニン『帝国主義と社会主義の分裂』、ロゾフスキイ『労働組合運動』『日本労働組合評議会宣言』、スターイン『レーニン主義の理論と実際』、ミルーチン『社会主義と農業問題』等)

第三章 共産主義革命、第一節 内乱——政権の獲得、第二節 無產階級の独裁、第三節 共産主義建設の努力

(B)  
農民に対する教程(十一回で完了の予定)

第一章 旧イデオロギーの破壊、第一節 地球の進化、第二節 生物の進化、第三節 無產階級の世界史

第二章 資本主義社会の発生、第一節 資本主義社会の概観、第二節 農村に対する資本主義の影響(佐野学『農村問題』、レーニン『農村問題』、ミルーチン『社会主義と農村問題』)、第三

## 節 組合運動の進化と職分

第三章 帝国主義、第一節 帝国主義の概観、第二節 地主階級の陣営、第三節 農村とプロレタリアートの陣営

第四章 社会革命、第一節 革命期に於ける農村の都市労働者に対する関係、第二節 無產階級と農民、第三節 共産主義社会と農民（ロシアの農業制度、労農ロシアの研究）

（文部省学生部「学生思想運動の沿革」昭和六年三月刊、七一一七二ページ）

## 9. 京都無產者教育協会の設立

プロレットカルトに関する「テーゼ」「プロカル教程」を作成した京大社研は一九二五（大正十四）年十一月一日、京都地評や農民組合と提携して「京都無產者教育協会」を設立した。その日関係者四十人が地評本部に集つて創立総会をひらき、都市プロカル部、農村プロカル部、図書部、財政部を設けて、京大社研の岩田義道、泉隆、淡徳三郎、同志社の大浦梅夫がそれぞれ部長に就任、上村正夫が書記となつた。

協会は京都労働学校と京都労働文庫の經營管理をひきうけ、また十一月一日から三日間、寺町丸太町上ル山口仏教会館で、第二回京都無產者大学を開催した。櫛田民藏、森戸辰男、徳田球一を講師に

迎え、のべ二百人の聽講者を集めた。

一九二六（大正十五）年二月一日、協会は地評本部で労働学校を開き、また電機工を中心として吉祥院分校を設けた。つづいて七月一日から八月三十一日までを第一期、九月一日から十月三十一日までを第二期とする労働学校の開設を企画した。授業は毎週月・木曜日の夜七時から十時まで、講師と科目は下記のとおりであった。

第一期 経済学（各論）小林輝次、住谷悦治、社会進化論、林要、無産階級運動、志村義雄、谷口善太郎、法律学、水谷長三郎、小田美奇穂

第二期 経済学（通論）小林輝次、生物進化論、山本宣治、法律学、高橋信司、労働組合論  
(運動史三二六ページ)

こうして評議会と社研が提携して、労働者にマルクス主義を注入し、彼らの理論武装をかため、革命の戦士を組織的に鍛え上げる教育方針に対し、時の官憲は黙視してはいなかつた。労働学校の授業の際毎度警官が監視したばかりでなく、陰険な盗聴の手段さえ講じた。多分島原の事務所のことであろう。谷口はその様子を次のように伝えている。

「この事務所は二階建の長屋の一軒であつて、壁一つをへだてて隣につづいていた。ある時主事の上村君が、何の気なく押入れをあけて、そこに積み上げてあるフトンの上に沢山の壁土が落ちてゐる

のを発見した。不思議に思つて天井の板を押し上げ、屋根裏に顔をつつこんでみると、驚くべきことを発見したのである。屋根裏では、隣とはまつたくのつつぬけに続いている。隣りでは天井板をことごとくはずして、座敷の片すみに約半坪ばかりの丁度、天井の高さと同じくらいにやぐらをくんで、そこに座ブトンをおき、火鉢をおいた人が二人ばかりすわれる席がもうけてある。一見して労働学校及び組合活動をスパイするための特高警察の悪辣な手段であると判断できた。

労働学校の学生及び組合の労働者たちは直ちに、この事実を大衆にばくろして、警察に攻撃をかけたが、こういう陰険な搜索手段を持ってきたのは、このころが最初ではなかつたかと思う。」（谷口善太郎、戦前の労働学校の思い出、六ページ）

## 10. 無産者教育運動の進展

無産者教育運動が高まりをみせたそのころ、その教育は労働学校だけで行われたのではなく、他の団体でも組合でも広く行われた。

### （水平学校）

一九二五（大正十四）年六月二十日水平社は京都市左京区田中に期間約一ヶ月の水平学校を開校し

た。「自由新聞」二号（大正十四年七月一日）はその状況を次のように伝えている。

「京都府水平社本部に依つて水平学校建設の報各地に伝わるや、滋賀、奈良、三重、高知、愛媛、山形等から申込者続々ありて、中にも京都の某医師の如きは、本年三十六歳の高齢を以て入学を申込み、又山形県の某氏は水平学校に入学のため、わざわざ京都へ移住する等、予想外の好成績を挙げた。受付期日締切の十五日には、定員五十名を越える事三十九名、以上八十九名の多数に達したが、本部の大英断に依つて、全部の入学を許可する事になり、去る二十日花々しき開校式を挙げ、二十一日より授業を開始した。講師喜田文学博士の特殊部落史は二十一日より三日間に亘り、竜大教授梅原真隆氏は宗教学に就いて講義があつた。ちなみに京都水平学校生徒を職業別にすると、銀行員五、医師三、教師七、靴工三十二、自由労働者二十六、婦人七、実業家五、外交員四、合計八十九名である。ちなみに本月は有馬頼寧氏、荒木素風、山本宣治、河野密の諸氏の顔ぶれであると。」

続いて「自由新聞」三号（大正十四年八月一日）は、

「前号報道したる通り、京都水平学校は多数の聴講生が熱心に勉強しつつあると同時に、講師諸氏亦非常な努力をもつて尽力されつつある為め、ますます評判となり、水平学校の基礎も完全に確立するにいたつたと。八月の講目及び講師は左の如く決定した。」

（新聞学）難波英夫氏、（普通選挙法）法学士伊藤茂光氏、（治安警察法）弁護士木崎末蔵氏、  
（自治法）未定

ちなみに水平学校では、各講師の講演速記を印刷に附し、聴講することの出来なかつた各水平社同人及び一般的に低廉な価で頒布する計画も起つて、その準備に懸かつたと。」

また「同愛」三十二号、大正十五年三月号は、水平学校のその後の状況を次のように報道した。

#### 「京都水平学校の再開

昨年八月より十一月迄（毎月六日より十日、二十日より二十四日迄、毎日午後七時より十時迄三時間宛）開催していた京都水平学校は、第一期を終えたので暫く休んでいたが、来る二月初旬より山本宣治、中島重、住谷悦治、河野密、高橋信司諸氏を煩わして第二期講を始めて居る。尚同水平社の經營している水平文庫は、蔵書数千冊最新の社会問題書籍の大部分を集めて居ると。」

#### （日本農民組合の教育）

農民組合もまた教育運動をとくに重視した。日本農民組合の教育方針書によれば

「農民の解放運動は、資本主義と戦ひつつあるプロレタリアート（労働者階級）との共同戦線に依つてのみ勝ち得るのである。故に教育方針の原則としては、農民の意識を無産階級意識化すると共に全無產階級運動と協力せしむることである。

教育の根本は、所謂物知りを作る為ではなくして、我等農民の解放のために勇敢に地主資本家階級の陣営に向つて闘争するためである。故に行動を通しての団体的訓練と、理論と実際とは、実践に依

つて統一される行動のための教育でなければならない。」（大正十五年労働運動年報、六七六ページ）このような方針のもとに、あらゆる機会に茶話会、研究会、演説会、講演会を催し、また農閑期を利用して、農民大学、町村会議員講習会、青年闘士養成講座、組合学講習会を三日ないし五日、長期の場合は二週間に亘ってひらいた。

一九二五（大正十四）年以来開催の全国組合学講習会は、全国より優秀な農民を集め、講習科目としては、「支配階級陣営の解剖、全日本無産階級の現勢、組織者の任務、争議戦術、消費組合論、農村と青年運動、会計法など」を講じた。（大正十五年労働運動年報、六七七ページ）また一九二六（大正十五）年五月の新潟県木崎村の長期にわたる小作争議に際しては、無産小学校、高等農民学校を開設し、果敢に闘争した。（大正十五年労働運動年報）

京都でも向日町、嵐山、羽束師村菱川、龜岡などに農民学校をひらき、京大社研の泉隆、永井哲二、岡本忠文、橋本省三らが講師をつとめた。（運動史三二六ページ）一九二五（大正十四）年十月一日から二日間、相楽郡祝園村生蓮寺で開かれた日農、相楽郡連合会主催の農民組合自治制講習会は、約五十人を集めて「農民の政治的自覚」（川村）、「農民疲弊の原因とその解放」（泉）を講じた。（大正十四年労働運動年報、五三〇ページ）

（日本労働組合評議会）

京都地評でも茶話会、研究会をひんぱんに開いた。それを列挙すると

電・機・工・組・合  
一九二五（大正十四）年七月十三日、第三支部茶話会（出席者約四十人）講師神田

兵三「資本主義の行詰りについて」、同七月十五日、第七支部、七月二十日、第四支部右に同じ。  
九月七日、第五支部定期茶話会（出席者四十二人）講師上村正夫「失業問題と無産政党問題」

組合幹部の研究会（毎週開催）九月七日の第二回研究会、講師上村正夫「評議会の宣言、綱領について」、一九二六（大正十五）年一月十七日第三支部（出席三十五人）、講師辻井民之助「無産政治運動」、一月十八日第四支部（出席五十人）組合員家族慰安演芸大会と辻井民之助「無産青年運動」、浅井花子「無産婦人運動」、一月十九日第五支部、谷口善太郎「染労争議報告」と余興、一月二十三日第一支部第二回研究会（出席二十三人）京大生常見庸夫「組合論」、清水から工場委員会運動についての意見発表、古瀬「自主的工場委員制度」力説。

染・物・勞・働・組・合  
一九二五（大正十四）年十月二十二日の委員会で十一月七日ロシア革命記念茶話会の開催と月一回弁論会開催を決定。

木・材・勞・働・組・合  
一九二五（大正十四）年十一月八日から十四日まで毎晩第一期演説練習会を開催（出席四十人）、十二月十五日、各支部合同茶話会と五分間懸賞雄弁。一九二六（大正十五）年一月二十三日、定期茶話会、講師国領伍一郎「普通選挙とわれわれの覚悟」、三月六日、研究会、未組織労働者勧誘方法について討論。

合・労・働・組・合　一九二六（大正十五）年一月十四日、茶話会、国領、稻葉、前川好子、佐々木三郎、栗原佑（京大生）ら二十五人、リープクネヒト記念講演の後、第二次無産政党運動について意見交換、西陣支部は五日会と称する研究会をもち、千本支部では谷口や橋本寅太郎、浅井花子、前川好子らが研究会活動を盛んに行はねばならぬことを強調した。

地評　一九二六（大正十五）年一月三日、毎月二回、茶話会と研究会を開くことを決議、一月十九日合同労組の日笠松之助「京都における労組の連絡について」、同早川忠孝「争議発生時の応援と未組織者加入勧誘について」、染労山崎嘉三郎「各隊同時に街頭宣伝をなす場合について」、同高村幸一「評議会の運動を徹底せしめるについて」など意見発表、辻井がこれを講評。

七月二十七日～三十一日、地評オルグ講習会、二十七日筒井「オルグの使用」、二十八日、三十日谷口「オルグの任務と活動準備」、三十一日谷口「争議の指導について」、出席者第一日二十一人、第二日十七人、第三日十六人、第四日十四人。

十月十七、十九、二十日、オルグ講習会、出席者三十人、二十五人、十八人、講師河田賢治などであった。（運動史三二六—三二八ページ）

## (四) 労働者教育運動の後退

### 1. 治安維持法と京都労働学校の閉鎖

総同盟が分裂して評議会が生れた一九二五（大正十四）年の春、日本の議会は二つの重要法案を議決した。その一つは普通選挙法であり、他は治安維持法であった。前者は五月五日に、後者は四月二十二日にそれぞれ公布された。

普通選挙法の成立によつて、全国の有権者数は三百三十万人から、一挙に一千二百四十万人へと激増した。婦人に選挙権は認められなかつたが、それまで政治から疎隔されていた多くの労働者、農民が新たに参政権を得た。このことは当然彼らの利益を代表する無産政党の出現を促し、労働組合の上にも大きい影響をおよぼすこととなる。

政府の「アメ」の政策としての普選法に対し、「ムチ」の役割をもつ治安維持法は、「国体モシクハ政体ヲ変革シ、マタハ私有財産制度ヲ否認スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シ、マタハ情ヲ知リテ

コレニ加入シタルモノハ十年以下ノ懲役マタハ禁錮ニ処ス」を骨子とし、一九二八（昭和三）年の緊急勅令では最高刑を死刑とした稀代の苛酷な弾圧法であった。この法律の主要なねらいは、日本より共産党とその思想を根こそぎ一掃することにあつたが、後にはただそれだけに止まらず、一切の自由主義、民主主義の思想を否定し、抹殺する兇器として作用した。

この法律の最初の犠牲者は、京都労働学校を支援した京大および同志社の社研のメンバーであった。一九二五（大正十四）年十一月十五日、同志社大学内の掲示板に軍事教育反対のビラが貼られていたのを特高が見つけ、これをきっかけに、京大十八人、同志社十一人、その他四人、計三十三人の学生を検挙した。彼らは十二月二日から七日にかけて一旦全員釈放されたが、中央では京都の久保田特高課長の報告にもとづいて、各府県検察首脳の全体秘密会議をひらき、一九二六（大正十五）年一月十五日から四月二十二日にかけて、社会科学運動に関係をもつ全国の左翼学生ら三十八人を検挙した。（京大十七人、同卒業者三人、東大四人、同志社四人、その他十人）以上の中には京都労働学校に協力した岩田義道、淡徳三郎、石田英一郎、宮崎菊治及び同校主事上村正夫らがいた。彼らが無産者教育の方針や教程を作り、無産者教育協会を創立して、共産主義思想の宣伝をはかつたことがその検挙の主要な理由であった。またこれら学生の指導者と目された河上肇、山本宣治、河上丈太郎、新明正道その他の学者も家宅捜索をうけた。京都労働学校では上村検挙後、西陣の労働者稻葉辰蔵を後任の

主事としたが、谷口善太郎は「思い出」の中で、「この年（一九二六年）の後半期にいたって、労働学校はついに閉校のやむなきにいたつた。」と述べている。しかし彼は続いている。労働学校は閉鎖されたが労働者教育運動はその後「それまでの労働学校による教育をのりこえた、組織内部における階級的運動として、確立発展せしめられたのである。」と。

## 2. 無産政党の誕生

一九二五（大正十四）年三月、普通選挙法が議会を通過したことによって、労働者、農民の政治への関心はにわかに高まつた。六月二十一日、日本農民組合は無産政党組織の促進を提唱、総同盟および評議会など十二の労働団体がこれに応じ、八月十日無産政党組織準備会を設立した。その準備会における左右両派の衝突などの経緯を経て、十二月一日、農民労働党の結党を見たが、政府はこれを、「政党の名を藉りて不軌を企て、社会の革命を実現せんとする不純の動機の介在を認めしむるものがある」として、即日結党禁止を命じた。

無産政党の再組織運動は、右の結社禁止の翌日から、日農および官業労働総同盟を中心にはじめられ、日農の山上武雄、官業労働の川村保太郎が世話人となつて尽力し、左傾団体を除いて一九二六年（大正十五）年三月五日、労働農民党の創立に成功した。ところが四月十九日の第二回中央委員会で

左翼四団体員に門戸を解放することを、一票差で採決して以来、党内左右両派の対立は深まり、二十四日総同盟など右派系労働組合が労農党を脱退した。

総同盟は新たに、社会民主主義的な政党樹立を企図したが、かねて同趣旨による政党の結成を主張していた吉野作造、安部磯雄、堀江帰一の新党樹立促進の提唱を積極的に支持し、十二月五日社会民衆党を結党した。

ところがこの無産政党組織をめぐる左右両派の激しい抗争の間隙をぬって、十二月九日、別に日本労農党が出現した。この党には総同盟の麻生久、藤岡文六、加藤勘十、棚橋小虎、農民組合の三宅正一、浅沼稻次郎、須永浩らの外、三輪寿壮、細野三千雄などがこれに加わった。日本労農党に参加した団体は、総同盟から脱退した日本労働組合同盟、日本農民組合の一部、日本労働組合総連合、日本司厨同盟その他であった。

またこれよりさき、日本農民組合の平野力三ら右派は、日農を脱退して日本農民組合同盟を組織し十月十七日日本農民党を結成した。

こうして单一無産政党組織は夢と消え、四党に分立した。

このような無産政党結成をめぐる抗争のさ中の十二月四日、ひそかに日本共産党が山形県五色温泉の旅館で再建された。

さきに一九二二（大正十一）年七月十五日結成された日本共産党は、翌年六月五日の検挙によつて

大打撃をうけ、つづく九月一日の関東大震災の影響もあって、党員の大半は解党に傾き、翌一九二四（大正十三）年二月、後にビューロー（事務局）と呼ばれた残務整理のための組織を残して正式に解党した。

ビューローでは一九二四（大正十三）年五月雑誌「マルクス主義」を刊行し、共産主義思想の浸透をはかつて来たが、一九二五（大正十四）年一月、コミニテルン代表ボイチンスキートプロフィンテルン代表ヘラーが、青野季吉、佐野学、佐野文夫、徳田球一、荒畠寒村らと上海に会同して党再建を勧告し、これを決議した。「上海テーゼ」と呼ばれたこの決議文にもとづき、ビューローは新しく数人の労働者メンバーを加えて、再建運動を開始し、評議会組合員や学生運動者のなかに、共産主義者グループをつくり、一九二五（大正十四）年九月二十日には、月二回刊行の「無産者新聞」を発刊して、共産主義思想の大衆への宣伝をはかり、一九二六（大正十五）年夏には、グループの人員百数十人に達した。

そして一九二六（大正十五）年十二月、指導者荒畠寒村、佐野学、徳田球一、市川正一、野坂参三、杉浦啓一らは第一次共産党事件によって入獄中であったが、渡辺政之輔、中尾勝男、国領伍一郎、三田村四郎、福本和夫、水野成夫その他によつて党は再建されたのであった。

共産党再建の背景となつた思想は、一九二四（大正十三）年秋以降雑誌「マルクス主義」誌上に登場して左翼論壇を風靡した福本和夫の「分離結合論」いわゆる「福本イズム」であった。

理論闘争を通じて意識の完成をめざすことを至上命令とした「福本イズム」下にあっては、労働組合の実務や、争議に活動することよりも、研究会、座談会、読書会などが重視せられ、共産党影響下の各組織における学習活動は、さらに一段と活発となつた。谷口善太郎は「評議会史」の中でその状況をつぎのように伝えている。

「……評議会大衆は今や死力をつくして『理論闘争』に精進した。この時代の組合大衆の苦心はとても筆紙につくしがたい。……ストライキのために闘い、ビラまき、ポスターはり、演説会等々に活動し、そして食うために朝から晩まで工場で汗水流して働いたその暇に——実にこの多忙な闘争の間に——『意識の完成』のための『理論闘争』をおこない、『理論闘争』の『戦場』へ動員されたのである。活動分子にしてこの努力をなさないものは、ただちに『組合主義者』『折衷主義者』の焼印をおされて排撃された。『理論闘争』の手段もしくは『戦場』には二種あつた。一は組合大衆の間にもたれた特別研究会であり、他は大衆的におこなう討論の手段である。特別研究会ではたいてい福本氏の著書がテキストに選ばれ、集会はほとんど隔日毎ぐらいいに開かれた。……大衆的規模における『戦場』としては組合の茶話会、座談会はもとより、各段階の委員会、大会、総会などがあますところなく利用された。」（運動史四一〇ページ）

### 3. 社会民衆党、総同盟の労働者教育

#### (吉田文治の活動)

無産政党が創立されるに及んで京都にもその支部ができた。まず一九二六（大正十五）年五月十六日、日農および評議会員らを中心として労働農民党京都滋賀支部が組織され、支部長森英吉、書記長面甚左衛門が選出された。また翌年の一九二七（昭和二）年一月二十一日には社会民衆党京都支部が結成された。社民党の基盤としての総同盟の組織は当時の京都には皆無に近く、支部は同志社大学出身の薬屋、吉川末次郎を中心に、同じく薬屋の上田蟻善、本屋で同志社大出の吉田文治、同志社大学講師高橋信司らが組織したのであった。

無産政党がその基盤としての労働組合をもたないことは大きな弱点であった。それを配慮してのことであろう、吉田文治は新たに労働学校の設立を企画した。

吉田文治は一九二三（大正十二）年同志社大学卒業後、小牧近江、坂本勝、波多野鼎、河野密、住谷悦治らの協力を得て、雑誌「クラルテ」を発刊したが、一九二七（昭和二）年（時期不明）彼らの協力を得て、左京区田中の浴場の二階で労働学校を開いた。授業は週一回、土曜日の夜に行い、波多

野鼎が「社会思想史」、住谷悦治が「経済学」を講じた。生徒数ははじめ十四、五人であったが、後にだんだん減り二、三人になった。その間およそ二カ月ほど続けた。

以上の記述は一九七七（昭和五十二）年五月四日吉田邸における吉田と筆者の対談の際の吉田の回想にもとづくものであり、はじめ大正十四年と説明したが、後で昭和二年と訂正した。この学校の存否を裏づけるべき資料はないが秋の府会選挙をひかえ、労働者層への社民勢力扶植の必要に迫られた彼らにとつてはありうべき手段であつたと推察される。

一九二七（昭和二）年九月の府会議員選挙で社民党支部は、上京で山口茂一郎、下京で上田蟻善をたて、何れも次点で惜敗した。つづく一九二八（昭和三）年二月の普選最初の総選挙には、吉川末次郎が立候補した。この総選挙では、一区水谷長三郎、二区山本宣治が、全国でただ二人の労働農民党議員として当選し、吉川は惨敗したのであるが「京都地方労働運動史」（四七一ページ）によれば彼はこれに備えて

「(2)市内四カ所に出張所を設け、……第三出張所は労働学校……とする。

(4)青年便衣隊は労働学校の生徒十人で編成し、毎夜演説会場の警戒にあたると同時に、前衛弁士をつとめる。また夜間提灯をつり、ビラをまく。」

との態勢をたてたと伝えている。

この吉川のたてた選挙態勢について、吉田文治および国島泰次郎は全く記憶しておらず、右の文中

にある労働学校の存否も不明であるが、前掲の吉田文治の回想とあわせ考えるとき、吉川の構想は必ずしも机上のプランではなく、おそらくプランの背景としての事実が多少はあったものと推定される。

### (総同盟の再建)

この総選挙直後の一九二八（昭和三）年三月、無産政党、労農諸団体を震撼した大事件がまき起つた。それは後に三・一五事件と称された日本共産党に対する大弾圧であった。

さきの総選挙に際し無産政党の立候補者は全国で八十八人に上ったが、その中に非合法の共産党員徳田球一以下十一人が労農党を名のつて立候補した。そして二月一日、共産党は非合法の機関誌「赤旗」を発刊して、公然とその姿を現した上、演説会場には「国際共産党日本支部、日本共産党」の署名入りで「君主制廃止」その他党の主要スローガンを列記したビラをまき、また街頭にはつた。これに衝撃をうけた政府当局は三月十五日、全国一斉に共産主義者の検挙を行つた。その数は一道三府二十七県にわたり、千数百人に上つた。京都では評議会の谷口善太郎以下、京都大学、同志社大学の学生を含め百余人が検挙された。

つづいて四月十日、共産党の影響下にあると目されていた労働農民党、日本労働組合評議会、全日本無産青年同盟の三団体が政府より解散を命ぜられた。また各大学ではその月「社研」の解散を命じた。

評議会はこれによつて大打撃をうけた。京都の評議会はその創立の年一九二五（大正十四）年の秋電機工組合を金属工組合へと発展させ、組織人員を数倍に増やしてその勢力を誇つたが、一九二六（大正十五）年二月から三月にかけての日新電機争議および同三月の奥村電機争議の惨敗によつて、金属工組合は潰滅し、一九二六（昭和元）年末の京都地評の組織人員は、金属労組十七人、合同労組二百十一人、京都染色二百二十三人、京都木材七十人、舞鶴木材二十三人、計五百四十四人と減退していた。（大正十五年労働運動年報、三八ページ）

三・一五事件直前の京都地評の勢力も、ほぼ右の程度であつたと思われるが、評議会の解散は一挙にその衰退に拍車をかけた。組合長森田五郎はじめ多くの活動家を失つた合同労組は、奥村甚之助が立て直しに奔走したが、一九二八（昭和三）年六月末ようやく四十名内外の組合員を再結集し得たにすぎなかつた。木材労組は同年一月ごろから評議会脱退の時機を伺つていたが、その解散を機会に、今後単独組合としてのみ存続することを決めた。染物労組だけは比較的無難であつた。

評議会の解散によつて、傘下の労働組合が衰退、混迷に陥つたのを機会に、総同盟は再興の活動を開始した。

京都では社民党が三月二十七日、岡崎公会堂で安部党主、鈴木、西尾、亀井三代議士らによる「内閣倒壊大演説会」をひらいて満員の聴衆をあつめたのをキッカケに、四月には吉川末次郎、上田蟻善をはじめ、唯一の総同盟傘下の組織であった伏見樽工組合の林宏吉およびそのころ社民党的常任書記

をつとめた国島泰次郎らが中心となつて、総同盟の組織作りにかかり、四月二十七日数名によつてこれを結成した。（運動史七二七ページ）

事務所ははじめ西堀川三条上の吉川宅において、後社民党と共同で、松原西洞院西入に家を借りここに移した。そして五月二十九日、吉川末次郎宅で京都支部の創立総会をひらき、組合長宇野弁二郎（紅城）、主事国島泰次郎、会計林宏吉その他役員を定めた。総同盟京都支部はつづいて、「青年前衛隊」と称する組織形成のための中核部隊を結成し、また社民党と共催して、市内各所で演説会を再々開催して宣伝と資金あつめを行つた。その中の一つ、八月十二日「民衆の夕」には、安部磯雄の肝入りで、岡本一平、坪内士行、久米正雄、小島政二郎など有名人の出演があり、いづれも概ね盛況で、その目的を果した。こうして総同盟京都支部は、傘下に合同労働組合、家内労働組合、日本レーヨン労組などを組織することができた。（運動史五四〇ページ）

### （社民党の民衆大学）

この総同盟の組織強化と、社民党の宣伝をかねて、社民党は一九二八（昭和三）年七月十五日から総同盟事務所の二階を会場として、約五十名の受講生をあつめて、民衆大学を開講した。講師と課目は

「政治と道徳」中島重、 「民法と無産者」野村重臣、 「政治学」田畠忍、 「経済学」住谷悦治、

「社会思想史」長谷部文雄、「都市政策」吉川末次郎で講師はみな同志社大学関係者であった。

この大学の受講生二十三名の中に、一九三二（昭和七）年の共産党「銀行ギャング事件」のメンバー西代義治がその名を列ねている。（運動史五四一ページ）

総同盟はその後、家内労働組合の離反などの事態はあったが、その年十月ごろには、およそ三百五十人ほどの組織となり、組合長吉田文治、主事国島泰次郎、会計林宏吉、常任書記渡辺清一らがこれを守った。

#### （総同盟の労働学校）

さきの社民党の民衆大学について、吉田文治は「計画だおれ」であったといい、国島泰次郎は一応短期の講座を一期開講したという。いずれにしても、この講座の計画を通じて、同志社大学出身の吉川、吉田兩人をパイプ役として、総同盟側と同志社の教授陣の接触があったことは確かであろう。

総同盟はこの関係を生かして、この講座を強化発展させ、恒常的な労働学校を設立しようと企図した。そして中島重教授に連絡し、能勢克男、野村重臣、宗藤圭三、石田秀一郎諸教授と一九二八（昭和三）年九月二十七日会談して、労働学校設置協議会を設けることの内諾を得た。

第一回の協議会を十月二日開催、同大側からは中島、高橋貞三、難波紋吉、能勢、野村、田原和郎、

石田らが、総同盟からは吉川末次郎、津司市太郎、吉田文治、日笠金太郎、国島泰次郎が出席した。

労働学校の性格は「政党関係を超越すべし」など議論の末、運営主体として「労働者教育協会」の設立を可決し、協会の目的を「新理想を吹きこむこと、闘士養成」におき、中島重が委員長に、また出席者全員が委員に就任した。なお後日同大側の委員に住谷悦治、林要、田畠忍、高橋信司、宗藤圭三、松井七郎が、そして総同盟からは、山内暉雄、田中義男、岡本經厚、丹羽増次郎、金辻正三郎、大阪労働学校の井上良二がそれぞれ追加された。また主事は同志社の野村と総同盟の国島に決定した。

こうして同大と総同盟の提携はなったが、社民党的吉川と同志社教授側との間の意見の相異や、財政的裏付けの欠如などから、計画は進展せず時は過ぎた。吉川、国島らは親戚知人などを訪ね、五円十円と寄附を集めにまわったがうまく行かなかつたようである。十月二十二日に第二回協議会を開催、同大側より中島、高橋、難波、田畠、西川、林、宗藤、能勢、松井、野村が、そして総同盟と社民党から国島、津司、吉田が出席し、労働学校の趣意書、学校規約、協会規則を承認した。また吉田を本部役員の会計とし、協会員は三ヵ月一円の会費を出すこと、開校予定日を十二月一日から二十五日までと冬休み後一月十日再開などを決めた。そして十月二十九日の労働学校役員会（津司、野村、吉田、國島出席）では、講義課目を政治学（中島重）、労働組合法（野村重臣）、実際法律論及工場法（丹波貫三）、社会思想史（吉田文治）、無産党論（田畠忍）、各国労働組合運動史（松井七郎）など決

定した。開講期間は二カ月、週二回、一回二時間、授業料は二円、申込金五十銭の予定であった。

こうしてプランは一応たてられたが、肝心の校舎が見当らなかつた。はじめあてにしていた西九条島町の裁縫女学校跡の建物も、次に交渉した鞘町七条下ル第一社会館の会場も、ともに使用を断られた。

十二月一日開校の目算ははずれ、一月十日開校と発表したもの、そのあては全くなかった。

ようやく同志社側の尽力で一九二九（昭和四）年一月十五日、西陣キリスト教会で開校に決し、校長中島重、経営委員長津司市太郎、会計吉田文治、主事野村重臣、国島泰次郎とその体制をととのえ一月十日四条大宮更雀寺、十三日三哲竜岸寺、十四日第一社会館で宣伝演説会をひらいた。

十五日の開校式には入学申込者四十六人の外、百五十人が参集した。第一回の授業は十九日、難波紋吉教授の社会学特別講義であったが、聽講者は二十人であった。

ところが一月二十九日になつて教会から立退きを求められた。行き場を失つた学校は、国島の下宿先である五条坊城東入山岡方へ移した。そこは二階の六帖一室で、吉田文治の話では、とても労働学校など開ける場所ではなかつた。しかし国島泰次郎の回想によれば、埃まみれのその部屋に、生徒は四、五人程度集つた。臨監の警察官は、いつも新聞紙を座布団代りに敷いて、傍聴し筆記した。そのような中で中島重、高橋信司、住谷悦治、田畠忍らが講義した。中でも中島教授は羽織袴に威儀をして熱心に説いた。講師には謝礼も交通費も支弁しなかつた。

この学校は十八人の卒業生を出して第一期を終つたといわれるが、真偽のほどは疑わしい。

ついで三月二日から毎週火、木、土の三回、第二期講座を四月二十日まで開くこととし、経済学ならびに経済史（石田秀一郎）、社会思想史（中島重）、消費組合論（田原和郎）、唯物史観（住谷悦治）、無産政党論（田畠忍）などが計画されたが、国島の回想によれば、これは計画だけで実現されなかつたようである。（運動史五四六一五四八ページ）

日本労働年鑑第十巻（昭和四年版）に京都労働学校（五条大宮西三丁目）として昭和三・九・二創立、学科、社会思想史（中島）、労働組合論（国島）、労働組合運動史（野村）、社会学（高橋）、経済史（石田）その他唯物史観、消費組合論—授業火、木、土夜七時一九時、一カ月半、一期、二期修了、入学金五十銭、授業料全期一円五十銭、生徒五十二名の記事があるが、上述した総同盟労働学校創設のいきさつから考へると、昭和三年九月二日創立と書かれているのは、京都労働者教育協会が発足した十月二日の誤りであろうし、また生徒数五十二名とあるのは、おそらく第一期の入学申込者数を誇大に報告したものと推察される。

以上のとおり総同盟の労働学校は同志社大側の絶大な協力により、その当初お膳立ては立派に整つたが、財政難、会場難によつて計画は夢想に終り、辛うじて一期を終つただけでその幕を閉じた。吉田文治が述べたように「国島の下宿先が学校を開けるような場所ではなかつた」ことがその最大の原因であろうが、二期以降の時期には同志社大学教授陣の間に、同志社内部の紛擾の影響でそれまでの

よう、労働学校を支援することができない状況がもち上つたことも、も一つの原因であつたと思われる。

しかし社民党及び総同盟関係者は、国島の下宿先を主觀的には労働学校の場所と認め、そのように表現していたことは当時の文書から類推できる。

それは山本宣治の追悼に関してであった。山本は一九二九（昭和四）年三月五日、右翼の黒田保久二によって刺殺され、その労農葬も厳しい弾圧下に行われたが、社民党京都支部では「凶報に接するや直ちに弔電を発し、七日午後七時ごろ、労働学校で故山本代議士の追悼講演会を開くことに決した。」と発表した。（運動史五六五ページ）

#### 4. 四分五裂の無産政党

社民党と総同盟が以上のような活動をつづけていたとき、他方旧労農党系の状況を見ると、辻井民之助を中心とする西陣グループの幾山福三郎、吉田友吉らは、合法政党組織を辻井に強く勧め、辻井も決心して河辺友吉、北川孝らを加えて、一九二八（昭和三）年七月二十一日北野桜井屋で日本労農党京都支部を結成した。

また労農党解散直後から、その再組織を目標として、新党準備会に結集した山本宣治、水谷長三郎、

神田兵三ら主流の人々は、活動の自由を狭められた中で本部に対し党的再建を働きかけ、本部も九月一日結党に踏みきり一九二八（昭和三）年十二月二十二日より三日間、東京本所公会堂で労働者農民党結党大会を開いた。しかし第三日の二十四日大会開会直前、新党結社禁止とともに、新党组织準備会の解散が命ぜられた。共産党ははじめ、労農党再建を支持していたが、この大会直前にもたらされた「プロレタリア党はただ共産党あるのみ」とするコミニテルン第六回大会の決定にもとづき、方針を百八十度転換させ、大会の玉砕を期待していた。共産党指導下の左派は合法政党樹立を放棄し、十二月二十八日「政治的自由獲得労農同盟」を結成、京都でも翌一九二九（昭和四）年一月九日、その支部ができた。

しかし水谷長三郎、神田兵三ら合法政党樹立の必要を確信した人々は、これに同調せず、一月十七日、地方政党としての労農大衆党を創立した。

また辻井らが加盟した日本労農党は、一九二八（昭和三）年十二月二十日、日本農民党、無産大衆党的中央三党、九州民憲党その他地方四党が合同して、日本大衆党を設立したことから、京都の日労党支部も一九二九（昭和四）年一月五日、日本大衆党支部を名のつた。

日本大衆党支部では、その唯一の傘下組織である質織業者組織が、大正八年以来の歴史をもつにもかかわらず、なお組合らしい組合として発達しない現状を反省して、その立て直しをはかり、九月十日「西陣織物従業者工友会」を創立して、運動の新たな展開をはかった。

また水谷らの労農大衆党の下部組織は、僅に木材労組だけであったが、その基盤確立のため一般労働組合を八月十日に創立した。一方労農同盟は、その結成集会が非合法であったとして一斉検挙され身動きできない状況にあった上、一九二九（昭和四）年四月の四・一六事件（共産党員検挙）に追打ちをかけられ、活動の自由を失った。

四・一六事件によって指導部を失った政獲労農同盟の中の大山郁夫、河上肇らは、合法組織を通じて、左翼勢力の強化をはかる方針をたて、八月八日、新労農党結成を発表し、京都でも一九二九（昭和四）年十月二日森英吉、奥村甚之助、大塚有章らが支部を創立した。

こうして無産運動は四分五裂し、互に他の陣営の悪罵、中傷をくりかえした。正に分裂の季節であった。

さきに評議会の解散に乗じて組織強化にのり出し、わずかに成功を収めた京都の総同盟も、分裂の危機に見舞われた。これは総同盟大阪連合会の左右両派の対立に端を発し、左派の除名となり、それはさらに社民党の分裂まで発展して、一九三〇（昭和五）年一月十五日全国民衆党が生れるという一連の事件の反映であった。

## 5. 労働組合全国同盟の労働学校

京都の総同盟では主事の国島泰次郎をはじめ、印刷工工友会の西川金次郎や渡辺清一、上田蟻善らが離反して、労働組合全国同盟の傘下に入り、一九二九（昭和四）年十一月九日、その京都府連合会事務所を等持院仲町三十一においていた。

全国同盟では組織拡充の方策として、十一月二十九日労働学校を等持院の事務所で開校した。講師と課目は、経済学原論（山口常次郎）、社会思想史（井上良二）、労働組合論（国島泰次郎）、実践戦術論（堀正信）、無産政党論（大矢省三）などで、主事は北原和夫がつとめた。（運動史六四一ページ）この学校は大阪労働学校長井上良二の尽力により、大阪の姉妹校として発足したのであったがその開校第一日の生徒数は僅か七名で、国島の話では二回ほど授業しただけで挫折した。

その原因の一つは、左派幹部が京都連合会をリードしたことに反発した国島らが、早くも十二月十八日、社民党絶対支持を声明して、反旗をひるがえし、さきに離脱した総同盟への復帰を画策したことにによる内紛にあつた。

（この労働学校について現在東京都在住の元同校主事北原和夫氏に手紙で、その後の経緯について照会したが、何分五十年ほど昔のことなので記憶しない旨、電話で懇切に返事をいただいた）

## 6. 鐘紡争議と総同盟の躍進

国島らが一九二九（昭和四）年秋、総同盟から離反したことによって、京都の総同盟は一時全下の組織の大半を失い、壊滅に近い状況に陥ったが、会長の吉田文治は、そのころ彼の経営にかかる百万辺の書店更生閣の二階に、西陣郵便局員上田豊造その他を集め、懇親を深めて、ついに通友同志会の組織に成功し、僅かに総同盟の命脈を保った。ところが思いがけなく一九三〇（昭和五）年の春になつて、総同盟の頽勢を挽回する日が到来した。それは四月五日突発した鐘紡の争議を契機としてであつた。

この一九二九（昭和四）年秋から一九三〇（昭和五）年春にかけての時期は、日本経済がかつてない難関にさしかかった時代であった。

さきに一九二七（昭和二）年三月から四月にかけて、多くの企業を倒産に追いこんだ金融恐慌は、その真只中の四月二十日に登場した田中義一内閣の高橋是清蔵相が、モラトリアムと巨額の財政金融措置を行つて、あやうく收拾することができたが、田中のその後の放漫財政と、対中国外交の失敗によつて、内外政策は全く行きづまり、田中は退陣、一九二九（昭和四）年七月二日浜口雄幸民政党内閣がこれに代つた。

浜口内閣は金解禁と財政緊縮、産業合理化の三大政策をかかげ、対中国外交の転換、海軍軍縮の断行、物価の引下げ、生産コスト低下による貿易の対外的優位の実現などによつて、国力の増強をはからうとした。そして一九三〇（昭和五）年一月十一日金解禁にふみ切つた。

浜口内閣のデフレ政策は、物価の低落と不況を招来することは必至であり、しかもこの内閣が金解禁の断行を決定した時は、すでにアメリカにおける株式相場の急落が始っていた。一九二九（昭和四）年十月二十四日のこの大暴落は、たちまち全世界に波及し、その後三年間余にわたる史上未曾有の大恐慌の導火線となつた。日本の株式相場の暴落は、翌一九三〇（昭和五）年四月に始まり、六月、七月との崩落をつづけた。最も深刻な打撃を受けたのは養蚕農家であった。一九二九（昭和四）年の春繭収入は一戸当百七十七円三十二銭であったのに対し、一九三〇（昭和五）年の同収入は、収繭高が約八%増加しているにかかわらず、約四二・三%の減収であった。（日本経済年報第二輯一二三ページ）貿易高も激減した。一九三〇年第三・四半期の輸出額は、前年同期に比べ三七%を減じ、同期の輸入額は三六・三%の減少を見た。（日本経済年報第二輯二〇一ページ）

この景気の悪化を見透してのことであろう。鐘ヶ渕紡績株式会社は一九三〇（昭和五）年四月五日第一次大戦の好況時代から支給していた工員本給の七割、事務員同六割の割増手当を、四月十日限りで廃止し、新たに三割の臨時手当を支給すると発表した。この寝耳に水の賃下げ発表は、全国三府十五県、三十六工場三万六千八百八十人に上る鐘紡従業員を驚かし、動搖せしめた。鐘紡は永年武藤山治社長のもと「家族主義」「温情主義」の社風をもつて知られ、一九一八（大正七）年から一九二三（大正十二）年にかけては株主に対して七割の高配当を行い、この当時もなお三割五分の配当を維持していた。

労働者にのみ犠牲を強いるこの賃下げ案は、労働者たちの憤激を買った。大阪の淀川工場では同九日、井家上専その他数人が従業員大会をひらいて「手当削減を取り消すこと」など四項目を決議し、歎願書を会社に提出した。翌十日これに回答の必要なしとの会社の声明に接するや彼らは直ちに約千人の従業員をひきいて会社の門を脱出しストに入った。

京都工場には三千四百余人の労働者がいた。京都ではそれより早く四月六日、総同盟府連会長の吉田文治が鐘紡対策を決意していた。一時総同盟を離れたが、再び復帰の機会をうかがっていた国島泰次郎にとって、この争議は復帰を実現する絶好の機会であった。国島は吉田からビラの印刷費用を借りうけ、七日から鐘紡の門前にたって、出入りの労働者にビラを手渡し、また壇の上から工場内の労働者たちに呼びかけた。四月十日吉田会長らは、従業員代表四人とともに、田中工場長と会見、交渉したが要求を拒否された。交渉破裂の報とともに、先ず製綿部、精練部の職工のうち、約二百人が工場を脱出し、その後脱出相つぎ、ストは始まった。

こうして争議はその後六月三日まで延々と続き、同日午後八時三十分、津田副社長と西尾末広など総同盟代表が会見し、「減給による労働者の収入減は、幸福増進資金及びその他の方法において償うこと」「三割手当は七月より本給にくり入れること」その他計六項目の解決条件に同意して、五十五日振りにストはその終結を見た。

この争議の過程で京都の総同盟は、教育部を組織して、日本労働運動史（八谷幸太郎）、財産制度

(本郷大植)、現代思想(堤隆)、労働問題(岩本健一)、健康保険(津司市太郎)、社会問題(佐野栄一)などの講座を毎夜三十分開始するなどして、争議団員の啓蒙と結束をはかった。(運動史六九七ページ)

鐘紡争議を敢闘したことによって、京都の総同盟は大いにその勢威をたかめ、同年六月には京都連合会の組織人員は一千四百七十九人に膨張した。その内訳は京都運輸労組三百三十五人、通友同志会支部連合会百四十二人、京都紡織労組八百九十人、京都合同労組三百十二人であった。(運動史七二七ページ)

## 7. 総同盟京都連合会の教育活動方針と労働学校の再建

鐘紡争議とその後の組織の発展によって、総同盟京都連合会は財政的にも余裕ができ、左京区東山二条東入北入に新しく事務所を設けた。そして七月二十七日三条の基督教青年会館で開いた京都連合会大会では「……今やオルガナイザのあるいは十名、あるいは二十名の潜入せる工場実に二十七の多きにおよび、組合員数一躍一千四百九十五人を算するにいたつた。……」(運動史七二八ページ)と誇らかに宣言した。国島、上田、渡辺ら数人の常任活動家に対しても、手当を支給できるようになった。しかしところ、不況の嵐はきびしく業界に吹き荒れ、企業の操業短縮、人員整理、賃銀引下など

が相次いだ。総同盟京都連合会はこの事態に立ち向はねばならなかつた。九月には三谷伸銅、京都織物両争議を手がけて、いづれも惨敗し、十月には日新電機争議に関与したが、会社の悲境になすすべもなく、組織さえ失う結果となつた。また同月の井上電機争議でも同じ事態を招いた。こうして一九三〇（昭和五）年秋の総同盟京都連合会は多発する争議に追いまわされ、充分な調査も行なえず、組織的指導などほとんどできない状況であった。しかもその結果の多くが、惨敗とあつては、財政的にも耐え得るところではなかつた。十一月二十一日の常任委員会では「闘争激発主義より組合財政を拡充すること」が議決され、また十二月十三、十九両日の常任委員会では、闘争激発主義を反省し、日常の調査、教育活動を重視すべきことを認識して、次の方針をたてた。（運動史八三五ページ）

#### イ、一、茶話会 二、研究会 三、弁論会の統一

ロ、連合会の教育講座（毎週一回）順次各支部に及ぼす事

ハ、労働講座は各地区に出張、数日間づつ開講し研究会及茶話会を合流して時間及講師の使用を合理化せしむること

ニ、テキストとして教育部は各組合員に対し左記の書物を推せんする

第一部は社会主義、労働組合の何たるかを示し、第二部は経済、政治及労働組合運動の発達を示し、第三部はマルクスの学説、第四部はマルクス学説の批判を示し、第五部は総同盟の指導理論、社会民衆党の指導理論を示すもの。

推せんする書物は全面的に我々の贊意を表するものではないが、而し種々な意味に於て、適當と認めたが故であつて、(一)容易に手に入り得られ、(二)安価を目標としたので、良書といえども選に洩れたのもある。将来更に新しく選んで、その都度ニュース等によつて報告する。

第一部 社会主義とは何か（堺利彦）十五銭（労農出版社）、社会主義大意（堺利彦）十銭（無産市民社）、立党の精神（漫画入）（安部磯雄）十銭（クララ社）、現代社会生活の不安と疑問（堺利彦）一円（文化学会）、ブルジョア政治の解剖（馬場恒吾）十銭（クララ社）、政治道德論（安部磯雄）三十五銭（クララ社）、社会主義時代（安部磯雄）七十銭（巖松堂）、次の時代（安部磯雄）一円五十銭（春陽堂）

第二部 日本労働運動発達史（赤松克麿）一円（文化学会）、日本經濟発達史（白柳秀湖）三十五銭（クララ社）、無産政党発達史（赤松克麿）近刊、財界太平記（白柳秀湖）二冊四円（日本評論社）日本憲政史（尾佐竹猛）一円五十銭（日本評論社）、経済制度と経済發展（ベルンシュタイン）一円（平凡社社会思想全集）、労働運動二十年（鈴木文治）一円五十銭（総同盟本部）

第三部 マルクス学解説（高畠素之）一円（改造社）、資本論解説（高畠素之）一円（改造社）、倫理と唯物史觀（カウツキー）二十銭（改造社）、金融資本論（ヒルファーディング）四十銭（改造社）、資本論（マルクス）五円（改造社）

第四部 批判マルクス主義（高畠素之）一円五十銭（日本評論社）、マルキシズムの修正（ベルンシ

ユタイン）一円（平凡社社会思想全集）、マルクス主義と社会主義（シンコヴィッチ）一円（同上）  
唯物史観の改造（ツガンバラノフスキイ）一円二十銭（新潮社）、思想問題（土田杏村）五十銭  
(日本評論社)

第五部 社会運動に於ける現実主義（赤松克麿）一円（青雲閣）、解放運動に於ける指導理論（赤松  
克麿）三十五銭（クララ社）、近代政治の根本問題（吉野作造）三十五銭（クララ社）、社会民主  
主義の旗の下に（赤松克麿）七十銭（忠誠堂）、無産戦線を攪乱する者は誰か（赤松克麿、小池四  
郎、吉川末次郎）十五銭（クララ社）  
(以下中略)

教育部メンバー 土田杏村、中島重、田畠忍、田原和郎、野村重臣、高橋貞三、高橋信司、笛井源次  
郎、永井健、吉田文治

京都連合会では、上記の通り教育活動方針をたてるとともに、新事務所を会場として労働学校を再  
興することを定めた。その規約と課目、講師は以下の通りであった。

- 第一 本校は京都労働学校と称す
- 第二 本校は事務所を左京区東山二条東入北入日本労働総同盟京都連合会に置く
- 第三 本校は労働組合員ならびに一般労働者として必要なる知識を与うることをもつて目的とす
- 第四 本校は労働組合員または労働階級たることをもつて入学資格とす

第五 本校は毎年一月、四月、七月、十月に新学期を開講す

第六 授業は毎週日・木の午後七時より十時までとす。ただし隨時研究会を開くことを得

第七 授業料は一学期（三ヶ月間）一円五十銭とす。ただしはじめて入学せんとする者は外に入学金として金五十銭を納付すべし

授業課目Ⅱ一、社会学、経済学、財政学、唯物史観、一、社会思想史、社会運動史、労働組合論、文學論、社会立法論、消費組合論、無産政党論、国家学、日本資本主義の研究、実際戰術論、その他時事問題について特別講義

関係講師Ⅱ中島重、高橋貞三、吉田文治、永井健、田原和郎、堤隆、鈴木文治、日匹重亮、土田杏村、丹羽貫三、国島泰次郎、山内暉雄、西尾末広、吉川末次郎、笛井源次郎、外十数講師

（運動史七二八・七二九ページ）

そして一九三一（昭和六）年一月二十二日より総同盟京都連合会は、社民党と共催で、毎週一回、東山二条の連合会事務所で労働学校を開講した。課目および講師はつぎのとおりであつた。

プロレタリア文芸論（永井健）、社会立法論（高橋貞三）、社会思想史（中島重）、消費組合論（田原和郎）、社会民主主義論（笛井源次郎）、都市住宅問題（吉川末次郎）、資本主義のカラクリ（高橋貞三）、共産主義？社会主義？（中島重）、労働組合論（国島泰次郎）（運動史九三八ページ）昭和六年版の労働年鑑によれば、この労働学校の主事は上田豊造で、授業は週二回、一日三時間、

その開講期間は三ヶ月をもって一期とし、生徒数は二十八人と記載されている。

この学校について国島泰次郎は、生徒数ははじめ二十人程度で、昭和七年に事務所が坊城蛸薬師角に移るまで細々と続いたといい、また吉田文治は生徒数は数人で、授業も二週・三週置きにとびとびに開くような状態で、有名無実に近かつたと述べている。不振の主要な原因は財政難にあつたようである。

## 8. 京都労働組合総評議会の結成と解体

鐘紡争議を契機として発展をとげた総同盟京都府連合会とならんで、この年新しく労働組合の結成に成功したのは、新労農党京都府連であった。一九二九（昭和四）年十月一日結成された新労農党京都府連合会（委員長兼政治部長森英吉、組織宣伝部長奥村甚之助、書記長大塚有章）は、結党当時その傘下には、僅かに奥村のひきいる弱体の合同労組ただ一つをもつにすぎず、ひそかに組織拡大の機会をうかがっていたが、たまたま一九三〇（昭和五）年四月鐘紡争議と同時期に、深刻な恐慌のあたりをくらつた洛北友仙工場の間に、賃下げを画策する気配のあることを知り、大塚らが工場を歴訪して労働者の組織に奔走し、四月十七日、洛北染物労働組合準備会を組織した。準備会では賃金引下げ、解雇反対とともに、賃金の三割値上げ、解雇手当の制定その他を要求する決議文を経営者に送付して

先制攻撃をかけた。この要求を工場主側が拒否したことから、二十五日よりストライキの火蓋は切られた。大塚らはこの争議を指導し、一ヶ月の苦闘の後、ついに勝利を收め、洛北染物労働組合（組合員二百人）を創立した。その間争議団では、労農党本部の応援を求めて、労働講座を開いたが、その第一日目の五月十五日夜には、河上肇博士が、田中古川町の争議団本部で「労働者は何故貧に苦しむ何故資本家は富むか」を実例をもつて説明し、争議団員はしづかに傾聴した。（運動史七三六ページ）

争議に勝利を収めた新労農党は、洛北染物労組、皮革工組合、陶磁器工組合、西陣貢業者革新同盟、京都運輸自由労組準備会、京都市電交友会準備会、滋賀織維化学労組の八団体を結集し、一九三〇（昭和五）年八月一日、三条青年会館に大山郁夫党首を迎えて、京都労働組合総評議会を結成した。そしてつづく三日の執行委員会で、委員長朝田善之助、常任書記大塚衛（有章）その他役員を選出した。

総評議会は結成大会において、長文の大会宣言、活動方針書および三十六項目に上る行動綱領を議決した。その活動方針書の中で組合員が「いずれの党を支持し、いずれの党的組織に参加するかといふことは、組合員の自由であって、総評議会としては無責任である。」とはっきりと政党支持の自由の原則を打ち出したことは、大きな特長であった。一九三〇（昭和五）年十月十日現在のその組織人員は一千三百人と称された。

ところが京都の労農党が、総評傘下労組の組織と争議に明けくれていたこのとき、小岩井淨ら同党大阪府連合会が八月二十九日、党の解消を決議し、本部の細迫兼光書記長も、同日解消賛成の意見書を発表した。党本部は翌三十日解消反対を声明し、一時この騒ぎは収まつたが、十月二十一日河上肇、上村進、神道寛次連署の解党意見書が党機関誌「労働農民新聞」に掲載されたことから、事態は紛糾して、解消派、反対派の溝は深まつた。河上とのつながりの深い京都では、十一月四日の党の常任委員会で、八対三の割合で解消派が多数を占め、翌五日拡大執行委員会で解体を議決した。しかし坂本時三、木村忠一らは解体反対声明を発表し、党の再建に着手したが、その勢力の挽回は望み得べくもなかつた。

労農党解消派は党の解体決議後もなお、総評による組合活動をつづけたが、翌一九三一（昭和六）年三月二十九日、この組織が「……日本の左翼組織である日本労働組合全国協議会に対立し、労働者大衆の革命的闘争力を汚辱する反動的役割であることを確認した……」との解体声明書と、その内容を具体的に明らかにした長文の「檄」を発表して組織をといた。（運動史八五五ページ）解消反対派の坂本時三らは、弱体ながらも組織を守り、労農党中央が四月十八日結成した日本労働組合総評議会の傘下に入った。

前述の総評解体声明書の中の「日本労働組合全国協議会」とは、さきに解散を命ぜられた評議会の最左派の人々が一九二八（昭和三）年十二月二十三日、秘密裡に創立した団体で、共産党直系の唯一

の労働団体とみなされていた。その京都における組織は、経験の浅い街頭分子的運動家や、学生らの集りであったが、一九二九（昭和四）年秋から一九三〇（昭和五）年はじめにかけて、一応化学産業労働組合、日本交通運輸労働組合、一般使用人組合などに勢力を扶植した。

当時の日本共産党と全協中央部は一九三〇（昭和五）年のメーデーに武装蜂起を指令するなど、極左偏向に陥っていた。その影響下にあつた京都の全協は、十月二十四日の中京刑務支所襲撃事件や、十一月九日京津電車顛覆事件を起して大弾圧をうけ、殆んど潰滅の状態にあつた。総評が解体を声明したのはこの潰滅下の時期であった。京都の全協が再建に着手したのは一九三一（昭和六）年四月十五日のころであったといわれる。

## 9. 全国労働組合同盟京都府連合会の教育活動

一九三〇（昭和五）年八月十五日、労農大衆党と全国民衆党、日本大衆党の京都支部は合同して全國大衆党京都府連合会を結成した。そしてこの三党の系統下の各労働組合は、これに先だつ六月十五日、全国労働組合同盟京都連合会をつくり、傘下労組の編成がえをすすめ、次の組合をその勢力下においた。西陣織物労働組合（二百五十人、辻井）、京都一般労働組合（百五十人、半谷）、京都出版産業労働組合（百十人、菱野）、京都木材労働組合（百三十人、平口）、京都染色労働組合（二百二

十人、増山）などであった。（カッコ中組合員数と代表者）

全国大衆党京都府連合会は、八月十五日結成大会を開催して、党運営の基本方針の樹立に着手したが、その一つの教育出版部の方針を次のように定めた。

「(イ)支部連合会ならびに各支部における定期茶話会、研究会の組織、その指導監督、研究題目の選定、講師指導者の選定派遣……(二)指導者の養成に関する計画、(木)書籍雑誌、パンフレット、リーフレット等の選択、推薦、取りつき、販売、(ハ)教育方針の編著印刷」などを定めた。そして茶話会、研究会については、各支部毎月一回以上必ず定期的に開くこととした。（運動史八〇五ページ）

この全国大衆党と全国労働組合同盟がその態勢を整えた十月はじめ、最初に着手したのは「失業反対闘争」であった。党と組合は共同で「失業対策連合委員会」を組織し、一九三〇（昭和五）年十月上旬より中旬まで、党員ならびに組合員に、(イ)現在の国際的ならびにその一環としての日本の失業状況と結びつけて、資本主義の現段階の暴露、(ロ)現在の失業の性質、(ハ)なぜわれらはこの闘争を全力的に戦わねばならぬか、(ニ)われらの展開する失業反対闘争の意義、(木)われらの掲げる窮屈の目標と当面の要求等々を徹底的に把握せしめ、この理解によつて、明白に大衆動員に党員、組合員をその先頭に参加せしむることを目的とした茶話会、研究会を、次のごとく組織すること。茶話会、研究会の日程、七日夜、東山支部、左京支部連合（責任者橋本、半谷、菱野、志村、小川）、八日夜、上京支部西陣労働（責任者辻井、増山、佐々木）、十日夜、下京支部一般労働（責任者神田、菱野、橋本）、

十二日夜、葛野支部映画従業員（菱野、半谷、吉川）、十三日昼、司厨労働（橋本、吉川）、十三日夜、全党員、組合員（以下略）などをきめた。（運動史八〇九ページ）

つづいて十月十七日、麻生党首を迎えて、岡崎公会堂で演説会をひらき、宇治および市内各所でも演説会を開催した。そして十一月一日には、三条青年会館において、党、全労連合の京都地方労農議会を大盛況裡にひらき、「失業問題対策の件」、「解雇、賃下げ反対闘争対策の件」、「生活不安防衛対策の件」その他当面の重要課題四項目を提案、説明しようとしたが、嚴重な官憲の警戒のもと、監視の警官によってどの弁士も数言にして中止を命ぜられ、大暴圧のうちに解散された。（運動史八一ページ）

以上のように全労京都連合会は、その態勢の整うとともに、華々しい活動を展開したが、それはつかの間のことであった。早くも一九三〇（昭和五）年末には、傘下の組合からの会費の未納と、幹部間の不和によって運動は停滞した。

一九三一（昭和六）年一月二十九日、全労京都連合会では、神田兵三、半谷玉三らが中心となつて再建策を協議し、三月二日の執行委員会で、「(1)財政的窮乏、(2)加盟組合の統制力の無力、(3)各部門の無活動状態、(4)集会の不活発、(5)指導者養成の欠如、(6)印刷物による煽動運動の不活発」など連合会の弱点を自己批判するとともに、陣容立直しのため「不斷に組合員大衆を集会に動員して、教育運動による階級意識が注入されて、理論的武装がほどこされねばならぬ」とした。そして「連合会主催

組合主催の定期茶話会を必ず開催する事、指導者養成の特別研究会、短期講習会、夏期労農大学等を必ず組織開催する事」を提案し労働者教育の重要性を強調した。（運動史九〇一ページ）

しかしこの提案はその後再燃した連合会幹部の対立、内紛に禍いされた中で、果して生かされたかどうか疑問である。

## 10. 満州事変前後の無産政党と労働組合

全国大衆党の結成後もなお、無産政党合同運動はすすめられ、一九三一（昭和六）年七月五日、全国労農大衆党が創られた。これは全国大衆党と労農党および、社会民衆党の中の合同派によって結成されたもので、「二党半の合同」といわれた。京都では津司市太郎、上田蟻善が合同派の主唱者として社民党から除名された。こうして合法無産政党は、全国労農大衆党と社会民衆党の二つが並立した。一方労働組合の側にも、戦線統一の機運が醸成されていた。かねて労働立法促進委員会を結成していた総同盟、日本海員組合ら六団体は、全労、総連合とともに一九三一（昭和六）年四月八日と五月七日の二回、神戸で会同し、ゆるやかな懇談会形式の「日本労働クラブ」の構想をまとめ、六月二十五日の懇談会で「反共産主義、反無政府主義、反ファシズム」を指導精神とする日本労働クラブを発足させた。クラブの目的は各団体の融和親睦、意見の交換、社会立法の制定、改善に対する協議、国

際問題に対する態度の決定、労働時間、最低賃金、団体協約などに関する意見の交換、構成団体の争議に対する態度の決定であった。

これに対し全労の中の労働クラブ参加反対派は十一月、クラブ排撃同盟を結成してこれに対立した。無産政党と労働組合が以上のような動きを示していた中で、極東における政治情勢は大きく變るうとしていた。それは日本の軍部による満州（中国東北部）における謀略であった。

一九三一（昭和六）年九月十八日夜、奉天北郊の柳条溝で、満鉄の線路が爆破された。これを機会に日本軍はただちに軍事行動を起し満州の主要地点を占領した。かねて満蒙を日本の生命線とみなし日本の「特殊権益」を守り、拡大する必要を宣伝し続けてきた軍部は、満州事変勃発を期して、一段とそのキャンペーンを強化し、国防思想の浸透をはかった。新聞もまたこれに同調して、日本軍の戦果をたたえ、排外思想をあおった。

大衆はこの事変が、国民を苦悩のどん底につき落す、十五年戦争への起点であろうとは、予測するすべもなく、ただ軍部や政府、新聞の宣伝のまま、日本の正義と、軍の行動の正当性を信じ、それに追随した。

一九三二（昭和七）年に入ると事態は一層進んだ。一月二十八日、上海事変が起り、日本は三カ師團を派兵した。三月一日には「満州國」がつくられた。いうまでもなく完全に日本の支配下におかれた「かいらい」政権であった。国内にはファッショの嵐が吹きあれた。二月九日、前藏相井上準之助

が、つづく三月五日には、三井合名理事長団琢磨が右翼の手にかかつて射殺された。さらに五月十五日には、一団の海軍将校が犬養首相を官邸に襲って射殺し、その別働隊は、警視庁、日本銀行、牧野内大臣邸などに爆弾を投げた。この五・一五事件を契機に、政党内閣は幕を閉じた。

満州事変を起点とする軍部主導の国家主義の抬頭は、無産政党、労働組合の上にも、大きい影響をもたらした。帝国主義戦争反対を持論とした彼らの多くも、いつかその論調をかえていた。社民党の書記長赤松克磨は、小池四郎、平野力三らとともに社民党たもとを別ち、労大党の山名義鶴、藤岡文六らと結んで、五月二十九日日本国家社会党を結成した。またこの日、下中弥三郎、佐々井一晁らによつて、新日本国民同盟がつくられた。かれらはともに国家社会主義を標榜した。

京都の社民党からは、書記長岩本健一外三十余名が、四月二十六日赤松のもとに走った。またそれより早く、一九三一（昭和六）年十一月五日、労大党の神田兵三、半谷玉三らは、国家問題に対する労大党の認識の欠如などを指摘して脱党した。彼らは後に、新日本国民同盟に加盟して、その幹部となつた。

国家社会主義派が社民党、労大党から離党して後、両党の合同機運はにわかにすすんだ。そして一九三二（昭和七）年七月二十四日、相合して社会大衆党を組織した。ここに党員数七万余人を擁する单一無産政党が出現した。中央執行委員長は安部磯雄、書記長麻生久であつた。

京都でも九月一日両党が合同して、社大党京都連合会を結成した。

無産政党の統一機運が高まるとともに、労働団体の戦線統一も促進され、一九三二（昭和七）年九月二十五日、日本労働組合会議が結成された。さきに日本労働クラブ結成以来志向してきた「健全なる労働組合主義」を旗印として「大右翼」の結成は成功した。総同盟、全労、海員組合その他を合せ会員数二十八万人、全組織労働者の五八%を占めた。

## 11. 総同盟と全労

### （総同盟）

日本労働組合会議の結成に成功した総同盟は、一九三二（昭和七）年十一月三日、第二十一回全国大会を開催した。この大会で総同盟は、さきに大正十一年の大会で定めた戦闘的、革命的綱領を廢棄し、名実ともに労働組合主義に立つこととなつた。その新綱領は「一、われらは同朋相愛の理想にしあがい、識見の開発、技術の進歩、徳性の涵養をはかり、もって自己の向上と完成を期す。二、われらは労働者の自主的組織と訓練により、労働条件の維持改善ならびに共同福利の増進を期す。三、わ

かれは国情に立脚し、資本主義の根本的改善をはかり、もつて健全なる新社会の建設を期す」であった。

この大会の決定をうけて、総同盟京都連合会は、「不健全なる京都地方の労働組合運動の、過去の残滓を清算して、真に労働者の福利増進、共同の利益のため、労働組合に対する誤れる通念の一切を正常なる発展へ引戻す」（運動史一二三〇ページ）ことを決意した。総同盟はこれを機として、協調主義に転換し、産業協力方針を明確化することとなる。

一九三三（昭和八）年一月十日と十二日の常任委員会で総同盟京都連合会は、この年度の運動方針大綱を定めたが、その中に「『労働経済』『労働』の読書会を開催して、教育運動をより熱心にまき起すこと」をあげた。そして六月十日の常任委員会で、七月上旬から京都労働学校を開講すること、会費は一人五十銭、講師は中島重、田原、永井、水谷、西尾、末兼、担当責任者は教育出版部長永井健、主任水島軍治を決定した。しかしこの案は連合会事務所移転が予定通り行えなかつたのでとりやめ、八月六日新事務所での最初の執行委員会で、労働学校の形式をやめて「世界経済事情および時事問題解説のため、本部にて講演会を開催すること、ただし月に三回位」と「各支部からの申込みに応じて講師を派遣する。」という二本建に改めた。そして講師には中島重、高橋貞三、末兼敏夫、田原和郎、西尾末広、永井健、水谷長三郎の七人を予定した。またその責任者は永井、水島であった。しかしこのプランがどのように実現したのか明らかでない。（運動史一二四一ページ）

(全労)

他方一九三〇（昭和五）年六月、京都連合会結成後、内紛をくりかえしていた全労では、一九三一（昭和六）年十一月五日神田兵三、半谷玉三ら有力者が全国労農大衆党より離反し、また日本労働組合会議への加盟に反対してきた全労の排同派は、一九三三（昭和八）年五月四日分裂して、全労統一会議京都地方協議会を組織するなどがあつて、全労京都連合会は極度に弱体化した。僅かに辻井民之助らが、西陣織物労働組合を足場に、その孤墨を守つてきたが、辻井ら本部派は、一九三三（昭和八）年十一月二十日、第四回大会を開催して、運動方針、規約改正の外、日本労働組合会議京都地方協議会結成に関する件、中間搾取撤廃に関する件、労働立法改廃並に制定促進に関する件、帝国主義戦争反対に関する件など計七議案を審議決定した。

運動方針には、一般闘争方針、組織方針、教育方針の三つがあげられたが、教育方針について見る  
と、「(1)教育方針の大綱……一般組合員に対し不斷の教育運動を通じて、資本主義の現段階、ファッショ  
ンの本質、極左主義の誤謬等に就ての正しき認識を与え、階級意識を高めるべく努力しなければならぬ。(2)初步的教育……茶話会、研究会、文書の利用。(3)オルガナイザーの養成……講習会、研究会等を通じて労働運動の基礎的な理論、労働運動の戦術等を教育すること。」をあげた。（運動史一三五九ページ）

## 12. 全評と全総

この一九三三（昭和八）年のころ、京都の労働団体には、総同盟と全労の外、日本労働クラブに反対した全労排同派の全労統一全国会議京都地方協議会（一九三三（昭和八）年五月六日結成）と、大塚有章らの去ったあと、残留派によって一九三一（昭和六）年六月二十三日結成された日本労働組合総評議会京都支部の後身、総評京都協議会（一九三三（昭和八）年六月六日結成）があつた。

「健全なる労働組合主義」を指導精神とする日本労働組合会議に対抗して「階級闘争主義による統一」を目指すこれら左派の組合にも統一の機運がうまれ、まず関東で一九三三（昭和八）年五月、関東労働組合会議が結成されたのにつづいて、一九三四（昭和九）年十一月十八日、「日本労働組合全国評議会」が成立した。京都では一九三五（昭和十）年一月二十三日と二十六日の両日、前記両者が会同して「京都協議会結成準備会、組合代表者会議」をひらき、全国評議会京都協議会を成立させた。その組織人員は千三百人と称されたが、実際は五百人未満であつたようである。

この全評の傘下に「京都平版工組合」があつた。この組合は一九三五（昭和十）年二月十六日、第一回大会を開いたが、その運動方針の中で「教育活動」を次のように定めた。

「（第一）一般組合員大衆に対する教育のもつとも具体的方法は、工場座談会、研究会である。そ

のほかパンフレット、組合ニュース等の配付、（第二）指導者養成のための教育は、各分会から最も戦闘的な青年闘士を選び出して理論的教育を行ふ。」（運動史一四〇三ページ）

全評傘下の一小組合がファシズムの嵐が漸く激しさを加えた一九三五（昭和十）年二月のこの時期に、上記のような戦闘的青年闘士の養成という積極の方針を掲げたのに對し、一九三二（昭和七）年末以来、労資協調主義への転換、産業協力運動の推進をはかつてきた総同盟は、労資懇談による相互理解と提携を通じての労働者の福利の増進、生活の実質的改善と、総同盟組織の拡大を期待した。労働者教育方針から「階級意識」色は完全に払拭された。

一九三五（昭和十）年二月総同盟京都連合会が事業主に呼びかけた文書「労働者福利施設に関する提議」の中で同連合会は「労働者の向上、福祉の為めに組織的な教育施設を設け、精神の陶冶、訓練、教化、啓発の途を講ずる」ことの必要を、各種工業組合に訴えるとともに、工業組合の行うべき具体的な施策として「組合男女従業員の諸心得一日常の心得、起居の心得、工場に於ける心得、修養に関する心得、教礼の心得、其他の心得等詳しい訓練、具体事項を列記したものを、組合従業員は總て之を常時携帶して、工業生活の指針とせしめる様にすること」を提言した。そしてその心得とは「たとえば、一、今日一日君の恩、親の恩、衆生の恩を忘れず、一、今日一日不足の念を起さず、偽りを言わぬこと、一、今日一日人の惡を言わず、己の善を誇らぬこと、一、今日一日身の攝生に努め、無理

と無駄をせぬこと、一、今日一日身の為め、國の為め奮闘努力すること、右の如き修養標語とも言うべき文面を組合各工場主要の場所、寄宿舎等に掲げて置いて、日常之を朗読するなど一日の反省をなし、一日の期待をなすの資とせしむべきである」と説明した。（運動史一三八九—一三九〇ページ）

さらに毎月一回の機関誌の発行、巡回映画教育、精神、時事講話、補習教育、裁縫、家事、作法、謡曲、生花などの教育、ダンス教育、清潔デー、整頓デー、各種デーの実施などを勧めた。

森戸辰男の期待した「独立労働者教育」（後述）と何と大きな相異であろう。「非常時」「準戰時体制」は総同盟をここまで追いつめていたのであろうか。

日本労働組合會議を形成する総同盟と全労との間にも一九三五（昭和十）年以来統一運動がすすめられ、種々曲折を経て一九三六（昭和十一）年一月十五日「全日本労働総同盟」を結成した。その綱領は前掲の総同盟第二十一回大会において定めたものと、概ね同様であったが、ただその第一項の冒頭に「我等は労働報公の精神に基き」という字句を加えたことは、急転変した当時の時代背景を象徴するものとしてまことに印象的である。

京都の総同盟と全労も一九三六（昭和十一）年六月一日、合同して「全總京都連合会」を組織した。その組織人員は一千五百人と称されたが、これも誇大で運動史の推定によれば、実情は五百五十人前後であった。（運動史一四四八ページ）

### 13. 労働学校の衰退とその原因

私が目を通した限りでは、「京都地方労働運動史」上における労働組合の教育活動は以上に尽きる。上記によれば、総同盟、全労とも組合としての教育方針をたて、その実現を志向したのは、一九三三（昭和八）年のころまでであった。しかしその多くは研究会、座談会の程度に止まり、「労働学校」の名を冠した常設的教育機関を開設したのは、総同盟京都連合会による一九三一（昭和六）年一月開校の「京都労働学校」をもって最後とする。それもさきに見たとおり、吉田文治の証言に従えば、名ばかりで実態は無いに等しい弱体のものであった。

労働組合が労働者教育の必要をしばしば表明するにかかわらず、その実行が伴わなかつたのはひとり京都だけではなかつた。

永年大阪労働学校の講師と、経営委員をつとめた、大原社会問題研究所員、森戸辰男（戦後一九四七—四八年、片山、芦田内閣の文部大臣）は昭和九年八、九、十月号の大原社会問題研究所雑誌に、「我が国における労働者教育について」の論文を寄せたが、この論文の中で彼は、「大正十年以来設立された『独立労働学校』（註1）の総数は三十五校に上るが、昭和八年十二月末現在、存続しているのは十一校であること、大正以来引き続き開設されている学校は、日本労働学校と大阪労働学校だけで

あり、労働者教育運動が、最も高まりを見せた大正十三年創立にかかるものは、当時独立労働学校だけではなく上ったが、昭和八年末には全く存在しない。」と指摘した。彼の表現によれば「労働学校の現状は微々として振はない」状況にあった。そして一九三三（昭和八）年十二月末現在における、いわゆる「独立労働学校」の範疇に属する労働学校は、

日本労働学校、大阪労働学校、神奈川労働学校、横浜労働学校、神戸労働学校、埼玉労働公民学校、プロレタリア政治学校、日本協同組合学校、上越農民学校、自由農民学校、強戸共愛女塾の十一校であるが、「稍性質を異にする農民学校（註2）を除外すれば、残り八校となり、そのうちにもなほ氣息奄々たるものもあるから、正常的な機能を發揮している労働学校は恐らく日本労働学校大阪労働学校ほか二、三校にすぎないであろう」と彼は断じた。（同誌八月号一六ページ）

（註1）森戸は「独立労働学校」とは「労働者に向って主として社会科学の無産階級的教育（謂ゆる独立労働者教育）を施す常設的教育機関」と定義した。（同誌八月号七ページ）

（註2）農民学校とは上越農民学校、自由農民学校、強戸共愛女塾の三校である。

森戸は労働学校不振の原因を、学校経営者の目から見た直接的原因と、その背景をなす「根本的原因」の二つの側面から分析した。

彼が直接的原因としてあげたのは「第一に財政難、第二は労働者教育に練達する講師を得難いこと、第三は生徒の①長時間労働、②学費、電車賃、外食費など経済的負担、③失業、転職、④組合運動に

時間をとられること、④講師の休講や、學習、娛樂設備の不備に基く学校への愛着心の喪失など生徒側の問題、第四は教授法及び教課目の問題、第五は官憲、資本家の圧迫、干渉の問題—例えは官憲の監査や教材、生徒名簿提出の強要、教師に対する出講妨害、登校生徒への監視、身元調べ、退学の勧説など」であった。

彼は右を「学校經營者の目に映じた直接的原因」ではあるが「その由つて来るところは、さらに遠くさらに深い。」とし、その「根本的原因」として次の事項をあげた。その第一は「資本主義的矛盾の増大に基づく恐慌・反動の時代」という「時代相」であり、第二は「労働学校に通学するものを好まぬ傾向さへが現れつつある」労働者教育に無理解な「無産団体の態度」。第三は左翼運動による、「合法運動の乘取り、破壊、誹謗」など「左翼運動の影響」、第四は党、組合の教育部や図書館、出版物の整備など「教育機会の増加」、第五は「労働学校自身の魅力の減退」などであるとした。彼は「無産階級運動の成功的な進展は、この階級における『意識の改革』を、改革された意識を持つ『新人』を、その必須条件とする。ところがかような『意識の改革』の『新人』の大量的出現は、抽象的な觀念操作の結果としてでも、無反省な自然発生的実際闘争の結果としてでもなく、現実闘争と結びついた独立労働者教育の助けを借りることなしには、之を期待することができない」と論じ、「無産階級運動の健全なる發展」のために、労働学校のもつ意義を高く評価し、その不振を深く遺憾とした。労働者運動に関して彼は「功利と感激とに養はれて、明確なる理論的訓練を欠いた運動は、怡度嵐

の中に放された船のない舟のやうなもの」であり、「現在のやうな反動の時代、彈圧の時代には、屢々致命的にさえ作用する」と憂えた。そして「今日到るところに見られる労働者運動における意氣沮喪、狂騒な急進主義、自暴自棄的過激行動、転向、分裂、裏切等々はその避け難い結果である」と嘆息した。

「労働学校自身も、反動的時期におけるその使命の重大性を意識して、自重自省しつつ、熱意を以て銳意その改善と発展に努力」すべきであり、その「最も肝腎なことは、教育方針において左右の偏向を戒めると共に、その教課と教授法とを改善して、その教育を社会的に階級的に有効、適切に清新且つ魅力的なものたらせることで」あり、「労働者が学校に来ぬ場合には、学校から労働者の方へ進出する工夫もなければならぬ」と森戸は主張した。

## (五) 労働組合の崩壊

### 1. 戦争と労働運動の後退

森戸は上掲の論文の中で「無産階級運動の成功的な進展はこの階級における意識の改革を必須条件とする」という論旨を展開した。しかしこのような言葉を使うことができたのは一九三六（昭和十一）年のころまでであった。一九三三（昭和八）年の京大滝川事件では、大学をあげて学問の自由を守る抵抗運動を組織することができたが、一九三五（昭和十）年の東大の美濃部達吉博士の「天皇機関説事件」では「国体」を楯にした右翼や軍部の激しい攻撃の前に、人々は口をつぐむことを余儀なくされた。その後学問、思想の自由は急速に失われ、空疎な神がかりの言葉が横行しはじめた。

一九三六（昭和十一）年二月の陸軍正規将兵の反乱<sup>112</sup>・二六事件に対して、政党、労働組合は全く無力であった。その年メーデーは禁止され、敗戦の翌年まで労働者はこれを回復することはできなかつた。さらに同年九月十日、陸軍省は陸軍工廠従業員に対し、労働組合からの即時脱退と加入禁止を命じた。全総と社大党の抗議に対し、陸軍当局は「肅軍の立場から止むを得ない」と、とりあわず両者は空しく引きあげる外なかつた。

つづく一九三七（昭和十二）年七月七日の日華事変の勃発は、無産政党、労働組合に対し、その死命を制する決定的な影響をもたらした。事変は日本帝国主義の大陸侵略戦争ではなく、「抗日赤化」に対する「東亜安定」のための「聖戦」とされた。そしてその完遂のため、「挙国一致」「国民精神総動員」が要請された。

政府は左翼団体や左翼思想家の存在を許容しなかつた。日本共産党は既に一九三三（昭和八）年六

月の佐野学、鍋山貞親の転向声明以来、なだれをうつて崩れはじめ、同年十一月に野呂栄太郎、同十二月に宮本顯治が検挙されて壊滅に瀕し、一九三五（昭和十）年三四四日の袴田里見逮捕によつて、止めを刺された。傘下の全協もまた、一九三四（昭和九）年末のころにはその機能を喪失していた。検察当局の銳鋒は、日本無産党及び全評など、合法左翼に向けられた。日本無産党は一九三七（昭和十二）年二月二十日全評、東交など合法左翼 団体を中心結成された反ファシズムを標榜する政党であった。一九三七（昭和十二）年十二月十五日以降、検察当局は日本無産党、全評などの幹部および「労農派」とよばれた学者、知識人ら四百余人を検挙した。この大量検挙は後に「人民戦線事件」といわれた。

京都ではそれより早く、事変勃発間もない一九三七（昭和十二）年八月十三日、文学同人雑誌「リアル」の関係者を、共産主義の宣伝を意図したものと断じて検挙したのをきっかけとし、同年十一月以降翌一九三八（昭和十三）年にかけて雑誌「世界文化」、週刊新聞「土曜日」、京大学生らの雑誌「学生評論」、同志社大学関係の雑誌「同志社派」などの関係者を、いづれも反ファシズム、人民戦線運動を鼓吹し、共産主義社会の実現を企図したものとして弾圧した。これは「京都人民戦線事件」といわれた。

社大党や全総もまた、無事ではあり得なかつた。社大党はそれよりさき一九三七（昭和十二）年十一月十五日、第六回大会で「資本主義の打破、無産階級の解放」の綱領を廃止して「一、わが党は国

体の本義にもとづき、日本国民の進歩発達をはかり、もって人類文化の向上を期す。二、わが党は労大衆を代表して、資本主義を改革し、もつて産業の計画化と、国民生活の安定を期す。」との綱領を定め、時局に即応する姿勢を示した。全総はそれより更に早く、十月十七・十八日の全国大会で、「同盟罷業絶滅・産業平和確立運動」、「出征将士ならびに遺家族慰問義金募集運動」、「愛国公債応募準備の月掛け貯金運動」の「労働奉公、銃後強化三大運動」を決定し、戦争への協力を誓った。

## 2. 戦時下総同盟の労働者教育運動

日華事変の勃発によつて労働学校も大きい影響を蒙つた。一九二二（大正十一）年六月以来開校し続けてきた大阪労働学校は、一九三七（昭和十二）年十月開講を最後にこれを閉鎖した。その最後の学科と講師は「戦争と經濟組織・戦争と思想」（森戸辰男）、「戦時財政論」（河上丈太郎）、「事変と労働問題」（西尾末広）、「貿易為替統制論」（佐藤善郎）、「戦争と物価」（松沢兼人）、「消費統制」（星野周一郎）、「応召家族援護問題」（古野周蔵）、「事変と列国の動向」（藤田進一郎）、「産業統制」（田万清臣）であった。一九三六（昭和十一）年六月、一時復活した神戸労働学校も翌年には再び閉鎖し、総同盟傘下の労働学校としては、東京の日本労働学校がただ一つの学校として、一九三八（昭和十三）年まで残つた。しかし日本労働年鑑第二十卷（昭和十四年版二三一ペ

ージ）の伝えるところによれば、「しかしこれとて、大森、吾嬬、城東その他の地域における巡回講座に、熱心な聴講者を集め得てはいるが、中央の定期講座への出席者は、残業に続く休日出勤という如き事情に阻まれつつ、漸減の一途をたどっている。」という状態に陥っていた。

時局に対応しての労働者教育運動の徹底を重視した総同盟は、一九三八（昭和十三）年七月九日の第三回中央委員会で「夏季教育運動」の方針を決定し指示した。その目的、方法、時期、題目等は以下とのおりであった。

一、目的—(イ)組合並に職場の主要なる幹部に時局認識の強化、戦時下労働運動の積極化に資するための教育 (ロ) 時局下政治、経済、思想、社会生活、労働運動の動向に関する一般的研究に止らず、幹部相互の討論、懇談により具体的実行運動の研究をなす。

二、方法—(イ)連合会又は組合は同盟本部教育部と連絡の下に、地域、職場、組合等を単位として行ふこと、(ロ) 中央、地方、本部、支部を問はず、幹部はそれぞれの関係に於いて、必ず出席、参加すること、(ハ) 必ずしも多数出席を期待せず、数名の幹部間でも（例へば多忙な職場では工場の食堂でも）行い徹底を図ること。

三、時期—(イ) 八月一杯を本運動の時期として出来るだけ組織の要所に隅々まで徹底せしむること、(ロ) 連続三日又は隔日三日を原則として、それぞれの実情に応じて按配すること。

四、講師—(イ) 従来の如き特派講師を主体とせず、同盟本部役員、連合会、組合本部役員等が自ら研究

指導に当ること、(ロ)特殊問題の研究に必要な講師は、連合会又は組合よりの要求に基き、同盟本部教育部に於いて特派又は依頼すること。

五、題目一左記一般的並に特殊的問題中より選択し、これに必要な講師を配して行ふ。同盟本部教育は追つて必要なテキスト（研究資料）を作製して送附するはず。(1)一般的ー(イ)戦時政治、經濟進行の実情と、その労働階級に及ぼす影響、(ロ)戦時体制下における労働問題とその対策、(ハ)戦時労働運動の立場と運動方針。(2)特殊的ー(イ)銃後生産協力運動の進行状態とその方策、(ロ)戦時体制下の労働組合の組織並に機能の拡充方策、(ハ)労資調整問題（産業報国会運動）等の実際批判と対策(ニ)平和産業並に戦時下失業問題等の動向とその対策、(ホ)國家総動員法発動に伴ふ労働組合の対策、(ヘ)戦時生活確立運動の意義と実行方法、(ト)物価対策並に賃銀問題対策。

六、報告ー連合会、組合教育部は本運動の成績を直ちに本部教育部宛に報告すること。

(総同盟五十年史第二巻、三八二—三八四ページ)

以上の総同盟本部の教育活動方針に対し、京都連合会がどのように対応したか明らかでない。

### 3. 労働組合の崩壊

総同盟がこのような積極的、かつ地についた教育運動を展開した一九三八（昭和十三）年八月、政

府は厚生、内務両次官名で二十四日、「労資関係調整方策に關する通牒」を発して、「産業報国運動」を積極的に推進する方針を明らかにし、「産業報国会」設立指導を、各府県警察部特高課に委ねた。

「産業報国会」とは財団法人協調会（一九二〇年十一月創立）が一九三八（昭和十三）年四月二十八日、事変下最も緊要な労資関係調整のための機関として、政府に建議したもので、その指導理念は「労資一体」「事業一家」「産業報国」にあつた。この提倡に対し、資本家側の団体「全産連」は若干の条件をつけながらも賛同した。他方無産階級の代表、社大党も七月五日の委員会で「産報運動の指導精神に賛意を表し、その中央連盟には積極的に参加して、われわれの主張を生かしていくべきである。」と申し合わせた。

しかし総同盟内部の意見は二つに分れて紛糾した。旧全労系は組合の自發的解散、産報一本化を主張し、旧総同盟系は労働組合と産報の二本建方針を固執した。両者の主張は平行線をたどつたまま、一九三九（昭和十四）年七月二十四日、ついに決裂した。松岡、西尾らの旧総同盟系は同年十一月三日の大会で、その名を元の「日本労働総同盟」と改め、労働組合としてあくまで踏み止まる決意を示した。一方河野密、菊川忠雄、鈴木悦次郎ら旧全労派は同日「産業報国クラブ」を創立し、産報に追随した。

権力を背景にした産報結成の勧奨が強化されるにつれて、労働組合の解散、組織からの脱退者が相次いだ。通信従業員組合、日本製鉄従業員組合は一九四〇（昭和十五）年二月から四月にかけて解散

し、左派組合の「東京瓦斯工組合」や「東京交通労働組合」も六・七月のころ姿を消した。社大党にも異変が起つた。一九四〇（昭和十五）年二月二日の第七十五議会で軍を批判した齊藤隆夫議員の懲罰に關し、党議に反してその採決に加わらなかつた西尾末広、片山哲、鈴木文治、水谷長三郎など八人は社大党から除名された。八人の人々は安部磯雄とともに「勤労国民党」の結成を志したが、一九四〇（昭和十五）年五月七日、この党が「思想的には社会主義に拠り、組織的には事實上、いわゆる無産階級を地盤とする階級的政党を樹立せんと企図していることは、疑いなきところで」あり、「人民戦線運動に乗ぜられる危険性をもつとも多く有するものである。」として、結社禁止を命ぜられた。西尾、水谷らを除名したあとの社大党も、六月二十六日近衛文麿の提唱した、新体制運動への合流を決定し、七月六日自ら解党した。

このような状況の中で総同盟もついに解散のやむなきことをさとり、一九四〇（昭和十五）年七月二十一日「自発的解散」を決行し、創立以来二十八年の歴史を閉じた。

#### 4. 京都市社会課の勤労者教育

京都地方における労働組合の教育活動、特に労働学校の運動は上述のとおり、主として大正十三、四年のころを最盛期とし、昭和に入つてからは総同盟による数次にわたる労働学校復活の努力がなさ

れたが、名実伴わざその挫折をくりかえした。一九三四（昭和九）年以降ともなると、労働学校再興の意欲すら記録の上に現れず、その後は急速に組合の存在すら否定される運命をたどった。

労働組合の教育活動が、衰滅への過程を歩むのに反比例して、労働者を対象とする教育事業を年とともに充実、整備させたのは、文部省であり、その実施にあたったのは、府県又は市であった。京都市では京都市役所社会課がこれを担当した。

文部省が労働者教育事業に着手したのは一九二九（昭和四）年であった。はじめその対象地域を労働者の密集地域に限定し、東京市（二ヶ所）、大阪市（二ヶ所）、横浜市、愛知県、兵庫県、福岡県（各一ヶ所）でこれを行つた。教授科目は、第一類①哲学、道徳、宗教、歴史 ②政治、法律、経済第二類①自然科学 ②芸術、娯楽、体育 ③職業並生活指導で、この中の各一項を選んで中心科目とし、適宜その他の項目を加えた。教授は「知識の注入に偏せず師弟相互の人格的接觸により、生徒の精神的修養並にその天分の啓発」を目標とし、講師以外に指導員をおく外「感話会、懇談会、討論会、見学、遠足」などをとりいれた。生徒の数は一組五十人、関係官庁、団体、工場、鉱山と協議して優秀労務者を選んだ。授業時間は週二回、夜間約三時間であった。文部省は全国各地のこれら施設の連絡提携をはかるため、昭和六年文部省内に「日本労務者教育協会」を設置し、その整備をすすめたがさらに一九三五（昭和十）年末この協会を母体として「労働者的人格陶冶、公民的資質の向上及びその職業能力の増進を図るとともに、同種の目的を有する各種の団体の連絡、提携を期する」ため「勤

労者教育中央会」を設立した。会長は齊藤実、顧問松田文相、理事長池田斎であった。

(昭和七年九月協調会、我国に於ける労働者教育の趨勢二一一四ページ、日本労働年鑑第十七卷、

昭和十一年版、四三三ページ)

京都市社会課が労働者教育事業をはじめたのは一九三六(昭和十一)年度からであり、この「勤労者教育中央会」につながるものであつた。一九三九(昭和十四)年十二月から一九四〇(昭和十五)年十一月までの一年間のその開設状況は左表のとおりである。

### 一九四〇(昭和十五)年 京都市勤労者補導学級

名 称	対 象	会 場	期 間	入学者数	修了者数
第二回女子店員補導 学級	織物卸問屋 女子店員	中京区役所	昭和一四、一二、一二 一二、一八	五一人	五一人
第五回大工場中堅勤 労者補導學級	日本電池 中堅労働者	上京区役所	昭和一五、一、一八 一、二四	五六	五四
第三回染色工場中堅 勤労者補導學級	中堅労働者	中京区役所	昭和一五、二、五 一、二三	五一	四五

## 5. 軍国日本の壊滅

京都市社会課がこの労働者補導学級にどのような学科目と講師陣を編成したか、その資料を入手することはできず、これを明らかにし得なかつたのは残念であるが、そのテーマの中には戦時下平和産業の問題、中小企業問題、戦時生活の問題などが取り入れられていたよう思う。

名 称	対 象	会 場	期 間	入学者数	修了者数
第四回織物工場中堅 労働者補導学級	西陣織物 中堅労働者	西陣着尺組合 事務所	昭和一五、三、一八 一三、二六	四二人	三四人
第六回大工場中堅勤 労者補導学級	寿重工 中堅労働者	陶磁器工場	昭和一五、七、二九 一八、五		
第一回陶磁器関係中 堅勤労者補導学級	陶磁器工業組 合事務所	陶磁器工業組 合事務所	昭和一五、八、一九 一八、二六	五一	
第五回織物工場中堅 労働者補導学級	西陣織物 中堅労働者	西陣織物工業組 合事務所	昭和一五、九、九 一九、一八	六六	九五
第四回染色工場中堅 労働者補導学級	染色工場 中堅労働者	郁文小学校	昭和一五、一六、一 一一、二〇	五一	九一

この時期、内外の情勢はめまぐるしい転変をとげていた。一九三五（昭和十）年ベルサイユ条約の廃棄を宣言したナチス・ドイツは、一九三八（昭和十三）年から一九三九（昭和十四）年にかけてオーストリア、チェコ・スロバキア等を制圧して、これを無血併合した。一九三九（昭和十四）年八月二十三日、独ソ不可侵条約の締結に成功したドイツは、九月一日ポーランドに武力侵入、ポーランドと相互援助条約を結んでいた英・仏両国は同三日、対独宣戦を布告し、第二次世界大戦がはじまった。一方中国大陸では一九三八（昭和十三）年五月、日本軍は徐州を制圧、同十月には広東及武漢を占領したが、中国軍の戦意は衰えず戦線は膠着した。日本の大陸制覇にともない、中国における英國の権益侵害の問題をめぐっての日英会談（一九三九（昭和十四）年七月）は紛糾し、その解決を見ない七月二十六日、アメリカは日米通商航海条約の廃棄を通告、日本は苦境に立たされた。

ソ連との関係も危険な状況下にあつた。一九三八（昭和十三）年七月の張鼓峰事件は、一応局地の限定戦として短期間に終つたが、翌一九三九（昭和十四）年五月、外蒙国境で起つたノモンハン事件では、同八月まで三ヶ月間にわたり、日ソ両軍の間に凄絶な戦闘がくりかえされた。九月十六日、停戦協定が成立し、事件は終息をみたが、この戦闘で日本軍は大敗北を喫した。

国内の状況もにわかにきびしさを加えた。一九三八（昭和十三）年三月、近衛内閣は国家総動員法と電力国家管理法を制定した。前者は労務、物資、資金、物価、施設をはじめ国民生活のすべての部門を政府の統制の下におくことを委ねる法律であった。政府は「今次事変には直接これを用いない」

と言明していたが、法制定から四ヶ月後の七月には、この法にもとづいて労働者の雇入、解雇、賃金労働時間などを統制した。経済統制が急速に進められた結果、軍需関係以外の中小企業は大打撃をうけ、多数の失業者を生んだ。政情もまた安定しなかった。一九三九（昭和十四）年一月、近衛内閣退陣のあとをうけて成立した平沼内閣は、その年八月、前掲獨ソ不可侵条約締結に「複雑怪奇」の一語を残して辞職した。後継の阿部内閣も成立わずか四ヶ月半の短命に終り、あとをうけた米内内閣も安定を欠いていた。軍部は強力な一元政治を主張し、国民も暗雲の一掃を待望した。このような状況下政治革新の担い手として衆望を担つて登場したのは近衛文麿であった。「内外未曾有の変局に対処するため、強力なる挙国政治体制を確立するの必要は何人も認めるところである。自分は今日枢密院議長を拝辞し、斯くの如き新体制の確立の為に、微力を捧げたいと思う……」と近衛は一九四〇（昭和十五）年六月二十四日、その決意を披れきした。「新体制」という言葉は、たちまち日本全国を風靡（ふうび）し、「いわゆる新体制運動は、にわかにいきおいづき、たちまちにして全政界をあつとうするというおもむきをしめすにいたつた。」（風見草「近衛内閣」二〇三ページ）

近衛による新体制の構想が、まだかたまっていなかつたにもかかわらず、政党は進んで自ら解体し新体制の「バスに乗りおくれまい」とあせつた。七月六日の社会大衆党の解党につづいて、同十六日には政友会の久原、鳩山両派が、二十五日には民政党の永井派が、二十六日には国民同盟が、三十日には政友会の中島派が、それぞれ解党した。最後まで残つた町田忠治総裁のひきいる民政党主流派も

八月十五日遂に解党した。こうして、あつという間に、わが国憲政史上初めての無党時代を現出した。七月十六日、米内内閣は総辞職し、同二十二日第二次近衛内閣が成立した。新体制運動は政府主導のもとにすすめられた。八月二十八日近衛は新体制準備会第一回会合の冒頭、長文の声明を朗読し「万民翼賛」を称え、「下意上達、上意下達」を述べた。これは国民の要望をすいあげて政策をうちたて且つ樹立された政策を国民生活の末端まで浸透させることを意味するものとして好感をよせられた。しかし新体制をめぐって軍部、財界、右翼、旧政党、官界の思わくは入り乱れた。そのはじめ清新にして強力な新党結成を志向した近衛の新体制運動は、この運動をアカだ、憲法違反だ、幕府的存在だと非難する右翼、財界その他の集中的攻撃を浴びたことによつてもろくも挫折し、十月十二日一応「大政翼賛会」の成立を見たが、その発会式での挨拶で近衛は「本運動の綱領は『大政翼賛の臣道実践』といふことに尽きると信ぜられるのであります……これ以外には綱領も宣言もなし」と言い得るのであります」と述べ、新体制運動に期待をよせた正直な国民を失望させた。しかし「大政翼賛会」は、総裁は近衛首相が、地方支部長は各府県知事が兼任するという二重の官製組織として確立され、上から統制組織として国民精神総動員と、戦時下諸統制の強化に重要な役割を担つた。

全国民は大政翼賛会の下部機構としての町内会、部落会の中に組みこまれて、その統制下におかれまた産業報国会、商業報国会など翼賛会傘下の職域組織の一員としても支配された。

一九三八（昭和十三）年以降、府県特高課の推進によって、各企業、事業場にあまねく結成された

産業報国会は、一九四〇（昭和十五）年十一月二十三日「大日本産業報国会」を創立した。職場で働く全員を一経営者までも含めて、強制的に加入させたこの組織は、その綱領に定められたように「事業一家職分奉公の誠を致し、以て皇國産業の興隆に総力を竭さ」せるため、支配者の意思を職域の末端まで浸透させることを期した上意下達の機関であった。しかし元来職場というものは、ただ上からの方的な強圧だけでは、動くものではない。働く人々に働く意欲を起させることが必須の要件である。産報は精神教化を通じてこれを達成しようと努めたのであつたが、それに限界があつた。終始上からの機関としての権威を誇示しながらも、現実には職場の能率を阻害する諸条件について、働く人々の意向を汲みとる懇談会的な機能を併せもつ組織へと転化する側面を、支配者の思惑をこえて、組織自身の胎内にみどりはじめた。産報のもつたこの思われざる側面は、戦後日本の企業別、企業内組合の急速な登場と、密接なかかわりをもつものといわれるが、このことはほぼ誤りないであろう。（大河内一男「暗い谷間の労働運動」二三二ページ）

開戦後、半年余り鳴りをひそめていたドイツは、一九四〇（昭和十五）年四月、電撃的な行動を起してデンマーク、ノルウェーに侵入し、つづく五月には、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグを制圧するとともに、英軍を英仏海峡に追いつめ、六月フランスを降伏させた。ドイツ軍のめざましい勝利に目を見はった日本の軍部は、七月十七日大本營、政府連絡會議をひらいて「世界情勢の推移に伴ふ時局処理要綱」を決定し、独伊との提携の強化、仏印の軍事基地化および資源の獲得、蘭印の重要

資源の確保その他の南方進出策を樹立した。そして一九四〇（昭和十五）年九月二十七日、日独伊三国同盟を締結した。第二次近衛内閣が生れ、大政翼賛会が発足したのはこのような世界情勢の急変するさ中のことであった。九月二十三日、軍部は、北部仏印に進駐を強行、蘭領東インド（インドネシア）にも圧力を加えた。アメリカはさきに七月航空機用ガソリンなどの輸出を制限したが、九月にはさらに屑鉄と鉄鋼の輸出を禁止し、日本をけん制した。日本は日米両国の国交調整を策するかたわら日ソの平和関係を確立する道を選び、一九四一（昭和十六）年四月十三日、日ソ中立条約を結んだ。

その二カ月後の六月二十二日、ドイツは独ソ不可侵条約を破つてソ連に侵入した。七月二十八日日本軍は、南部仏印に進駐、アメリカは石油はじめ重要軍需物資の対日輸出を禁止した。日本ではA(米)、B(英)、C(中)、D(蘭)包囲陣の強化と、国防の危機が訴えられ、対米(英蘭)開戦論がたかまつた。和戦を決しかねた近衛内閣は、十月十三日退陣、東條英機内閣がこれに变成了。事態は悪化の方向へと一路ばく進し、十二月八日ついに日本は、米英軍と衝突、いわゆる太平洋戦争に突入した。

戦備の整わない相手の不意をつくことによつて日本軍は緒戦にめざましい勝利を収めたが、それは半年しか保たなかつた。一九四二（昭和十七）年六月以降、アメリカは反攻に転じた。日本軍は一九四三（昭和十八）年二月のガタルカルナル島撤退を転機に、次々と戦略拠点を失つた。時を同じくして歐州戦線では、独軍がスターリングラードで大敗北を喫し、同九月イタリアは無条件降伏して、戦線から脱落した。一九四四（昭和十九）年六月、日本軍はサイパン島を奪われた。これを契機に日本の

敗色はにわかに濃くなつた。戦争経済が急速に行き詰りを見せたのに加えて、十一月以降米空軍による本土空襲は日とともに激化し、大都市は勿論、地方中小都市にも及んだ。一九四五（昭和二十）年五月ドイツは降伏した。その月米軍は沖縄に上陸し、六月にこれを占領した。七月二十六日、米・英・中三国はポツダム宣言を発表し、日本の降伏を勧告したが、本土決戦、一億玉碎を呼号した日本は、この勧告を黙殺した。米軍は八月六日広島に原子爆弾を投下し、つづいて九日同じく長崎を攻撃した。同九日ソ連は対日参戦し、ソ満国境をこえて怒涛のように進撃した。八月十日日本は「天皇の国家大権に変更を加うる要求を包含し居らざることの了解の下に」ポツダム宣言を受諾する旨を中立国を介して連合国に申入れた。

産業報国会の統制下、軍隊的組織と規律で、がんじがらめにされた労働者たちは、激化する空襲と経済の崩壊に、日本の敗北を予感はしたが、この時点では事態がここまで急速にすすんだことを知り得たものは少なかつた。ところがどうしてこの情報をキャッチしたのか、私の勤務していた大阪郊外の機械工場では、職長クラスの一労働者が「日本は無条件降伏することになつたらしい」と話していた。その二日後の八月十五日正午、私たち二千人の従業員は炎天下直立不動の姿勢で工場の広場に起立し終戦の玉音放送を聞いた。

渡部徹編著

「京都地方労働運動史」

片山 潜

「日本の労働運動」

大河内一男・松尾洋 「日本労働組合物語」明治・大正・昭和

大河内一男 「暗い谷間の労働運動」

大河内一男 「幸徳秋水と片山潜」

鈴木文治 「労働運動二十年」

野坂参三 「風雪のあゆみ」I・II・III

渡部 徹 「友愛会の組織の実態」

石堂清倫・堅山利忠編 「東京帝大新人会の記録」

水谷長三郎伝

野田律太 「労働運動実践記」

高山義三 「わが八十年の回顧」

辻井民之助 「労働運動四十年」

西尾末広 「大衆と共に—私の半生の記録—」

谷口善太郎 「戦前の労働学校の思い出」 雑誌 "どもしび" 昭和三〇・六

安田徳太郎 「思い出す人々」

田村敬男編著

「追憶の山本宣治」

佐々木敏二

「山本宣治」上・下

西口克己

「山宣」上・下

京都府労働経済研究所 「京都地方学生社会運動史」

高桑末秀

「日本学生社会運動史」

「三輪寿壯の生涯」

谷口善太郎 「日本労働組合評議会史」

森戸辰男

「我が国における労働者教育について」

昭和九、八一、一〇 大原社会問題研究所雑誌

風見 章

「近衛内閣」

「総同盟五十年史」 I・II

「日本労働年鑑」

内務省社会局 「大正十一、十二、十三年労働運動概況」

同

「大正十四年労働運動年報」

同

「大正十五年労働運動年報」

京都市労働課

「労働事情を中心として見たる清水焼陶磁器産業」 昭和二四・六

「大阪労働学校十年史」

新聞 「新神戸」「労働者新聞」

「自由新聞」 大正一四・七および八

「同愛」 三二号 大正一五・三

日本経済年報 第二輯

協調会 「我国における労働者教育の趨勢」

文部省学生部 「学生思想運動の沿革」 昭和六年三月

